



独立行政法人 大学評価・学位授与機構
National Institution for Academic Degrees and University Evaluation

大学評価フォーラム

学生からのまなざし — 高等教育質保証と 学生の役割

報告書

平成25年7月22日(月)

於：一橋講堂

主催：独立行政法人 大学評価・学位授与機構

大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

報告書

日 時：平成25年 7月22日（月）13:00 - 17:40

会 場：一橋講堂（学術総合センター2階）

主 催：独立行政法人大学評価・学位授与機構

目次

プログラム.....	1
フォーラム概要.....	2
講演記録	
開会挨拶.....	5
野上 智行(大学評価・学位授与機構長)	
趣旨説明.....	7
川口 昭彦(大学評価・学位授与機構特任教授)	
基調講演 I.....	11
Helka Kekäläinen(ENQA 副会長／フィンランド高等教育評価カウンスル事務局長)	
基調講演 II.....	23
Dan Derricott(リンカン大学学生参画オフィサー)	
グループセッション(GS)	
GS1.....	34
GS2.....	39
GS3.....	43
GS4.....	45
各 GS 報告・質疑応答・まとめ.....	49
閉会挨拶.....	55
岡本 和夫(大学評価・学位授与機構理事)	
資料.....	57
登壇者略歴・報告学生紹介.....	185

プログラム

〔司会：秦 絵里 大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長〕

13:00 13:10	開会挨拶 野上 智行(大学評価・学位授与機構長)	
13:10 13:20	趣旨説明「学生の参画」 川口 昭彦(大学評価・学位授与機構特任教授)	
13:20 14:05	基調講演 I 「質保証における学生参画の理念と実践: ENQA の観点とフィンランドの例」 Helka Kekäläinen(ENQA 副会長/フィンランド高等教育評価カウンシル事務局長)	
14:05 14:50	基調講演 II 「質への学生参画—英国の事例: パートナー & プロデューサー」 Dan Derricott(リンカン大学学生参画オフィサー)	
14:50 15:05	休憩	
15:05 16:15	グループセッション	
	グループセッション 1 「学生参画型 FD と質保証」 天野 憲樹(岡山大学准教授) 曾根 健吾(関東圏 FD 学生連絡会前学生代表) 川口 昭彦(大学評価・学位授与機構特任教授)	グループセッション 2 「これからの授業アンケートと生活実態調査」 田中 岳(九州大学准教授) 岡崎 成光(早稲田大学教務部調査役) Helka Kekäläinen(ENQA 副会長)
	グループセッション 3 「学生が評価委員?!」 鈴木 典比古(国際教養大学理事長・学長) Dan Derricott(リンカン大学学生参画オフィサー)	グループセッション 4 「質保証への学生参画と学内マネジメント」 Nik Heerens(エクセター大学 PhD 研究員) 北原 和夫(東京理科大学教授)
16:15 16:35	休憩	
16:35 17:35	各グループセッション報告・質疑応答・まとめ 司会: 土屋 俊(大学評価・学位授与機構教授) グループセッション 1 報告者: 今宮 佳奈未(日本大学) グループセッション 2 報告者: 石口 純平(青山学院大学) グループセッション 3 報告者: 河野 桃(神戸大学大学院) グループセッション 4 報告者: 長坂 佳世(岡山大学)	
17:35 17:40	閉会挨拶 岡本 和夫(大学評価・学位授与機構理事)	

フォーラム概要

平成 25 年度の大学評価フォーラムは、「学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割」と題し、高等教育という学びの場の主人公である学生の役割に焦点をあて、学生参画による質保証に関して、欧州における歴史的背景、基本的考え方、その実施の実態を理解し、欧州諸国において質保証事業に参加した学生の経験を共有しながら、わが国における学生参画による教育改善の試みの事例報告も交えつつ、高等教育質保証の将来のあり方について議論を深めました。

海外から 3 名、国内から 6 名の有識者を招き、2 つの基調講演と 4 つのテーマに分かれてグループセッション（GS）を実施しました。GS 後には、全体討議として、各 GS に参加した学生によるセッション毎の報告や質疑応答など、会場全体として活発な議論が交わされました。

当日は、大学をはじめとする高等教育機関を中心に教員、職員、そして学生など 400 名を超える参加がありました。

大学評価フォーラム

学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

講 演 記 録

開会挨拶

野上 智行（大学評価・学位授与機構長）

司会：

本日は、大学評価・学位授与機構主催の平成 25 年度大学評価フォーラム「学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割」にご参加いただきまして誠にありがとうございます。定刻となりましたので、ただ今より開催させていただきます。本日の進行を務めさせていただきます、大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長の秦と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のフォーラムの開催につきましては、公益財団法人大学基準協会様、公益財団法人日本高等教育評価機構様、一般財団法人短期大学基準協会様よりご後援をいただいております。この場を借りて御礼申し上げます。

本日の予定ですが、配布資料の中にプログラムがございますので、ご参照いただきたいと思います。本日のフォーラムでは、質保証への学生参画に関しまして、ヨーロッパにおける歴史的背景や基本的な考え方、実施体制など実態をご講演いただきます。その後 4 つのテーマに分かれて、グループセッションを開催する予定となっております。

それでは、早速プログラムに入らせていただきます。初めに、大学評価・学位授与機構長の野上智行より、開会の挨拶を申し上げます。

野上 智行（大学評価・学位授与機構長）：

皆さん、こんにちは。大学評価・学位授与機構長の野上でございます。本日は、当機構の大学評価フォーラムに、これほど多くの方々に参加いただきまして、誠にありがとうございます。

大学評価・学位授与機構は、3 つの大きな役割を担っております。1 つ目は、評価事業です。これは大学、高等専門学校、法科大学院に対する認証評価と、国立大学の教育研究評価に関わる業務でございます。大学については、認証評価とは別に当機構が定める選択評価事項の評価も実施しております。

2 つ目は学位授与事業です。短期大学や高等専門学校を卒業、あるいは専門学校を修了するなど、すでに高等教育機関において一定の学習を修めた後、大学における科目等履修生度などを利用して高等教育レベルの学習を行う方に学士の学位を授与しているほか、省庁大学校のうち、大学の学士課程、大学院の修士課程および博士課程に相当する教育を行っている当機構が認定した課程の修了者に、学位取得の途を開いております。

そして 3 つ目ですが、私どもは、我が国の高等教育の発展のために、諸外国の質保証機関の方々と連携をして調査研究を進め、このようなフォーラムを開催することなどによって、その成果を我が国の高等教育関係者とシェアするという、大きな役割を持っています。

この3つ目の役割を果たそうと、毎年開催させていただいているこの大学評価フォーラムも、今回で7回目を迎えました。今回は、「学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割」をテーマにいたしました。世界各国における大学の評価の観点は、学習成果（Learning Outcomes）、あるいは高等教育の質保証、あるいは教育情報の公開です。教育情報の公開については、今、ユネスコの地域条約等で、大学に関する情報を国際的に共有するようなシステムが必要だということが言われております。これらの評価の観点はいずれも、学生諸君の学びに関することです。このことについて、我が国の高等教育界は、これまでも取り組んで参りましたが、今回、ヨーロッパにおける学生諸君の高等教育への参画状況、その歴史、そして現実どのように展開されているか、そしてどういう課題があるかということをお場で皆さんと一緒に学ばせていただいて、その後の4つのグループセッションにおいて、会場の皆さまと一体となって討議を進め、これからの高等教育の質保証に学生はどのように参画をしていくことができるのであろうかということについて、グループ毎に議論を深めていこうと考えております。

その議論を深めるために、本日は海外から3名の方々をお招きしております。欧州高等教育質保証協会（ENQA）の副会長、そしてフィンランドの質保証機関の事務局長を務めていらっしゃる、ヘルカ・ケカライネンさんです。それから、英国のリンカン大学の学生参画オフィサーであり、英国高等教育質保証機構（QAA）の学生理事も務めていらっしゃる、ダン・デリコットさんです。そして、英国のエクセター大学の PhD 研究員であり、ベルギーのフランドル大学及びユニバーシティ・カレッジ評議会の質保証委員会議長を務めていらっしゃる、ニック・ヘレンスさんです。この3名の方々のお話を聞き、そして皆様と各グループセッションにおいて議論を深めたいと思います。このことを通して、我が国の高等教育の質保証に関し、「学生のまなざし」に焦点をあてた際にどういうことができるかを、学生、教員、職員というそれぞれの立場で協議していきたいと思っております。

本日のこのフォーラムが皆様方それぞれにとって意味のあるものになりますように願っております。本日は、どうぞよろしくお願いたします。

司会：

どうもありがとうございました。

趣旨説明「学生の参画」

川口 昭彦（大学評価・学位授与機構特任教授）

司会：

それでは、当機構特任教授の川口昭彦より「学生参画」と題しまして、本日のフォーラム全体の趣旨説明をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

川口 昭彦（大学評価・学位授与機構特任教授）：

ただ今、ご紹介いただきました川口でございます。今日は、暑い中お集りいただきましてありがとうございます。

では、最初のスライドをご覧ください。私どもは、2007年から毎年このようなフォーラムを企画してまいりました。最初は、評価が始まろうとする時でしたので、評価自体の説明や、その評価をそれぞれの大学でどのように利用していただくか、といった内容を中心に行いました。3回目は内部質保証、自己評価と言った方がいいのでしょうか、これが重要であるという内容のフォーラムを行い、先ほど機構長の挨拶にもありましたが、4回目からは学習成果（Learning Outcomes）と質保証に焦点を当てたフォーラムを開催してきました。直近3回のフォーラムでは基本的に、学習成果にスポットライトをあてた評価をしないとイケない、大学自身も学習成果をターゲットに考えなければいけない、ということをお話しさせていただきました。そして、その学習成果の主体は学生ですので、7回目となる今回のフォーラムでは、学生の参画をテーマとして取り上げさせていただきました。

学生参画は、英語で Student Engagement、あるいは Student Participation と言いますが、日本の方々から自分達はしっかりアンケートを取っているので十分やっている、という声を聞くことがあります。最初にお断りしておきますが、ここで申し上げる学生参画は、アンケートを取るといった学生にとって受動的なものではなく、もっと積極的に学生が関与するものです。学習成果を言い出すからには、もっと積極的に学生に加わっていただく必要がある、という意味での学生参画であるということをご理解いただきたいと思います。それをご理解いただいた上で、趣旨説明をしたいと思いますが、時間に限りがありますので、ポイントだけお話しさせていただきたいと思います。

私は1960年、日米安全保障条約の年に大学に入学しました。そして、大学院を終えたのがちょうど安田講堂の事件があった年ですので、大学紛争の中にどっぷり漬かった生活を送ったこととなります。学生参画の話を始めるとどうも血が騒いで終わりそうにありませんので、簡単にそのポイントだけまとめてみました。少し乱暴ですが、スライドに「学生叛乱」と書かれていると思いますが、これは1968年頃、世界的にほとんどの国で起こりました。西欧、米国、日本などで同時多発的な現象として起こりました。ただ、その後どの

ように解決されたか、あるいは、学生参画がどのように大学の教育の中で取り入れられたかは、国によって非常に大きな差があることが知られています。例えば、学生アンケート調査は、米国ですと、1970年代に導入されて、それがかなりの成果を生んだということは歴史が物語っております。一方、我が国で導入されたのは、ご存じのとおりかなり最近です。米国での導入後20年以上経ってから、日本でそういうことが言われ出したのです。欧米諸国と日本は、この紛争が同時多発的に起こったにも関わらず、その後の学生の質保証への参画には、かなり大きな差があったということがはっきりしています。年月だけを言っても、20年ぐらい差があったと言えると思います。

では、その原因は何でしょうか。特に1970年代の欧米と日本の状況について、原因と考えられるものをまとめました。ポイントは4番目だと思います。欧米において1970年代後半は、まさに工業化社会から知識基盤社会へというポスト工業化社会の動きが非常に強くなった時代ですし、ある意味では非常に不況の時代でした。ただ日本の場合には、幸か不幸か1970年代はまさに高度成長の時代で、製造業を中心にある意味では非常に好景気でしたし、発展もしました。これが、大きな差が出た原因のひとつではないかと思います。結局、当時の学生運動は若かりし頃の反抗であって、あまり社会には影響を与えない、言わば一過性のものとなってしまいました。少し乱暴なまとめ方かも知れませんが、そういうところに大きな差があったのではないかと感じます。

次のスライドは、ヨーロッパの質保証と学生参画についてまとめたものです。ボローニャ宣言から始まり、欧州高等教育質保証協会（ENQA）が設立され、「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン（Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area: ESG）」が策定されました。それから、欧州質保証機関登録簿（European Quality Assurance Registry for Higher Education: EQAR）の制度が開始されています。特にESGにおいては、質保証への学生参画が明記されています。内部質保証、外部質保証、あるいは外部質保証機関に関しても、学生参画というキーワードが必ず入っていることを是非ご理解いただきたいと思います。

ESGの内容は、次の3つのスライドをご覧くださいなのですが、学生というキーワードがある部分をポイントとして書き出してみました。第1部は、「高等教育機関の内部質保証に関する欧州基準とガイドライン」ですが、内部質保証への学生の関与について記載されています。第2部は、「高等教育の外部質保証に関する欧州基準とガイドライン」ですが、やはりここにも学生の参加というキーワードが入っていることがおわかりいただけると思います。それから第3部は、「外部質保証機関に関する欧州基準とガイドライン」ですが、質保証プロセスの中で学生の意見を求めることが明記されています。ヨーロッパでは、学生参画というキーワードが非常に重要で、それは質保証の中で非常に大きな役割を果たしているのだということをこの3つのスライドからご理解いただければと思います。

本日は、先ほど機構長から紹介がありましたとおり、フィンランドとイギリスから講演者をお招きしましたので、それぞれの国における質保証への学生参画の事例を次のスライドに挙げてみました。

フィンランドについては、後ほど **Kekäläinen** さんからお話があると思いますが、歴史的にかなり早くから学生参画に取り組んでいたのではないかと思います。イギリスではここ最近、法律的にも学生参画が非常に重要であると強調され出しました。**QAA**（英国高等教育質保証機構）の理事会に学生代表も加わっているというところまでできています。

本日の大学評価フォーラムでは、日本もヨーロッパと同じようなことをしましょうと強調するつもりはありません。ヨーロッパではこのように学生の参画が進んでいますが、日本はこれからどのようなことを考えれば良いのでしょうか。それは、世界に向かって日本はこれだけ学生参画を考え、実行しているということを世界に発信することが必要です。そういったことを是非皆さんに考えていただきたいと思い、今回のテーマで企画したわけです。

次のスライドをご覧くださいなのですが、学生参画にはいくつかの形態があります。

まず、全国レベルの質保証機関のガバナンスへの参画です。機関の運営などにも学生が関与している場合があります。また、第三者評価機関の評価チームに、委員として、あるいはオブザーバーとして参加する形態もあります。それから、各大学において自己評価書を作成する際に参加しているという形態もありますし、第三者評価の評価にかかる意思決定プロセスに参加している形態もあります。あるいは、評価結果が出た後に、学生の代表ユニオンといったところに依頼し、フォローアップ・プロセスに参加している形態もあります。このような形態をお考えいただき、日本では現状としてどのようなことができるのか、あるいは将来的にどのようなことを考えるべきなのか、ということをお考えいただきたいということで、このテーマを企画したことをまずご理解いただければありがたいと思います。

次のスライドでは、質保証における学生の役割として、それぞれの教育機関レベル、第三者評価レベル、質保証機関のガバナンスレベルではどのようなことが考えられるかについてまとめてみました。ヨーロッパでは、だいたいこのような形態で進んでいるのだということ、後ほどゆっくりお読みいただきたいと思います。

では、学生参画にはどのようなメリットがあるのでしょうか。もちろんヨーロッパと日本では、学生ユニオンに対する考え方も異なりますので、日本ですぐにはできるかどうかわかりませんが、是非その辺のことについてもお考えいただきたいと思います。学生参画のメリットですが、まず 1 つ目は、学生の参画は様々な付加価値を産み出します。現在は、多様性が非常に強調されていますし、学習の成果や質をしっかりと評価することが非常に重要となっています。学習成果（**Learning Outcomes**）が強調される中、**Learning** の中心である学生の意見は非常に重要ですので、学習の質を評価（**Assessment**）する過程で学生

が基本的な役割を担います。また、多様化の理解や学生に対する教育的効果も期待できません。

2つ目のメリットは、質保証プロセスの向上が期待できる点です。これまでは、教育を行う側の立場からの評価だったかも知れませんが、教育を受ける側の視点からの評価や意見は非常に重要です。学生の視点が、何かこれからの新しい解決の糸口としても期待できます。

3つ目は、教育機関、質保証機関にとって、質向上に役立てることができる点です。それには、学生参画が質向上に非常に役立つという認識を持つことが非常に重要です。その上で、今の日本の状況でどのようなことができるのかを、是非皆さんと考えたいと思います。

まとめは、今申し上げたことの繰り返しになりますが、学習成果が質保証の重要なテーマであることは、学習の主役である学生の参画は恐らく必要条件になるでしょう。そして、今やユニバーサル化の段階に突入した高等教育においては、多様化するニーズを把握するために、積極的な学生の参画が非常に重要です。また、質保証プロセスに学生の参画を求める方向性は、国際的な流れです。日本では、いったいどのような参画の形態が良いのでしょうか。先ほど申し上げたように、参画の形態は多様ですので、今できること、あるいは将来に向かってどういうことができるかということを考えていく必要があるということ、趣旨説明とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

司会：

川口先生、どうもありがとうございました。ただ今の趣旨説明に関するご質問・コメントは、後半の「各グループセッション報告・質疑応答・まとめ」のセッションで時間を設けたいと思いますので、その際よろしく願いいたします。

【概要】

欧州において学生参画への取り組みが開始された背景には、これまでの「学生は教育の受け手」とされた教育の概念が、この数十年で「共同の行為者」とみなされることになったことが影響している。

学生参画の在り方は、学生によるフィードバック提供による「情報提供者としての学生」、問題解決の議論を行う「行為者としての学生」、学習経験を通じた「専門家としての学生」、質保証における「パートナーとしての学生」という4つに分類することができる。

欧州高等教育質保証協会 (ENQA) でも、外部質保証プロセスだけでなく、高等教育機関の内部質保証プロセスにも学生参画を強く推奨し、欧州高等教育圏 (EHEA) の確立を目指すボローニャ・プロセス署名国の教育大臣らも、高等教育機関、教職員、そして学生との間にパートナーシップがあつてこそ、EHEA が確立できるとしている。

また、高等教育の質保証における共通の参照点である「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン (ESG) : 2005 年」では、内部質保証や外部質保証プロセスにおける学生の参加が含まれるべきであると明記されており、ENQA が行っている高等教育機関に対する外部評価を実施する際にも、学生が常に外部評価パネルに参加している。

さらにボローニャ・プロセスの開始とともに、欧州学生ユニオン (ESU) が 2007 年に組織されている。2015 年の採択を目指し、現在、見直しが行われている新たな ESG においても、ESU は、学生が大学にとってフルパートナーであり、高等教育機関や国の教育システムにおける意思決定プロセスや質保証システムの構築においても、学生が積極的に関与すべきと主張している。

フィンランドにおける学生参画は、1921 年から始まるが、1960 年代には、大学における重要な意思決定を伴う場合は、教員、職員、学生の代表を意思決定組織に参加させなければならないことが大学法で明記された。その後は学生が必ず大学のすべての意思決定組織に加入している。すべての学部生が、自動的に地域および全国学生ユニオン (SYL) のメンバーとなり、そのポジションも大学法で保護されている。

また、どの学生組織にも教育的な問題について責任を担う学生がおり、教職員との緊密な活動を行っていることから、学生をフルパートナーとするモデルを質保証の中で構築することができた。

学生が有する学習や学生問題にかかる専門知識を活用することで、大学は質保証の信頼性や向上を可能とさせ、また、学生は様々な能力を身に付けられる機会を得ることなど、学生参画の強みは多い。しかし、学生に対するレーニングの実施、動機づけや報酬、学生の視野を最大限活用するための学内体制の構築といった課題もある。また、効率重視の企業経営スタイルの広がり等により、学生参画が脅威にさらされているという ESU の主張もある。

司会：

続きまして、講演に移らせていただきます。各講演者に対する質疑応答につきましては、それぞれの講演の後に少し時間を設けておりますが、時間が足りない場合は後半の「各グループセッション報告・質疑応答・まとめ」のセッションでお伺いする機会を設けたいと思います。

では、本日最初の講演は、「質保証における学生参画の理念と実践：ENQA の観点とフィンランドの例」と題しまして、欧州高等教育質保証協会（ENQA）副会長でいらっしゃる Helka Kekäläinen さんよりご講演をいただきます。

Kekäläinen さんは、2009 年から ENQA のボードメンバーとしてご活躍され、バルカン諸国や中央アジアにおける人材育成事業や評価機関の評価者のトレーニングなどに携わっていらっしゃいます。そして、INQAAHE という全世界の高等教育質保証機関が集まる国際ネットワークの総会や、各国で開催されます高等教育質保証に関するセミナー等で数々の講演をしていらっしゃいます。

それでは Kekäläinen さん、よろしくお願いいたします。

Helka Kekäläinen（ENQA 副会長／フィンランド高等教育評価カウンスル事務局長）：

ご紹介いただきましてありがとうございます。東京で、皆様に「質保証における学生参画の理念と実践」についてお話することができて、大変嬉しく思います。ENQA の観点をご紹介すると同時に、フィンランドを例としてお話をしたいと思います。

まず、どのような概念上の変化があって学生参画に関心が向けられたのかについて、お話ししたいと思います。北欧高等教育質保証ネットワーク（Nordic Quality Assurance Network of Higher Education）は、2003 年に学生参画（student involvement）にかかる調査を行い、北欧諸国や他のヨーロッパ諸国で学生参画（student participation）が望まれるに至った変化や原則、考え方を明らかにしました。

第一に、この数十年で教育の概念が大きく変わりました。知識の提供や獲得に関する研究が行われたことで、従来型の知の受け手としての学生モデルが疑問視されるようになり、それに代わって能動的な学習、知識形成における個人の内部プロセスとしての学習が教育の理論的理解として主流となってきました。望ましい教育パラダイムとして、学習（learning）が教授（teaching）にとってかわったのです。このことは先ほどの川口先生の話でも出てきていたと思います。そして、やはり教育のパラダイムを変えるのであれば、学生の捉え方も変わらざるを得ません。学生が知の創造者として見られるのであれば、学生は教育の単なる参加者や受け手ではなく、共同の行為者と見なされることとなります。課題ベースの学習（problem-based learning）といった新しい学習の在り方が出てきたことで、自身の学習プロセスの評価を含む学習の責任は、学生の方に移行しています。

また、ヨーロッパにおける目標設定においては、高等教育の役割は、単に知識や技術を

身につけさせることではなく、学生を将来のキャリアに向けて準備させることとされています。教養教育の伝統では、教育は個人としての成長も目指しています。包摂・参加の意識は、自分を批判的に評価する能力と同様に、伝達可能な技術や個人の成長を達成するための必須の要件と見なされています。

民主主義社会の発展に貢献することも高等教育の役割です。これもヨーロッパの目標設定に含まれています。高等教育がこうした役割を担うのであれば、高等教育機関は民主的な組織でなければなりません。つまり、高等教育機関の評価には、どの程度民主的な組織かという評価も含まれます。そして、関係者全員からインプットを求めているかどうか、民主的な機関かどうかを判断するひとつの基準となります。

高等教育機関は、現在そうであるだけでなく、今後さらに知識社会の変化の影響を受けることとなります。このような社会においては、意思決定が必要とする仕事が増加するとされていますので、高等教育機関は、能動的に意思決定ができる人材の育成が求められるようになります。知識社会では、生涯学習も求められます。これからの高等教育は、繰り返し、状況に応じて、学生主導で行うものと見られています。となりますと、機関としての教育の管理が課題になりますし、教育の評価も影響を受けることとなります。

このような考えが背景にあると数年前に明らかにされましたが、これは今現在でもその通りだと思います。

では、ENQA の視点についてお話したいと思います。一部すでに紹介しましたので、繰り返しのなるところもあるかも知れませんが、特に問題にはならないだろうと期待します。最初に、ENQA は、European Association for Quality Assurance in Higher Education (欧州高等教育質保証協会) のことです。ENQA は、外部質保証プロセスだけでなく、高等教育機関の内部質保証プロセスにも学生の参画を強く推奨しています。また、ボローニャ・プロセスは、ヨーロッパレベルでの自主的なプロセスのひとつで、今ではヨーロッパの国々、EU 加盟国のほか、EU 非加盟国も参加しており、計 47 の国々がこの自主的なプロジェクトに署名し、ヨーロッパ全体でひとつの高等教育圏を築こうとする欧州高等教育圏 (European Higher Education Area: EHEA) の確立を目指しています。そして、このボローニャ・プロセスでも、高等教育の質保証における学生参画の重要性が増しています。ボローニャ・プロセス署名国の教育大臣は、高等教育機関とその教職員、学生との間にパートナーシップがあつてこそ、EHEA が確立できるとしています。

先ほど、川口先生のお話にもありましたが、高等教育の質保証における共通の参照点が、「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン (Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area: ESG)」で示されています。これは、ボローニャ・プロセス署名国の教育大臣によって 2005 年に採択されたもので、ENQA は欧州大学協会 (European University Association: EUA)、欧州高等教育機関協会 (European Association for Institutions in Higher Education: EURASHE)、欧州学生ユ

ニオン (European Student Union: ESU)、当時は欧州学生情報局 (ESIB) と呼ばれていましたが、とともに ESG の草案の作成にあたりました。

すでにお聞きのとおり、ESG には内部質保証の戦略、方針、手続きには学生の役割が含まれるべきであると明記されています。教育プログラムと学位の質保証には、学生の参加が期待されています。ですので、何かしらのプログラムがあれば、それらのいずれにも学生が参加しなければなりません。また、外部質保証プロセスにも学生の参加が含まれるべきであり、外部評価専門家パネルには、必要に応じて、学生メンバーを入れることとされています。例としては、ENQA がメンバー機関に対して外部評価を行う場合には、ESU が推薦した学生が、常に外部評価専門家パネルに参加しています。ENQA は ESG をできる限り実践するよう各国に推奨していますが、実際にはどうかと言いますと、高等教育の質保証における学生の役割というのは、ヨーロッパといえどもそれぞれ国によって違います。国内の制度の要件や文化、歴史的な学生の役割によって違ってきます。

学生参画については、Alaniska と Eriksson が「Student involvement in the processes of quality assurance agencies」(2006 年発行) の中で、便利な分類を行っています。

まず 1 つ目は、情報提供者としての学生です。学生からのフィードバックの提供は、最も一般的な学生参画の在り方です。ただ、どんなフィードバックがいつ、どのように提供されるかは多様です。通常はコース終了後、あるいは学期 (term) 中に少なくとも一度は行われることになっていて、定量的・定性的な手法がとられています。

2 つ目は、行為者としての学生です。学生は単なる情報提供者ではなく、フィンランドやヨーロッパの大学の多くでは、学生が独自にフィードバック用の回答用紙を作ります。教員と協力しながら作る場合もあります。フィードバックを集めて、分析するのも学生であるということもよくありますし、気楽な雰囲気の中で、イノベーティブで問題解決型の議論を行うような教職員と学生の研修ワークショップの開催を学生が担当している場合もあります。

3 つ目は、専門家としての学生です。質保証の焦点が teaching の質ではなく、learning の質にあてられるべきであれば、学生の役割は当然重要になります。フィンランドでは、学生は学びの専門家と見なされています。学生は、自分たちがどのようにして学習成果を得たのかを知っていますし、学習成果を得るプロセスに teaching がどのように役に立ったかを理解しています。ですので、teaching は学生の学習経験を通して評価 (evaluation) されるべきであり、実際にどの程度学習のプロセスを支援したかに基づくべきです。学生の知識を利用するにあたっては、ワークグループや会議に学生を招くなどして、学生の意見を広く求めるという形をとっています。専門家として学生を扱うことは、今日のフィンランドにおいては、文化としても期待されており、これには教職員と学生双方が前向きな態度で捉えることが必要となります。最初は学生のフィードバックはうるさい文句と見られていましたが、今では建設的な専門家からのフィードバックとして捉えられています。

何年もかかってようやくここまでやってこれることができました。簡単なことではありませんでしたが、学生を開発チームに参加させ、教職員に学生の専門的知識の重要性を示すといった取り組みを行ってきた結果、教職員がそれを認識するようになり、学生と教職員の間に密接なパートナーシップが生まれ、学生を専門家として尊重するそのコミットメントも共有されるようになりました。

4つ目は、パートナーとしての学生です。学びは、教員と学生が密接に協力してこそ達成されます。質保証における学生参画に関するパートナーシップの発展は、ごく自然な成り行きの結果だと言えるでしょう。このパートナーシップはさらに強化されつつありますが、そのやり方としては、休憩時間を一緒に過ごしたり、いろいろなイベントに参加したりということを行っています。学生と教職員とのパートナーシップの構築により、お互いに真の建設的な対話が可能となり、内省的なフィードバックが得られるようになります。教職員はパートナーとして学生を扱わなければなりません。そして気楽で建設的な雰囲気を作り出さなければなりません。そうすることで、よりオープンで信頼できる質保証に繋がると考えられます。

少しだけ ESG の見直しについてお話ししたいと思います。すでにご存じかも知れませんが、現在、見直しを行っており、明確性、適応可能性、有用性をさらに高めようとしています。また、その適用対象の範囲も広げようとしています。この見直しにあたっては、まずは E4 と呼ばれる ENQA、ESU、EUA（欧州大学協会）、それから EURASHE（欧州高等教育機関協会）が、Education International という教員組織、BUSINESSEUROPE、それから欧州質保証機関登録簿（European Quality Assurance Registry for Higher Education: EQAR）と協力して提案することになっています。ヨーロッパレベルではたくさんのステークホルダーがいることがお分かりいただけると思いますが、これらのステークホルダーが一緒になってこの新しい ESG を作ろうとしているわけです。ESG が非常に重要であるということが、これだけステークホルダーがいることでお分かりになると思います。E4 はそれぞれ、47 のボローニャ・プロセス署名国の高等教育機関や質保証機関において、ESG がどのように実施され利用されてきたかを確認するために、メンバー組織と協議を行いました。協議の結果、ESU から新しい ESG への提案がなされました。新しい ESG は 2015 年の採択を目指しているのですが、ESU からの提案は、国の質保証機関のガバナンスへの学生参加（student participation）を規定すべきだというもの。国の質保証機関のガバナンスや外部評価（review）のチームに学生が加わるということは、まだすべてのヨーロッパ諸国で行われているわけではありません。外部評価だけでなく、内部評価（evaluation）への学生参画も同様です。学生はフルパートナーであるという考えが共通の概念となるように、学生参画についてははっきりと一貫した定義づけを行うべきであると ESU は主張しています。特に質保証にかかる大学や高等教育の意思決定プロセスにおいて、フルパートナーや重要な関係者としての学生の地位を確立するために、ESU は学生参画の規定を求めている

ます。また ESU は、高等教育機関や国の教育システムにおける意思決定プロセスにおいて、学生をフルパートナーとして認めることは、高等教育の質向上のために最も重要なことであると明言しています。つまり、学生は高等教育機関における運営組織に参画すべきであり、国レベルの協議にも参加すべきということです。また、国や高等教育機関における質保証システムの構築に参画すべきであり、全国的な質保証機関や高等教育機関における質保証システムの創設にも関与し、創設された質保証組織において積極的な役割を果たすべきということです。ヨーロッパでは、学生の影響力が非常に大きいことがおわかりいただけると思います。学生はあらゆる組織で重要な役割を果たしており、特に教育政策の決定において、強い発言権を持っています。

それでは、実現への道がどのようなようであったかをお話したいと思います。歴史を振り返って、フィンランドを例としてお話をしようと思います。ヨーロッパ諸国は、非常に多様に富んでいますので、私がよく分かっているフィンランドの説明をしようと思います。高等教育においてフィンランドの学生が、いかにしてこのような重要な役割を担うようになったのか、学生ユニオンや学生運動の歴史について話をしていきたいと思います。

フィンランドの全国学生ユニオンは SYL (National Union of University Students in Finland) と呼ばれています。SYL は 1921 年に、2 つの地域学生ユニオンによって設立されました。国際的な会議でフィンランドの学生を代表するために、全国レベルの組織が必要だったのです。すでに 1930 年代には国際的な学生や実習生の交換制度を構築し、近隣諸国と積極的に協力していました。フィンランドに関する書籍を翻訳して出版する、ということも行っていました。

そして、第二次世界大戦後、新たにグローバルな学生活動が出てきました。SYL は、国際学生ユニオン (International Union of Students: IUS) の創立メンバーの 1 つとなりました。しかし、この IUS はグローバルな協力ということには問題があることが明らかになりました。一部の学生ユニオンは共産主義の学生組織を目指し、他方、様々な国の学生に具体的なサービスを提供する非政治的な国際組織の考えを持った学生ユニオンもありました。設立会議において、すでに明らかな意見の違いが問題となったのです。そして、IUS の執行部は共産主義側が握り、共産主義組織になってしまいました。当時、世界を取り巻いていた冷戦の対立構造ですが、学生ユニオンも例外ではありませんでした。

その後 SYL は、ハンガリー動乱が 1956 年に起こったのを契機に IUS を脱退しました。これはソビエトがブタペストを侵攻した時でした。IUS は支持しましたが、フィンランドのユニオンとしては合意できないということで脱退し、逆に国際学生会議 (International Student Conference: ISC) という IUS と対抗する組織に加盟しました。2 つ対立する組織があったのですが、一方から他方に移ったわけです。

しかし、1967 年にアメリカの諜報機関である CIA (アメリカ中央情報局) が間接的に ISC に対して資金提供を行っていること、また、ISC は IUS の共産主義の傾向に対抗するため

に、全米学生協会（United States National Student Agency: USNSA）から学生をリクルートしていることが発覚しました。政治的な問題が生じている中では、共通の関心事項を見出すことが困難だということは、お分かりいただけるかと思います。

その後、資金不足のため ISU が 1969 年に解散したことで、再び IUS が唯一の世界的な学生組織となりました。フィンランドのユニオンは、1971 年に義務を負わない準会員というポジションで IUS に再加入しましたが、1995 年に再び脱退することになりました。

第二次世界大戦前までは、国際活動が SYL の主な優先事項でしたが、その後は、社会福祉や教育政策といった国内政策が重要視されるようになりました。SYL は常に学生や教育に関する事項、例えば健康サービス、住宅、学習支援、助成制度、環境問題、平等といったことに積極的に関与し、主導権を握ってきました。

1960 年代になって、フィンランドの学生は、大学のすべての意思決定におけるより重要な役割を要求し始めました。その結果、革命的な三部構成の制度が大学の意思決定のすべてのレベルで作られました。この三部構成の制度ですが、これによって、重要な意思決定を行う場合には教員、学生、そして職員の代表を必ず意思決定組織に入れなければいけないということになりました。全学のレベル、学部レベル、学科レベルの意思決定組織に教員、学生、職員が常に入っていないとされなければいけなくなりました。

そして、ほんとうに重要なことは、このような取り決めをフィンランドの大学法の中に正式に記すということでした。学生が意思決定組織に入れないときには、法律は学生の側に立つということになったのです。ほんとうに大きなことでした。当時は政府も、この三部構成の制度に非常に友好的であったように思います。これが、フィンランドにおいてこの時期にフルパートナーシップを構築できるようになったかという経緯です。1960 年代以降、学生は大学のすべての意思決定組織に入っています。

もうひとつ、フィンランドの特徴的なところなのですが、何故フィンランドが学生を容易に組織化できたかということの説明したいと思います。フィンランドでは、全学部生は自動的に地域の学生ユニオンのメンバーになります。そして、各機関のユニオンは、全国ユニオンである SYL のメンバーですので、全学部生は自動的に SYL メンバーになります。地域の学生ユニオンは、大学内の正式な意思決定組織すべてにおいて、参加する学生代表を選出する責任を担っています。ユニオンは学生の代表ですので、学生の利益を第一に活動します。そして、組織としての学生ユニオンは、重要な問題について議論を開始する責任を担います。また、学生ユニオンのポジションというのは、大学法で定義されています。法律になっているので、大学が勝手に学生ユニオンをストップさせるといったことはできないのです。法律に書いてありますから。

そして、フィンランドの大学においては、学生が学科レベルの学生組織に所属していることも非常に一般的です。学生組織は、学生の福祉のために非常に活発な活動をしています。どの学生組織にも、教育的な問題について責任を担う学生がおり、学生組織は教室内でものすごく緊密な活動をしているので、スタッフとの間によりパートナーシップを構築

することができます。

また、フィンランドにおいては、大学というのは学術的共同体 (scientific community) と見られています。ですから学生も、単に授業を受けるだけの存在ではなく、学術機関における若いメンバーと見なされています。学生も教員と同様に知の探求者であり、学生と教員の間には経験のレベルの違いしかありません。授業料が無いということも、学生をカスタマーというよりは、パートナーとみなすことに役立っているのかも知れません。学問の自由もフィンランドの大学での学びにおいて、重要な特徴となっています。程度や解釈の差はありますが、学問の自由とは多くの場合、講義は義務ではなく、学生は自らの学びを自らがデザインする責任があることを意味します。もちろん、フィンランドでいう学問の自由には短所もありますが。

現在フィンランドは、ヨーロッパにおいて、学生をフルパートナーとするモデルを高等教育質保証の中で持つことができている国の 1 つとなりました。これは、大学意思決定の中に学生を参画 (involvement) させたことに端を発しています。学生は道に出てデモをするのではなく、委員会に出席し、民主的なシステムの中で交渉術や協力関係の構築方法、妥協策を学んでいきました。自動的に地域の学生ユニオンのメンバーになることに加え、教員と学生の間に階層意識が少ないことも、フルパートナーの関係が作り易かった理由だと思えます。

では、ヨーロッパにおける展開について若干お話をしたいと思います。ESU が政策決定において、どのようにしてここまで重要な組織になったのかというお話をしたいと思います。

先ほどお話したように、グローバルなユニオンにはいろいろな政治的な問題がありました。ESU は、ノルウェー、英国、スウェーデン、アイスランド、フランス、デンマーク、そしてオーストリアの 7 つの全国学生ユニオンによって、1982 年に設立されました。当時は、西ヨーロッパ学生情報局 (West European Student Information Bureau: WESIB) と呼ばれていました。初期段階の ESU は、様々な国の学生に対して具体的なサービスを提供する非政治的な国際情報共有組織という考えを持っていました。しかし、1980 年代後半に東欧の政治的な状況の変化が WESIB にも大きな影響を与え、旧東欧国の全国学生ユニオンにも、加盟を認めることになりました。ヨーロッパで東と西の区別が無くなったところで、東と西に関係なく参加するようになったので、1990 年 2 月に「W (West)」を名前から取り、欧州学生情報局 (European Student Information Bureau) となりました。

さらに、欧州共同体がボローニャ・プロセスの始まりとともに、ヨーロッパにおける高等教育により強い影響力を持つようになり、欧州学生情報局は単なる情報共有組織から学生の意見や利益を代表する政治組織に変わりました。それに伴い、2007 年の 5 月に、ESU という現在の名称に再度変更しました。ESU は今や、39 の欧州諸国における 47 の全国学生ユニオンの包摂するアンブレラとなる組織として位置付けられています。

ESU は、1,100 万人の学生の教育、社会、経済及び文化的な利益を促進し、ヨーロッパにおける主要な意思決定組織（欧州連合、欧州評議会、UNESCO、ボローニャ・フォローアップ・グループ）のすべてに対して、学生の声を届けるとともに、万人のために質が高く、公平性があり、アクセスしやすい高等教育システムの促進を目指しています。

ESU は外的、内的な変化を通して学生の意見を主張し、人材育成を行うという今のようにな形になってきたわけですが、現在ではヨーロッパ、そして国際レベルにおいて、影響力のある重要なステークホルダーとして認識されるどころまですべてに達しています。

歴史的背景を簡単に説明いたしましたけれどももちろん細部についてはいろいろ申し上げることはあります。しかし、ここからは再度、学生参加（**student participation**）の強みについてお話ししたいと思います。そして、ヨーロッパが今直面している課題についてもお話をしていきたいと思っています。

まずは強みについてですが、その最たるものは専門的知識という点です。学生には学習や学生の抱える問題に関する専門的知識がありますので、評価（**evaluation**）の計画や実行において、誰も学生の代わりをすることはできません。学びの専門家としての学生については先ほどお話ししましたが、その点においては学生以外にはできませんので高等教育における質保証に学生が必要なのです。

そして、やはり信頼性です。学生が強い役割を担うことによって、信頼されるものになります。つまり、教職員の目からだけではなく、学生も参加することで評価に対する信頼性が高まります。そしてまた、他の学生にとっても、学生の視点が評価のプロセスに入っていることを知ることで、信頼につながるのです。

それから、影響もそうです。評価に参加するということによって、学生は教育の向上に影響を及ぼす機会を得ます。評価が終われば、その評価結果を押し進めていく役割を学生が担うのです。例えば、改善の勧告が出たとしましょう。あるいは強みが特定されたとしましょう。そうすると、その評価プロセスから出てきたアイデアを進めて行くのは、今度は学生の役割となるわけです。

強みはまだあります。学術的共同体におけるパートナーシップもそうです。学生の評価への参加は、学術的共同体における対等なメンバーとしての学生の役割を強化してくれます。また、評価における教職員との協力は、学生を学術的共同体における対等なメンバーとみなすだけでなく、様々な場面で共通理解を生み出します。

それから、学習プロセスです。学生は国全体の評価プロジェクトに参加することによって、個人として、あるいは集団としての能力を伸ばす、かけがえのないチャンスを得ることができます。もちろん評価というのは非常に大変な作業ではありますが、参加した学生や学生ユニオンは、その経験に非常に満足しています。フィンランドの経験から言いますと、評価に参加することによってたくさんの良い能力が身につきます。フィンランドの大抵の中には、学生ユニオンのメンバーとして活動していた人がたくさんいます。後のキャ

リアのために、スピーチをする、ミーティングに参加する、メモを書く、あるいはいろいろな作業を行うといったことを学ぶ場なのです。ですので、そういったチャンスがありますし、またその信頼性も高まるということがあります。

では、課題についても触れましょう。課題としてまだ残っている問題というのは、やはり学生の入替わりがあるということ、それからトレーニングの問題です。ほとんどの場合、学生が学生ユニオンに携わるのは2～3年だけですので、非常に多くの数の入替わりがあります。ですから、新しい学生に対する評価作業のトレーニングを継続的に行う必要があります。マニュアルのような文書を利用するだけでは、人から人に引き継ぐということに取って代わることができません。新しい評価者を育てるためのこのような取り組みですが、ユニオン内に次世代を育てようとする学生がいる場合もありますし、機関が学生のために評価のトレーニングコースを提供している場合、学生が専門家と同じトレーニングに参加するという場合もあります。それはそうなのですが、ある学年が非常に積極的であっても、翌年以降はそれほど活動的ではないこともありますので、常に挑戦なのです。

それから、動機づけと報酬という課題もあります。学生が自己評価プロセスに参加する動機づけが難しい場合がありますが、評価で身に付いた能力が後の仕事に非常に役立つことを強調するのは、学生ユニオンにとっての課題です。学科レベルでは、自己評価への参加に単位を与えたり、ひとつのコースの修了とみなしたり、図書を贈呈するといったことを報酬とすることができるのかも知れません。評価への参加は時間を取られますので、難色を示す学生もいます。学生が評価への参加に興味を持つためには、動機づけが必要だと思いますし、報酬も必要だと思います。

民主主義においては常に問題視されていることですが、代表性も課題の一つです。学生代表の目的は、幅広い学生の視点を評価に取り入れることですが、学生というのは同質の組織ではないですし、様々な意見を持っていますので、学生からの様々な意見をまとめて、学生代表に伝える方法を考える必要があります。

これも民主主義における課題なのですが、他の学生を代表するに相応しい学生をどのように見つけるのかという問題もあります。もちろん、学生ユニオンには選挙があり、代表者の選出といったことは選挙で行われますが、すでに重要なポジションにいる学生が評価に参加するというのが普通です。

さらに、視野が限られてしまっているという点も課題です。教育に関する経験という意味では教育の専門家や他の評価チームメンバーよりも、学生の方がレベルは低いわけですから、それを勘案していく必要があります。例えば、訪問調査において学生が教育の質を評価する場合、1種類の教育経験しか持ちあわせていないことから、自然と視野が限られてしまうこともあり得ます。これに関してはたいていの場合、チームでマネジメントできると思いますし、協力的な良い雰囲気ของทีมであれば、学生の視野というのを最大限活用できると思います。ですので、専門家育成としてのトレーニングを機関自体がしっかりと行うかどうかにかかっていると思います。

最後にひと言申し上げたいと思います。ヨーロッパにおいて、様々なポジティブな動きが、ここ 15 年ぐらいの間に起こってきました。高等教育質保証における学生参画についてもその 1 つです。しかし、ここ 10 年間に於けるヨーロッパの高等教育改革に対して、ESU も指摘しているとおおり、新しい脅威も出てきています。というのも、高等教育機関における民主主義の低下を招きかねない、世間で一般的な効率重視の企業経営スタイルが高等教育界にも広がりはじめ、今日の学生参加は脅威にさらされていると ESU は主張しています。そして、ヨーロッパですべてのレベルにおいて、学生参加の活動を実際に保証している国はほとんどありません。ですので、我々は学生の批判的な意見に耳を傾けなければいけませんし、学生の意見は批判的であるべきだと思っています。

ご清聴ありがとうございました。質問をお待ちしています。

司会：

どうもありがとうございました。それでは、いくつか質問を受けたいと思います。

質問者 A：

貴重なお話をありがとうございました。

日本は今、景気が回復傾向ではあるのですが、やはり大学教育と就職というのは非常に重要な関係があるというように考えられています。もちろん、教育の目的は学ぶ、知識を得るといえることが大きいと思いますが、それと就職・職業訓練という面をどのようなバランスで捉えられているかを教えていただければと思います。

Kekäläinen：

雇用可能性 (employability) は、やはり教育の中核であると思います。ヨーロッパの目標設定の中でも、雇用可能性は主要な関心事となっています。今回はその他の側面に焦点を当てましたので、ここでは発表いたしませんでしたが、欧州高等教育圏 (EHEA) においては、雇用可能性がひとつの鍵となっています。さらに、ヨーロッパの目標設定の中では個人の能力の育成にも焦点が当てられていますが、これは雇用可能性という点でも非常に重要です。そして、民主的な市民に育てるといえることも重要で、これはヨーロッパの目標設定で最重要視されています。

司会：

では、こちらの方、質問をお願いいたします。

質問者 B :

スピーチ、どうもありがとうございました。

私はアドミニストレーターとして仕事をしていて、学生や教員とミーティングをすることがあります。50 人ぐらいで集まってクラスで話をしたのですが、先ほど、学生参画の分類という話があり、その中でリラックスした雰囲気を作ることが重要だとおっしゃいましたが、日本人はとっっても真面目なので、そのような雰囲気を作るのは難しい場合があります。ですので、何かこうやったらリラックスした環境・雰囲気になりますよというポイントがあれば教えていただけないでしょうか。

Kekäläinen :

具体例については、グループセッションの際にお聞きになれるのではないかなと思います。キーポイントとしては、最初に全員が自己紹介をしてから参加することだと思います。メンバー同士が互いにサポートし、お互いから学び合うという雰囲気のグループワークを促すことも 1 つの方法だと思いますし、参加することでポジティブな経験を得られると学生に理解してもらえれば、良い雰囲気になるのではないかと思います。ですので、学生に「どうですか、ちょっと何かしゃべって！しゃべって！」と言ってみるのも良いと思いますし、一緒に何かやってみるのもよいと思います。また、学生に自分の研究についてちょっとしたプレゼンテーションをしてもらってもよいかもしれません。そうすると、知識の探求を行う集団の中で、学生が新しいメンバーとしての実感を持てるのではないかと思います。

よい雰囲気作りにはいろいろな方法がありますが、それらはすべて、対話があり、パートナーとみなしていることが大前提だと思います。教員はみな、自分の学生の成長を願っていますので、教員と学生には共通の目標があると言えます。学生が社会から必要とされる人材に育つということは、教員のためにもなるのです。このことを強調するだけではなく、挑んでいかななくてはなりません。私どもも今、教員と学生が共に学ぶ環境を構築中です。もちろん時間がかかりますし、難しい障害にもぶつかるでしょう。でも、できることはたくさんあると思います。ただ、精神的な部分も多いですが、私の今の説明は答えになっていないかも知れませんが、これは重要なことですので、みなさんも考えていただければと思います。

司会 :

Kekäläinen さんへの質問は、再度まとめのセッションで受け付けたいと思います。
Kekäläinen さん、どうもありがとうございました。盛大な拍手をお願いいたします。

【概要】

質保証と質の向上は、最低限の学術水準の保証、国際的な競争力の維持、学習機会の向上等を目指しており、学生が参画する利点は、学生が有する専門的な知識や新しいアイデアがもたらされる、これまであたり前に行われてきたことに対する学生の疑問が改革につながる、学生参画というプロセスによって質が改善・向上される、といったことがあげられる。

英国の教育セクターや大学、質保証機関の多くは、学生を教育の受動的な消費者ではなく、パートナーと見ており、学生の学習だけでなく機関の運営・改善の両方について、学生をより積極的な参画者とみなすことにつながっている。一方、英国の全国学生ユニオンは質保証プロセスに関与する学生ユニオンと学生を支援するためのユニットを有しており、非常に革新的な視点で今後のパートナーシップという概念の展開について述べた『パートナーシップのためのマニフェスト』を発表している。また、英国には学生をプロデューサーとして見る観点もある。これは教員と学生を大学コミュニティの一員と捉え、両者が新しい知識を発見する役割を担い、お互いに学び、教え合うことができるという考え方である。パートナーやプロデューサーとして関与している学生は、学生が通常得ることができるよりも多くの経験を得ることができる。

非常に基本的なレベルの学生参画が実際に行われており、例えば英国では、コースレベル、学部レベル、機関レベルにおいて、学生が学生代表としてコースの年次評価や開発に関わる「学生代表システム」がすべての大学で導入されている。さらに、エクセター大学では、「変革主体としての学生」プロジェクトを開始した。これは、大学改革を学生に主導させようとする動きで、投票パッドの導入といった学生の改革アイデアが実現されている。また、リンカン大学では各事務部局が学生参画プランを持っており、学生を職員任命委員会の委員に加えて面接を行ったり、新しい建物の設計の際は常に学生を設計チームに加えたりしている。

英国高等教育質保証機構（QAA）では、理事会に2名の学生メンバーが含まれているほか、理事会の小委員会である学生諮問委員会でもQAAの主要な課題が諮られている。学生諮問委員会は理事会の正式な委員会であり、15名の学生で構成されている。また、QAAでは学生評価者制度を導入しており、現在100名を超える学生評価者が評価委員会の正式なメンバーとして、他のメンバーと同額の報酬を得て参加している。

学生参画の原則としては、参画の機会が本物・真正である必要がある。つまり、学生が価値ある観点をいつになってももたらせない場合は、意思決定に学生を関与させる必要はない。そして、お互いを理解し合うこと、信頼を構築すること、成功した成果を顕彰することが大切である。また、学生参画は学生に論点が行きがちだが、教職員をいかに支援していくかについても考える必要がある。

司会：

続きまして、2つ目の講演に移りたいと思います。「質への学生参画—英国の事例：パートナー&プロデューサー」と題しまして、リンカン大学学生参画オフィサーでいらっしゃいます **Dan Derricott** さんにご講演いただきます。

Derricott さんの所属するリンカン大学では、学生に教育の質向上への取り組みに対して、より積極的に携わってもらうことを目標に掲げていらっしゃいます。**Derricott** さんは学生参画オフィサーとして、これらに関する戦略の策定、実施、自己点検を先導し、担当副学長らを定期的にサポートしていらっしゃいます。

また、**Derricott** さんは **QAA** という英国高等教育質保証機構の学生理事として、**QAA** の理事会や執行部に対して、学生の視点から政策や戦略の助言を行う **QAA** 学生諮問委員会の議長も務めていらっしゃいます。

それでは、**Derricott** さん、よろしくお願ひいたします。

Dan Derricott (リンカン大学学生参画オフィサー)：

ご紹介ありがとうございます。本日はご招待をいただきまして、またこのようなお話をする機会をいただきまして、大変嬉しく思っております。ありがとうございます。

私のプレゼンテーションを始める前に、**Kekäläinen** さんへの最後の質問について考えてみたいと思います。

英国でも学生参画についていろいろと議論がされておりますが、学生参画について語る場合、学生についてばかり議論しており、教職員を支援する必要があるということを忘れがちです。そこで先ほどの質問に戻ってみたいと思うのですが、オープンな業務環境を促進するためには、パートナーシップはただ単に学生を参画させるというだけの話ではないということを確認しておく必要があります。パートナーである教職員も支援しなければいけないということを考えることが重要です。したがって、様々な方法で働く上で、学生と教職員の、信頼関係の構築や支援について考えなければなりません。私はこのリンカン大学において、行政的な仕事もしているのですが、私の仕事というのは、学生に焦点をあてるというよりも、学生と共同で活動する教職員スタッフを支援することです。先ほどの質問への回答としては、いかにスタッフを支援していくかということも考えなければいけない、ということ念頭に置いていただきたいと思います。

さて、私のプレゼンテーションでは、次のことをお話したいと思っています。

まず、質について、何を達成しようとしているのかをおさらいします。学生参画の利点について話す前に、このことについて考えることが有用だと思います。また、**Kekäläinen** さんの発表で学生参画の利点と直面する課題をあげられていましたので、これにも触れたいと思います。

そして、発表のメインは、英国における学生参画がひとつのテーマとして出てきているので、その状況について今までの歴史とともにお話いたします。その後、一般的な観点、すなわちパートナ

一としての学生、また、それに代わる観点として、プロデューサーとしての学生という視点から議論をしたいと思います。その上で、実際にどのように質保証プロセスへ学生を参画させたのか、また、どのように学内プロセスに学生参画を拡大させたのか、いくつか例をお話したいと思います。

最後に、優れた学生参画の原則は何かについてお話していきたいと思います。

それでは、リンカン大学についてお話させていただきたいと思います。数年前まで、私はこの大学の学部生で、マネジメントを勉強していました。現在は、ヨーク大学大学院においてパートタイム学生として勉強しています。リンカン大学の起源は 19 世紀ですが、実際は非常に新しい大学で、2001 年に設立されました。英国においては中規模の大学で、約 12,000 名の学生、約 620 名の教員、そして約 620 名の職員を抱えています。そして、設立からまだ 12 年程度しか経っていませんが、英国の大学ランキングにおいて、120 の大学の中で、現在 47 番目にランク付けされています。リンカン大学は、成長している大学であり、働くには刺激的な場所です。

それでは私の話の本筋に移らせていただきたいと思います。

「質保証と質の向上」、いったいこれで何を達成しようとしているのでしょうか。私は、少なくとも英国において、また、欧州高等教育圏 (EHEA) においては、すべての学位にわたって最低限の学術的基準を見いだすことが可能であり、かつ、英国の学位を目指して学習する学生は一定水準の質を期待していると考えます。このことから、まず考えなければならないのは、学生が学習し、コースごとに設定された学術的基準を達成する機会を有しているかということになります。

そのため、英国における大学の外部評価は、大学のすべてのプログラムがその最低基準に適合していることを保証するシステムを機能させており、学生がその基準を達成するための学習機会を有しているかどうかを確認することから開始するのが典型的です。また、英国、特にスコットランドにおいては、質向上についても議論されています。これは、英国の国際的な競争力を維持すること、大学卒業後に優れた卒業生としてさらに上の学位を目指す、あるいは雇用される、また優れた市民になり得ることの担保を目指しています。4 枚目のスライドの 2 点目、3 点目であげている、学生が学習する機会を得る、あるいは学習機会を向上させるということが重要です。そして、学生もそのための貢献を果たせるように適切に位置づけられているのです。

では、学生参画の利点ですが、現在のリンカン大学の運営を担う職員は、1970~80 年代あるいは 1960 年代に大学を卒業しました。その当時は、現在とは状況がずいぶん違っていたと思います。したがって、今の学生は、今の学生に関する専門的な知識をもたらすことになります。私はここでは意図的に Kekäläinen さんの論点を繰り返しています。なぜならば、学生は複合的なもののなかにちょっと異なるものを導き入れるからです。そしてそれゆえに、パートナーシップということが話題になります。なぜならば、異なる人々は異なることをもたらすことになるからです。そこで、第二の論点に移る必要がでてきます。

2 点目ですが、学生の視点や学生が質保証プロセスの参加者としてもたらすものは、大学の管理

者や教員、職員がプロセスにもたらすものとは異なるものであり、それらを補足するものです。置き換える必要はありませんが、すでに行われている議論やプロセスを補完し、向上させることができますと思います。

3 点目こそが学生参画がもつ刺激的な論点です。学生は新しいアイデアやエネルギー、情熱、創造性を持っているので、質保証のプロセス、あるいは質向上のプロセスにおいても、そういった学生の新しいアイデア、エネルギーを活用しないということが考えられるでしょうか。

それから 4 点目ですが、学生はよく「なぜこんなことをするのか」、「なぜ今までこういうことをしてきたのか」という疑問を呈します。学生は「なぜ」という問いを発するのが得意なのです。大学は通常は一定の規範というようなものを持って活動しているわけですが、その規範に疑問を持つ学生が出てくると、それはそのような規範と前提に対する挑戦を促しているのです。特に英国では、何百年にもわたって同じようなことを行ってきたという大学もあるでしょうが、そういうことに疑問を呈する学生の意見が重要となる場合もあるのです。

5 点目が特に重要なのですが、学生の参画というのは結果ではなく、プロセスです。つまり、質の向上を実現するために学生参画を実現しようとしているということです。学生を関与させることは素晴らしいことですが、それは何かにつながる必要があります。私たちにとっては、それは質の改善です。学生を参加させるというだけでは意味がないのです。学内の意思決定の組織に加える、あるいは質保証委員会のメンバーに入れるというだけでは意味がなく、それによって何らかの影響が現れなければならないと思います。

そこで、英国では 1980 年代から学生に意見書を出してもらうようになりました。日本でも同様だと思いますが、外部評価に際しては、大学が文書を用意して、さらに証拠を用意してピア評価者に提供するという行ってきた。1980 年代には、学生が大学の質に関する証拠や文書を準備することができる制度が導入されました。

1990 年代になると、何らかの理由でその制度は廃止されましたが、その代わりに評価の一環として学生とのミーティングを持つことが、質保証を行う外部評価チームに義務付けられました。そして、各大学では学生達にもトレーニングとサポートを受けさせ、その大学におけるコースの代表を務めさせるということも行われました。

その後 1997 年に、かつての質保証組織であった高等教育水準評議会 (Higher Education Quality Council: HEQC) や他のいくつかの団体を統合して、高等教育質保証機構 (Quality Assurance Agency for Higher Education: QAA) が設立されました。現在、QAA の理事会には学生のメンバーが 2 名加わることになっています。私は、その学生メンバーの一人です。QAA は、英国において学生を関与させた最初の組織であると思います。その意味で、QAA が何をなしたかについて、そして実際に学生の参画というものがどのように行われるのかということをお話したいと思います。

2002 年になると、新たな機関別オーディット (Audit) 方式に学生からの意見書の提出が再導入されました。新たなオーディット方式の導入にあたっては、様々なアイデアを試みて、それらのアイデアをすべて使用すると決定され、学生による意見書の提出も再び行われるようになりました。

た。

また QAA では、学生参画を促進するための担当職員を初めて雇用しました。スライドに主要な会議が開催されたとありますが、これは学生参画という意味ではとてもエキサイティングな転換点でした。そこで、2002年にこれに似た会合をもち、そこで、学生参画の重要性を示す議論が関係者に対して示されました。またそのときに、事態は展開し、熱気を呼ぶようになってきたのです。そして、日本では本日、このようなフォーラムが開催されました。私は、10年後にまた日本に戻ってきて、それまでの日本での進展を見たいと思っています。

2002-3年以後、英国では様々なことが起こり始め、特にスコットランドの教育セクターで変化がありました。ご存じのとおり、英国はイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの地域に分かれており、各地域では、英国枠組内でいささか異なる教育制度が布かれています。スコットランドの教育セクターでは、主要原則として学生参画を採用しています。学生を評価パネルチームのメンバーとし、スコットランドにおける質保証の学生参加支援機関 (student participation in quality scotland: sparqs) を設立しました。sparqs はスコットランドの素晴らしい機関です。Nik Heerens さんはそこで働いていました。sparqs はスコットランド全体の組織であり、学生や学生組合等の機関が様々な方法で学生参画への支援に専念するスコットランドの機関です。sparqs の Web サイト見ていただければわかると思いますが、素晴らしいリソースがたくさんあります。こういうことがスコットランドでまず起こりました。

2006年には、この素晴らしい活動が QAA の年次総会時に報告されました。その際に、QAA の理事会において、外部評価チームに評価者として学生を加えるアイディアは全国規模で導入すべきだということで合意しました。当初はイングランドの6大学で試験的に実施され、次第により広く展開されるようになりました。これに続いて、様々なことが起こってくるわけです。QAA スタッフの増員、学生参画戦略の策定、学生ユニオンへの支援といったことが行われるようになりました。そして、QAA 理事会に学生メンバーが導入され、現在、私が就任しているわけなのです。これまで1名だった QAA 理事会の学生メンバーが、今年から2名に増員されました。この学生は、全国学生ユニオン (National Union of Students: NUS) の代表を務めています。

2009年も興味深い年です。イングランド高等教育財政カウンスル (Higher Education Funding Council for England: HEFCE) がオープン・ユニバーシティの高等教育研究情報センター (Centre for Higher Education Research & Information: CHERI) に学生参画状況の報告を委託しました。また、どのように学生参画が進展してきたかについて、より多くの研究を行うために、HEFCE から様々な組織に資金提供がなされました。教授陣をサポートしている高等教育アカデミー (Higher Education Academy)、全国学生ユニオン (NUS) に対して資金提供をするようになったのです。そして、そこから様々な興味深いプロジェクトができました。

2010年に QAA 理事会は、学生のさらなる関与を主張する意見書を受け取りました。QAA ではすべての業務において、学生を主要な利害関係者として見るべきであるという提案がなされました。学生を QAA の活動における最も重要な利害関係者であるとしたのです。NIAD-UE、そしてその他の2機関においても、学生を第一義的な利害関係者とみなしている点では同様でしょう。そして、

これは QAA の新戦略計画に繋がっていきました。この新戦略計画の第一の目的は、QAA が学生のニーズを満たしていることを保証することであり、これが現在の戦略計画、QAA の仕事の方向を定めることに繋がりました。

2012 年には、「英国高等教育のための質規範 (クオリティ・コード)」というものが策定されました。私はその策定グループの一員でした。クオリティ・コードは、英国内で高等教育を提供するすべての大学やカレッジが遵守しなければならない教育の質と基準の枠組であり、「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン (Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area: ESG)」を満たすことにも役立ちます。学生参画に関する新たな事項も加えられました。

現在、大学あるいはカレッジの主たる評価 (レビュー) のすべてにおいて、評価パネルの中に学生が必ず加わるようになっていました。現在、英国には学生評価者が 100 名以上おり、私もその 1 人です。クリスマスの直前でしたが、私は、ロンドン衛生・熱帯医療大学 (London School of Hygiene and Tropical Medicine) へのレビュー活動に参加して、素晴らしい経験を得ました。オックスフォード大学からカレッジまで、すべての種類の大学で学生が評価パネルの中に加わります。

先ほど、QAA 理事会には学生メンバーが 2 名いると申しましたが、理事会の小委員会として学生諮問委員会というものがあり、私はその議長を務めています。QAA の主要な課題については、学生諮問委員会にも諮られますので、学生の視点が加わります。学生諮問委員会は理事会の正式な委員会であり、英国全土の 15 名の学生で構成されています。

これらの経緯を経て、現在に至っています。そこには、一定の語り方、考え方、言葉遣いがみられます。それは、「学生をパートナーとして見る」ということですが、それはいったいどういう意味を持っているのでしょうか。

学生をパートナーとして見ることは、学生を教育の受動的な消費者として見るという考え方を否定するものです。現在の政府には、学生をお客様あるいは消費者として見るという考え方がありますが、これが質を向上という考え方に帰結しています。一方、教育セクターや大学、質保証機関の多くは、学生をパートナーとして見えています。それによって、学生の学習だけでなく、機関の運営・改善の両方について、学生をより積極的な参画者とみなすことにつながっています。

また、様々な考え方があります。教員の教育能力向上を支援したり、優良事例を共有したりする高等教育アカデミーにおいては、学生参画を促進するようなプロジェクトを始めています。そこでは、学生にもっと価値のある学習経験をもたらすための方法として、学生を研究プロジェクトのパートナーとし、学生が講義を受けるだけでなく、新たな知識を得るための積極的な関与を促進しているといったことがあげられます。

一方で、全国学生ユニオンには、質保証プロセスに関与する学生ユニオンと学生を支援するために開発されたユニットがあります。読み物として興味深いものがあります。全国学生ユニオンは、『パートナーシップのためのマニフェスト』 (*Manifesto for Partnership*) というものを発表しました。これは、非常に革新的な視点で、パートナーシップという概念を将来的にどう展開するかを語

っています。全国学生ユニオンの役員は、学生の代表であると同時に、財政カウンスル（HEFCE等）の理事会といった全国レベルの主要組織にも加わっており、彼ら自身がパートナーとしての役割を果たしています。

最後に、大学の管理側も学生をパートナーとして見えています。先ほど、クオリティ・コードとそこにある学生参画の事項について話をしましたが、そこでは、すべての高等教育サービス提供者に対して教育上の経験の保証と向上のために、学生を個人、あるいは集団として参画させることが期待されているというような言い方が使われています。そのため今年から、評価チームのピア評価者は、各大学、あるいはカレッジがそれを実施しているかチェックすることになりました。これは私たちにとって非常に大きなステップでした。もうサポートをするというだけではなく、すべての大学で、あるいはカレッジでこれが展開されることが期待されているという状況になっています。

では、少々違った観点を紹介したいと思います。それは、学生をパートナーとして見るだけでなく、プロデューサーとして見ることです。現在の英国高等教育が、その目的や意義について危機的状況に直面していると捉えている学者達がこういう見方をしています。英国内では、高等教育において、たくさんの目的を果たそうとしているため、かえって何をしようとしているのかが明確に見えなくなってきたと言われています。過去 20 年ほどにわたる英国高等教育の発展の一部として、研究と教育 (teaching) がバラバラになってしまいました。大学において、研究はこちらで、teaching はこちらでというように、その 2 つがなかなか繋がってこないという状況が生まれてしまいます。そこで、かつてウォリック大学に所属し、後にリンカン大学へ来た学者達が、何とかこれを是正しようと考え、リンカン大学に学生をプロデューサーとして位置づけるという考え方をもちました。そうすることで teaching と学習 (learning) を再結合させ、また、教員、学生の役割を考え直しました。教員と学生がともに大学のコミュニティの一員であると捉え、みんなが新しい知識を発見する役割を担っており、お互いに学び、お互いに教えることができるという考え方です。もちろん、教員対学生の役割の定義という問題がまだ存在していますが、そのバランスが再度見直されたり、フンボルトによるベルリンの「近代」大学の在り方に根ざした非常に急進的な取り組みが行われたり、1960 年代の学生抗議運動から刺激を得たりしています。当時の学生抗議運動について記した歴史家の中には、学生は学生運動に関わったことで学生以上の者になったと唱える者もいました。学生も、まさか大学に行ってこのような体験を得るとは思っていなかったでしょう。

リンカン大学の学生達にも、ただの学生としての体験ではなく、より多くの体験を得てほしいと考えています。パートナーとして、あるいはプロデューサーとして関与している学生は、学生が通常得ることができるものよりも多くものを得ることができるのです。

学生をパートナーもしくはプロデューサーと捉えることは類似した考え方であり、学生をただ単なる大学の消費者として見るのではなく、新しい役割を学生に求め、高等教育におけるより積極的な役割を求めています。学生参画について話し始めた 2002 年の会議から 11 年が経過し、様々な形で学生参画が解釈されてきました。学生参画という言葉は、様々な意味合いを有しています。バーミンガム・シティ大学の同僚達は、これをひとつの本にまとめようとしてきました。ここに持っている

本がそうなのですが、『Student Engagement – Identity, Motivation and Community』というタイトルです。彼らが記したこの本は、まさに今英国で議論されている学生参画の在り方をまとめています。また、それがどのような言葉で表現されているのか、あるいはどういうアイデアを捉えたものなのかが書かかれていて便利です。もっと英国の状況を知りたいという方は、是非この本をお読みいただきたいと思います。

では、現実の場面では、どういうことになっているのでしょうか。これまで様々な理論的な概念を申し上げましたが、実際は、発展した高等教育システムを有する多くの国、特にヨーロッパ全体で見うけられるような非常に基本的なレベルの学生参画が実現しています。

まずは、学生代表です。各コース、各クラスで1名の学生を選出し、その学生が学生代表として、コースのマネジメントですとか、コースの年次評価や開発に関わることになっています。これは、コースレベル、学部レベル、機関レベルにおいて、英国の大学すべてで行われており、これが学生代表システム (student representation system) として知られています。

そこから一歩進めると、面白くなってきます。エクセター大学では、「変革主体 (Change Agents) としての学生」プロジェクトを始めました。大学改革を学生達に主導させようという動きです。学生、あるいは学生グループが、学生のフィードバックを通して何かコースを変えた方が良いとか、これを共有した方が良いというものがあった場合に、分析したり、是正したりするための動きが取れるように、サポートを求める申請書を出すことができるようになっていました。その結果、様々な面白いことが出てきました。例えば、21枚目のスライドの一番下にある、「新しい技術の統合」です。学生は講義……つまり、こういった講演ですが……はつまらないし、退屈だと感じます……この講演が退屈でなければいいのですが……。そこで、学生達は、ある種の科目についてはそのような大規模な一斉教育が必要であるとわかっているのもっとインタラクティブな方法を見つけたかったわけです。あまりにもたくさんの学生がいるので、手を挙げて「今のところが分かりませんでした」と言いたくない学生もおり、授業をよく理解できないまま終わってしまうという問題がありました。そこで、投票パッド (voting pad) というものを導入しました。各学生はボタンのついているパッドを持っていて、様々なオプションに投票でき、結果はスクリーン上に表示されます。教員も結果を見ることができ、コースやトピックを終えた後、「これは分かりましたか」、「この数式は、こういう理論においてはどのように捉えられていますか」といった質問ができます。講義を通して教員が言ったことがちゃんと学生達に浸透しているのかどうか、学生達は一度帰宅して考え直した方が良いのかどうか、それを教員も確認することができます。エクセター大学の学生は、このようなシステムをどうやって教室に導入するかを考えたわけですが、私の知っている限りでは、数千個の投票パッドを購入し、教員が講義で使えるようにしました。学生から出てくるこういう簡単なアイデアが、実は学生の学習に大きなインパクトをもたらすのです。

リンカン大学では、サポート部門、つまり事務職員に学生参画について考えてもらいました。例えば、保健安全部門、財務部門、あるいは施設部門が学生の学習や経験にどういうインパクトを持っているのか、大学運営にどう学生の参加を呼びかけるかということについて考えてもらいました。

リンカン大学には 16 の事務局があるのですが、それぞれが学生参画プランを持っており、専任の学生参画スタッフがいます。22 枚目のスライドに写っている人は、質保証担当職員の 1 人です。もちろん、質保証部門でも学生参画プランを持っています。このスライドは、ワークショップをやっているときの写真なのですが、学生が内部レビューにどう関わるか、そのプランを見ているところです。結果は、非常に面白いものになりました。例えば人事部門は、学生を職員任命委員会に加えたのです。教員や事務職員に欠員が出た場合には、例えば教授 2 名、学生 1 名の職員任命委員が面接を行います。もちろん、学生は正式なメンバーです。毎年 80 名ほどの欠員があるのですが、このような形で面接をしますと、学生時代の経験や学習に対する考え方についてもしっかりと聞くことができます。また、リンカン大学は新しい大学ですので、キャンパスがまだ建設中なのですが、その新しい建物を担当する施設部門は、新しい建物の設計にあたっては常に、学生もその計画チームに加わってもらっています。

先ほど、QAA が学生評価者制度を導入しているという話をしました。この後開催されるグループセッション 3 でこれを取り上げますが、今では 100 名を超える学生評価者が英国の大学やカレッジをレビューしています。彼らは評価委員会の正式なメンバーとして参加しています。やはり、純然たる参画でなければなりません。学生たちは、自らの学生としての経験、体験というところに焦点を絞って見ているので、他の評価者とは違う視点をもたらしています。学生はその他の人々の代わりにはなりません。科目の専門家や質保証プロセスの専門家のようになろうとはしませんが、大学における学生の体験については専門家ですので、正式メンバーとして他のメンバーと同じ報酬を得て委員会に参加しています。ただ、評価の観点は他の評価者とは違います。

最後に話を締め括るにあたって、いくつか学生参画の原則ということで提案をしたいと思います。スライドは全部読みませんが、いくつか絞って話したいと思います。

第一は真正性にかかわる問題です。どこにでも学生を入れて、意思決定すべてに関わらせるということは、時には簡単なこともあります。英国ではそうであったことを見てきました。しかし、学生が決定に特に影響をもたらす価値ある観点をいつになっても持ち込めない場合、わざわざ学生に関わらせる必要はありません。学生参画は、まさに参画の機会が本物、真正であることが必要です。そして、お互いを理解し合うということが大切です。最初に話題にした質問への答えにもなるかと思うのですが、学生がパートナーシップにもたらすものを理解するだけではなく、教職員が何をもたらすのかも理解し、それを学生達が理解することが大切です。

あと 2 点申し上げたいと思います。まずは信頼です。信頼は非常に重要です。学生、教職員、その他のステークホルダーがお互いを信頼し、そして正しい目的のためにやっているのだとみんなが思っていることが大切です。時間をかけて信頼を構築していかなければなりません。ただ、学生を一旦関与させれば、必ずこのプロセスにエネルギーがもたらされます。そして物事は素早く進んでいくでしょう。

最後のポイントは素晴らしいものです。成功した成果を顕彰することです。学生参画に取りかかるよい方法は、新しいことに挑戦し、それを試験的に展開することについて意見を一致させることで

す。そしてその後は、議論を行い、伝えることが大切です。本日のこのようなフォーラムは、情報を共有する非常に素晴らしい場だと思います。私のこの講演の意義も、うまく行けば学生参画を顕彰することになっていればと幸いです。日本において、学生参画を成功させるためには、お互いにその経験を共有し、学び合っていくことが必要だと思います。スコットランドでうまくいったのは、やはり皆が「こういうことをやったよ」とお互いに話し合ったからなのです。信じられないほど簡単に聞こえますが、我々はお互いに十分話し合っていないように思います。うまくいかなかったことはよく話題になりますが、うまくいった事例はなかなか取り上げません。ですので、うまくいったものをお互いに共有し合うために発信していくことが大切だと思います。

私の話はここまでということにして、質問を受けたいと思います。ありがとうございました。

司会：

Derricott さん、どうもありがとうございました。

それでは、1、2 問程度質問を受け付けたいと思います。いかがでしょうか。

質問者 C：

Derricott さん、大変興味深いプレゼンテーションをありがとうございました。

カリキュラムの変更に関する学生参画について伺いたいことがあります。教授たちは、学生にはまだ十分な経験や知識が備わっていないと考えてしまっていますが、先ほど、学生がパートナーシップにもたらし得るもの、学生が教授を助ける存在であることについてお話がありましたが、非常に良いアイデアだと思います。ただ、理科系の学科、あるいは非常にテクニカルな学科では、学生がそれに参画した場合、どのような成功が可能なのでしょうか。

Derricott：

ご質問ありがとうございます。まず、申し上げたいことは、学生は専門分野の専門家である必要はないということです。専門分野の専門家は教授です。しかし、学生はカリキュラムの分野でも特定の貢献をなすことができると思います。例えば、カリキュラムの実施方法があげられると思います。コース受講生の中には、翌年のコース実施にあたって、何かプラスになるような意見をコースの担当教員に提供することができる学生もいると思います。もちろん、すぐに学生の言うことすべてを反映させる必要はありません。これまで、議論の中に学生が含まれることはありませんでしたが、学生が議論に加わることで、教員には興味深い発見があると思います。学生、特に若い学生は、もっと自分達の生活の中から経験を増やしたいと考えています。責任を与えると、それをチャレンジと感じて果敢に取り組みます。カリキュラムデザインといったことに学生を関与させてはいかがでしょう。難しいかも知れませんが、やってみる価値はあると思います。

司会：

他にはいかがでしょうか。

質問者 D：

興味深い講演をありがとうございます。

学生数が減少しているのに、大学数が変わらないとすると、学生の質と大学が求める質との間にギャップが出てくる場合があると思うのですが、その際にこのパートナーシップを利用して何かできることはあるのでしょうか。

Derricott：

とても良い質問だと思います。このパートナーシップに向けたアプローチというのは、そういう状況の中でも生き残っていくと思います。ただ、質問の答えは、残念ながらあるかどうかわかりません。このギャップが生じた場合に、どのようにそれを埋めていけばいいのか、学生の質と大学が求める質の間のギャップはどう埋まるのかわかりませんが、ただ、それでもパートナーシップということは適用可能であり、それによって大学はいろいろ変化するでしょうし、高等教育をめぐる環境も変化するでしょう。大学は巨大化するかもしれませんし、縮退するかもしれません。しかし、これは基本的なエートスに関わるのです。いわば大学が持つ哲学に関わるのです。大学の哲学というのは、短期的に大学の規模が縮小したり拡大したりしても変わりません。学生達がどのようにその大学のレベルに合わせて備えたらいいのかというのは、これはまた大きなポリシーに関わる議論ですので、そこには立ち入らないようにしておきたいと思いますが、パートナーシップという基本的哲学というのは、それでも生きてくると思います。

司会：

ありがとうございました。質問は一旦ここで区切らせていただきます。質問がある方は、後半のまとめのセッションでお願いしたいと思います。

Derricott さん、どうもありがとうございました。

グループセッション1「学生参画型 FD と質保証」

司 会 進 行	: 天野 憲樹 (岡山大学准教授)
ミニレクチャー	: 川口 昭彦 (大学評価・学位授与機構特任教授)
話 題 提 供 ①	: 天野 憲樹
話 題 提 供 ②	: 曾根 健吾 (東洋大学・関東圏 FD 学生連絡会前学生代表)
コ メ ン ト	: 川口 昭彦

I. セッションテーマ：

大学における教育の内容・方法の改善を目的とするファカルティ・ディベロップメント (FD) は高等教育の質の維持・向上のためにも重要な活動である。日本においては、この FD の成果を上げる取組として学生の参加を求める事例が近年、注目されている。

現在行われている学生参画型 FD の事例を検討しつつ、この活動を高等教育の質の向上へとつなげる方向性を議論する。

II. セッション概要：

天野准教授から本セッションの趣旨説明を行った後、導入として、川口特任教授から質と質保証についてのミニレクチャーがあった。その後、1 つ目の話題提供として、天野准教授から学生参画型 FD の概要、岡山大学の事例をもとに学生参画型 FD の課題・今後の展望について説明があった。2 つ目の話題提供は、関東圏 FD 学生連絡会前学生代表である東洋大学の曾根さんから、自身の経験から導き出した学生参画型 FD の今後について提案がなされた。2 つの話題提供について、川口特任教授から評価者の視点によるコメントがあった後、全体議論が行われた。全体議論では、4 つの設問について参加者全体の意見を集め (クリッカーを利用)、隣席の参加者とペアワークを行うことにより活発な議論が展開された。

III. セッション内容 (要旨)

1. ミニレクチャー：「質および質保証とは？」

川口 昭彦 (大学評価・学位授与機構特任教授)

「質」という言葉はよく使われているが、意味が違ったり、意味が変わったりしている。質にはインプット (投入)、アクション (活動)、アウトプット (結果)、アウトカムズ (成果) と様々なレベルがあることを理解することが必要であり、今後必要なのは **teaching** を通して、学生がどれだけ **learning** をしたか、そしてその **learning** の結果として学生がどれだけ力をつけたかという「成果の質」が重要である。教育については学習成果 (ラーニング・アウトカムズ) が、研究については研究成果 (研究活動による効果や影響) が重要な質であるが、研究成果はどれだけ社会にインパクトを与えたかが重要で、これこそ社会 (社会にもさまざまな種類がある) が大学に求めているものである (論文数はアウトカムズではなく、アウトプットに過ぎない)。

質保証するための視点としては、「卓越性 (高い水準の質)」、「基準 (例えば設置審) に対する適合性」、「目的に対する適合性」、「機関の目標の達成度」、「関係者 (ステークホルダー) の満足度 (ランキング等、これは関係者の見方によって変わる)」が挙げられる。卓越性が多

様化している（社会の多様化に伴い、学習も多様化している）ため、様々な観点で卓越性を見ていく必要があり、質と質保証の観点は異なるということを理解してほしい。

大学評価の目的には、「教育研究等の質保証を行う」、「教育研究等の改善・向上に資する」、「社会に対する説明責任を果たす」が挙げられるが、最も重要なのは「社会に対する説明責任を果たす」ことである。各大学が自身の大学はどのような大学かという特色に焦点を絞って発信（ステークホルダーによって発信方法を変える必要がある）し、社会から理解されるよう努める必要がある。

2. 話題提供①：「学生参画型 FD の概要と展望」

天野 憲樹（岡山大学准教授）

学生参画型 FD とは、学生の視点を活かした授業・教育・大学をよくする取り組みであるが、学生が主体的に取り組むこと、学生の「意識改革」を含むことがポイントであり、学生参画型 FD は学生のみが行う活動ではなく、教員が学生と共に進める FD である。

FD を規定している大学設置基準が「学生」について触れていないにも関わらず、学生参画型 FD が広まった背景には、教員のみで FD に限界を感じたからではないか。なぜなら、学生からのフィードバックがなければ適切な改善につながらないことが多く、うまく改善につながったとしても、学生に学ぶ気がなければ意味をなさない。学生も変わらなければ FD の効果が出ないため、学生参画型 FD の広がりには必然の流れである。

学生参画型 FD の典型的な活動は、学生と教職員の意見交換会、学生発案型授業、学生参画型 FD のフォーラムが挙げられる。学生参画型 FD のフォーラムは、規模は異なるものの、全国各地で開催されている。また、授業評価アンケートは調査にすぎず、その信頼性は学生の主観に依存するものであるため、「授業評価アンケート≠学生参画型 FD」である。なお、学生参画型 FD の組織が次々と作られているが、大学の公式の組織、非公式の組織だけでなく、サークルの場合もある。

学生参画型 FD の組織として、岡山大学には「学生・教職員教育改善専門委員会（略称：改善委員会）」という公的な組織がある。改善委員会は、30名強の学生委員（11学部からの推薦等）、15名弱の教員委員（11学部からの推薦等）、1～3名程度の職員委員（学務部）から構成されており、規定により学生が委員長を務める。活動には、月1回の全体会議と週1回のワーキンググループ（WG）があり、システム改善WGは、物理的な学習環境、修学上の制度等の改善を担当しており、学生の意見・要望を教職員に届けるため、教員のFD研修会等に参画し、成績確認システム等の改善案を提案している。授業改善WGは、授業の改善等を担当しており、授業評価アンケートの項目検討や学生発案型授業の創作等を行っている。学生交流WGは、学生参画型FDの普及促進を担当しており、学生と教職員の意識改革を行うためのフォーラムを開催しているほか、新入生向けに履修相談会を行っている。

授業・教育・大学の今後を検討する学生参画型FDは本来、質保証に直結するものであるが、現状は学生と教職員の意見交換会以上の段階に進んでいないし、進むことができていない。実際、意見交換会やフォーラム等を開催するだけで満足してしまっており、学生参画型FDを形骸化、自己目的化させないためにも質保証に結びつける必要がある。質保証に結びつけるためには、学生参画型FDの有効性（授業・教育・大学の改善に有効であること）を

示すことが必要であるが、学生参画型 FD をどう評価するか（評価方法・検証方法）という課題がある。また、一過性のものではなく持続性のある活動にするため、組織や体制をどのように整備、制度化するかという課題もある。全体議論では、これらの課題と質保証を見据えて、学生参画型 FD は何をすべきなのかを議論したい。

Q：授業の空き時間に行っている大学もあると思うが、全体会議を設定する際にどのような工夫をしているのか。

A：月 1 回全体会議は、主に第 3 水曜日の 4 限に行っているが、全 11 学部には水曜の午後には授業を行わないよう依頼しており、現状すべての学部が調整してくれている（授業を行わざるを得ない学部がある場合、その学部の学生は授業を優先する）。

3. 話題提供②：学生参画型 FD 活動を問い直す―「学生参画の新たな形」をさがして―
曾根 健吾（関東圏 FD 学生連絡会前学生代表）

授業や周りの学生の言動等から大学での授業や学びに対して「がっかり」していたところ、2 年次にある教員が学生参画型 FD の進んでいる立命館大学の取り組みを教えてくれ、実際に当該大学に連れて行ってくれた。そして、当該大学の学生から刺激を受け、「学生みんなが主体的に学ぶ大学にしたい」という思いが芽生えたことが、学生参画型 FD に関わっていくきっかけとなった。

伝統的な講義型の授業だけで、果たして学生の力が伸びるのかという疑問が生じており、また、学生による授業評価アンケートは、授業の最後に実施されるため、学生は自己の回答が活かされたのか実感がなかった。授業評価アンケートの結果も、多くが非公表であった。学びの意識を高め、東洋大学生であることにすべての学生が誇りを持てるよう、そして授業が楽しいと思えるよう、学生の生の声を活かすべく、東洋大学内で「学生 FD スタッフ」を立ち上げ（2010）、教職員（FD 推進センター）との連携を確立し（2010）、「先生インタビュー」や「しゃべり場」、教員研究会での報告等の活動を行っている。活動を続ける中で、学生参画型 FD に対する教職員の理解者（学生の生の声を重要視してくれる教職員）が増えるとともに、学生参画の制度づくりが少しずつ進んでいる。

しかし、学生からの認知度は低く、学生 FD スタッフも「変わった学生」と見られることが多く、関心のある学生は少ない（課題 1）。学生参画型 FD 活動は、学生と教員の双方へのアクションが可能であり、その意義は、学びに関する学生の生の声を大学教育の改善に取り入れることである。課題 1 の解決には学生の主体的な学びの確立を目指すことが不可欠である。また、講義数、教員数、学生数の多い大規模大学では、学生参画による教育改善の成果を出すことが難しい（課題 2）。課題 2 の解決策は、学生参画型 FD を質保証に結びつけることと考えているが、質保証を念頭において活動している学生は少ないため、学内での制度化・組織化が必要である（制度化・組織化していないままでは位置づけが不明確なため、単発のイベントになり、学生の声は一方通行になってしまう）。学生 FD スタッフの制度化・組織化にあたっては、岡山大学型（学部代表学生委員会）と立命館大学型（やる気のある学生募集型）を組み合わせた「第三の方式（大学組織の中に学生参画型 FD 活動を制度化し、学生は常に公募する）」が改善の成果を出せるのではないかと。

学生の声がすべて正しいわけではなく、学生の学びの質を高めるために、学生と教職員が互いの意見を尊重し、協働して FD 活動に取り組むことが大学の改善につながっていくと考える。

Q：学生がどのように変わったのかを社会に説明するため、エビデンスを示す必要があると思うが、学生の主体的な学びを促すような授業は増えているのか。

A：学生がアクティブラーニングを求める報告を新任教員 FD 研修会等で行うことにより、そのような授業に取り組む教員が増え、少しずつではあるが、学生の行動を活かして授業改善に結びつけようと取り組む教員も増えてきた。

4. コメント：川口 昭彦

学生の意識改革が強調されているが、学生と教員双方の意識改革が必要。個々の授業を面白くするよりも、学科・プログラム単位でどのような人材を育てようとしているのかについて、教員の中でコンセンサスを取り、学生へ示し、組織として社会に発信していかなければならない。

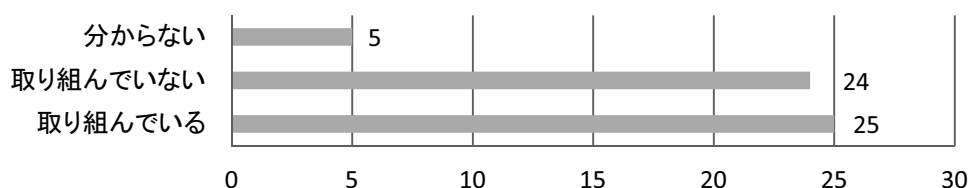
また、ウェブサイト上で知識はいくらでも手に入る時代であり、今後は知識伝達型の授業ではなく、学生が情報を得ていることを前提にした授業を目指すべきである。

5. 全体議論

全体議論ではクリッカーを利用することで、質問に対する参加者の回答が瞬時に投影され、ペアワークにおいて非常に活発な議論が交わされた。学生参画型 FD が次のステップに進むためには、質保証という問題を避けることはできない、という総括となった。

質問1. 貴学では、学生参画型 FD に取り組んでいるか：

「分からない」が多いと予想していたが、「取り組んでいる」が最も多かった。



質問2. 学生参画型 FD は質保証に使えるか：

「何とも言えない」が最も多いが、「使える」・「まあまあ使える」の回答が半数を超えた。



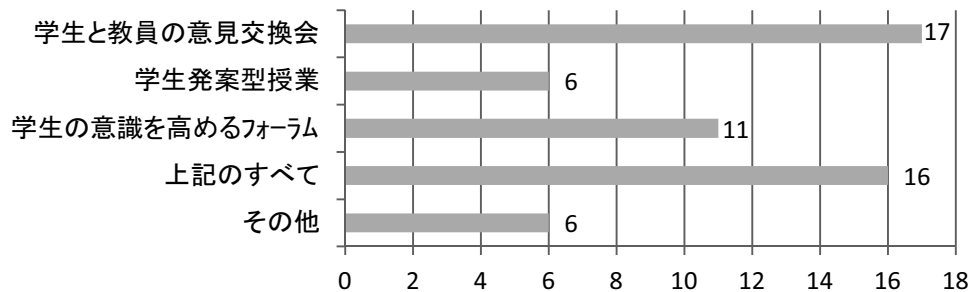
質問3. 学生参画型 FD は質保証に使えるか：

3分程度のペアワークを行った後、以下ペアワークの結果が発表された。

- 使えるという意見：グループワークのテーマを学生自身に設定させているが、グループワークを行う中で、教職員が気付かなかったことを学生が教えてくれる。
- 使えないという意見：大学の仕組みの中でどの程度学生の意見を活かしていくかという判断が難しい（例えば、学生の提案でシラバスを変更してよいのか判断がつかなかったり、予算上の問題から実行できなかったりと、学生にどれほど実行力を持たしていけるのかが教職員の課題）。

質問4. 学生参画型 FD は何をすべきだと考えるか：

「学生と教員の意見交換会」と「上記のすべて」の回答が多かった。



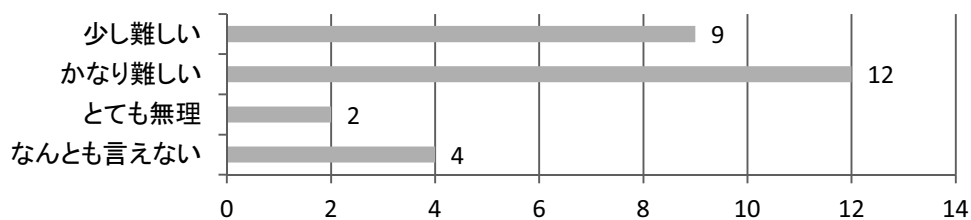
質問5. 学生参画型 FD は何をすべきなのか：

典型的な「学生と教員の意見交換会」、「学生発案型授業」、「学生の意識を高めるフォーラム」を行えばよいのか、それとも何かほかのことを行うべきなのかについて、3分程度のペアワークを行った後、その他の意見として以下の発表があった。

- その他の意見：学部の FD 懇談会（意見交換会と似ているが位置づけが少し異なる）は、教職員が学生から学ぶ機会であり、漠然とした意見交換会ではなく、対象を絞って学生の意見を聞くことにより教職員が「気付く」契機となり、初年次教育等の改善につながっている。

質問6. 貴学において質保証に結びつくような学生参画型 FD は実現可能か：

「かなり難しい」が最も多かった。



グループセッション2「これからの授業アンケートと生活実態調査」

司会進行：	田中 岳（九州大学准教授）
話題提供①：	田中 岳
話題提供②：	岡崎 成光（早稲田大学教務部調査役）
コメント：	Helka Kekäläinen（ENQA 副会長／フィンランド高等教育評価カウンシル事務局長）

I. セッションテーマ：

大学では、学生の授業の理解度や大学生活全般の満足度を把握するためのさまざまな調査が行われている。今後、学習と生活の質向上には、調査を受けた学生からのフィードバックによる調査方法の改善や調査結果の有効的な活用が重要である。

欧州における経験をふまえて、学生の経験をよりの確に把握し、質向上へ有効に活用するために必要な次のステップについて、議論する。

II. セッション要旨：

まず、田中准教授から話題提供者、コメンテーターの紹介の後、5分程度参加者同士がこのセッションに参加した理由等を話し合う時間を設け、続いて田中准教授、岡崎氏の発表がなされた。その後、Kekäläinen氏からのコメントを伺い、参加者を含めて議論が交わされた。

III. セッション内容（要旨）

1. 話題提供①：「これからの授業アンケートと生活実態調査」

田中 岳（九州大学基幹教育院教育企画開発部准教授）

(1) 授業アンケートについて

文部科学省が実施した教育改善に関する調査によると、学生による全学的な授業アンケートは多くの大学が実施しており、この結果を授業改善に反映するための組織的取組も80%の大学で行われている。ただし、このアンケートに対しては、そもそも行うことへの抵抗、アンケートのマンネリ化、回収率の問題等、様々な問題があるのが現状である。

授業アンケートを作成するに際して、教員が何をどの様に教えたかという考え方のもと、学生は「消費者」、教員は「講師」という前提にとらわれているのではないか。学生が何をどれくらいできるようになったのかという考えのもと、学生は「学習者」であり、教員は「学びの体現者」であるというように前提から考え直す必要があるのではないか。授業アンケートに対するアイデアは、学びのプロセスにいる学生に聞いてみるのが重要である。

(2) 生活実態調査

生活実態調査については、データはたくさんあるものの、その報告書はグラフや表ばかりで読み手を意識したものになっているとは言い難い。また九州大学のIR部門では、各種データを整理した冊子を作成しているが、データの包括的な提示となっている。これでは、読者

が興味関心を抱くとは残念ながら言えないだろう。せっきくのデータを活かすため、データを通じた対話の場が生まれることを期待して、「もし九大生が 100 人だったら」という媒体を企画制作した。

2. 話題提供②：「これからの授業アンケートと生活実態調査」

岡崎 成光（早稲田大学教務部調査役）

(1) 授業アンケートについて

早稲田大学では、学生による授業アンケートは、各教員の授業改善の資料として活用されるのはもちろんのこと、カリキュラムの見直しや、ノンテニユアの教員をテニユアとして採用する際にも使われている。

学生の授業アンケートについて、今までは教員からのフィードバックという双方向性の視点が欠けていたのではないかと。学生と教員の双方向のやり取りを社会一般にも開示する必要がある。

(2) 生活実態調査

生活実態調査については、早稲田大学には 5 万人の学生がいるので、1 万人の学生を無作為選出する形で行っているが、回答率が 2001 年度では 9.41% だったのに対し、2012 年度では 41.4% と高くなっている。これは、学生が大学にアピールしたいという意識や大学に対する期待の高まりと考えられる。

大学の活動に期待している層（アンケートに答えてくれる学生）、大学から積極的にアプローチしている層（成績不振者、健康上の不安があるもの）については、学生と直接やりとりする機会が多いが、両者の中間に位置する学生層（大学にとって手のかからない層）が何を考えているのか掬い取っていくことが今後必要となってくる。

3. コメント（要旨）：Helka Kekäläinen（Vice-President of the ENQA）

学生による授業アンケートについては、ヨーロッパでも同様の問題を抱えている。回収率が悪いなど、硬直化している。

アンケートの質問項目を作る際に、どのような質問を含めるかということについて学生にきいてみてはどうか。どのような質問を含めれば学生の学習経験について聞けるかということや学生に直接きいてみるのがよい。

ヨーロッパ全体でも課題になっていることだが、学生がアンケートによってフィードバックをした後に、教員（大学側）が何を得られたのか学生たちとしっかりコミュニケーションをとらないといけない。アンケートをした結果、何が起きたのか、どういう改善がなされたのかということや学生にきちんと伝えないといけない。このコミュニケーションがないと学生たちにアンケート作成に関わってもらうということに対するモチベーションを与えることができなくなる。

また、フィードバックの集め方を変えてみるのも手である。例えば、小規模のセミナーであり、授業の雰囲気が良い、お互いの信頼関係があるということであれば、直接口頭で聞い

たり、学期の途中でフィードバックを受けたりしてもよいのではないか。これによって、学期の途中からでも、教師の方で授業のやり方を変更したり、学生の理解が不足しているところを繰り返したりするチャンスがある。

4. ディスカッション：授業アンケートに関する課題等について、質疑応答やディスカッションが交わされた。

(1) 参加者からのコメント

- 消費者の立場と学習者の立場ということで、授業アンケートの位置づけは良く理解できた。教育は PDCA サイクルできちんと目標を定めて、それを実行するプログラムを作り、評価を行う。この PDCA サイクルの C に相当するものは、授業アンケートではなく、学習目標の達成度を自己評価するという直接的評価である。この評価は結果として達成ができたか、できないかということであるので、これを補完するものが授業アンケートのような間接的評価である。教育目標が妥当であった、教育内容自身が妥当であった、学生の期待を満たしていたか、達成度にどのような影響を与えたのかなど、いろいろな要素に対して学生に答えさせているのが授業アンケートである。最終的には教育というのは、学習・教育目標を達成させるということで、どのような影響があるのか、何が良くなかったのかということを探ることが重要であり、この役割を授業アンケートが担うことになるのだと思う。授業アンケートで具体的に何を聞くかはまだはっきりさせるのは難しいが、目的として達成度をあげる、目標自体がおかしいということを見つけてということであれば、授業アンケートのやり方も変わってくるのではないだろうか。
- 授業アンケートとシラバスの関係について、実際に授業を受講する学生を見て、この学生なら授業内容をもっと濃くしても大丈夫だと判断し授業を行うと、シラバスどおりではないので、授業アンケートではシラバスどおりではないとされてしまう。しかし、果たしてこの授業は悪い授業なのか。

(2) 質疑応答

Q：日本は高校を卒業するとすぐに大学に進学するので、学部学生は 20 代前半の若い人ばかりである。ヨーロッパでは、必ずしも高校卒業後すぐに大学に入学するのではなく、社会を経験してから入学する人が多いと思う。学生の年齢が高いため、思慮深く、社会経験もあるので授業に対する判断力があるのではないかと思う。フィンランドではどうかお聞きしたい。

A：フィンランドでは、1 年ぐらい社会経験を積んでから大学に入る人が多い。これは入試が難しく、入るのに時間がかかるということも関係している。フィンランドは他国と比べても学生の年齢が高いと思われているので、成熟してほしいと思う。

Q：タイトルにある「これからの」というところに期待していたが、学生を「消費者」から「学習者」という視点へ変えるという形だけか。こういうものを越えて、この先は何ができるのかということを知りたい。

A：

- 授業アンケート項目を調べていても、まだ学生をお客様としてしか見ていない大学がまだ多い。学生が達成した学習の評定、授業への貢献、成績と自己評価を結び付けていくかということは考えている。また、新学期のオリエンテーションで、学期末に授業アンケートをとるということを学生に伝えていない大学がほとんどである。方法論としては、まずはこういったことから行っていくということも考えられる。
- このほかに、ポートフォリオ、eポートフォリオも使えるのではないか。各科目のシラバスには、この科目では何の学習・教育目標を達成するかが書いてある。ポートフォリオを用いて、教育の途中で学生が知識だけでなく、スキルや能力について自己評価を行う。教員も学生も教育の途中で自己評価を行うことで、授業改善につながってくる。これと授業アンケートが近くなってくると、オンラインで授業の進行状況に合わせてポートフォリオを使用するということもできるようになるのではないか。

グループセッション3「学生が評価委員?!」

司会進行	: 鈴木 典比古 (国際教養大学理事長・学長)
話題提供①	: Dan Derricott (リンカン大学学生参画オフィサー)
話題提供②	: 鈴木 典比古

I. セッションテーマ:

日本の大学では、授業アンケートや学生参画型FDなど、学生がさまざまな形で学内での保証の取り組みに貢献している。しかしながら、第三者評価の評価委員会に学生が参加することについては想像がつきにくい。欧州においては、すでに学生が第三者評価チームに学生委員として参加している。その経験を中心に、学生が外部評価に関与することによって、何が起きているのか、何がはじめて可能となっているのかを明らかにする。

II. セッション概要:

Derricott氏から基調講演Ⅱの内容についてさらに具体的な説明があった後、鈴木教授がモデレータとなり、Derricott氏と会場の参加者が議論を行う形でセッションが遂行された。

1. 基調講演Ⅱの要旨

- 学生は評価者である: 正規のメンバーであり、パートナーである。
- 学生、教職員、組織に対する支援が不可欠である: 学生は一人の大人として扱い、教職員へは大きなビジョンと熱意を持って接する。

2. 議論

参加者: 大学進学率を見ると、欧州より日本の方が高い。これは、欧州の高等教育はエリート養成であるためだと認識しており、対して日本の学生は精神的に未熟なのではないか。

Derricott:

- 英国の学生ユニオンの発展には、授業料の値上げが大きく関連しており、学生の質保証への参画とは直接関連のない要因である。
- 我々が学生をどのくらい大人に見ているかは分からないが、少なくともパートナーとして認識はしている。教員が学生のことをパートナーと思うか、消費者と思うか、は大きな問題だ。この認識を根本から変えるには20-30年かかる。
- 学校教育が学生を充分成長させていないのは、英国・欧州・OECD諸国に共通することであり、日本の学生だけが未熟であると考えべきでない。我々は、「授業→試験」というシステムから離れるべきであり、学生は”scholar”だと認識する必要がある。

参加者：日本と外国では大学の存在そのものが異なる。日本の大学は簡単に卒業でき、日本企業は学生に若さを求める一方、技能は要求していない。こうした傾向を変えることで、大学がよりよいものになっていくと思う。

Derricott：

- 学生に機会と動機づけを与えることが大事だ。日英問わず、18歳の新入生は大学という未知の存在に、ある程度の期待を胸に入学する。英国の大学は、学生が入学後に大学と向き合い、感化され、熱中するように、当初の期待に応えようと努力する。このように、最初が肝心なのである。学生が最初に抱く期待に大学は応えなければならない。
- リンカン大学の学生の質保証参画では、質保証そのものが興味を持ちづらいテーマのため、堅苦しい会議を止めて、少人数のワークショップ形式にする等の工夫を行った。このような工夫により、学生にとってもパートナーとして扱われることに抵抗がなくなり、彼らの中に自信が芽生えてくる。
- 学生の質保証参画の問題点は、多くの学生が3-4年でいなくなってしまうことであり、専門家教育がやりにくい点がある。
- まず学生に興味を持たせ、次に仕事を与えていき、そのシステムが継続的なものになるようにすれば、あとは大学が努力しなくても学生が自然に流れを引き継ぎ始める。時間はかかるが、こうしたサイクルを確立するまで努力を続けるべきだ。

参加者：ソーシャルメディアを用いて、学生の興味を惹くことはしているか？

Derricott：QAAではYou TubeやFacebookを用いている。学長等の上層部の人間が、自身のFacebookページを持ち、学生たちとコミュニケーションをしている姿もよく見かける。例として、教員の課題へのフィードバックに満足できなかった学部生たちが、ウェブ上で他の学生からの意見を募り、問題点の指摘や解決策の提案等が行われたこともあった。

参加者：日本の企業は特定の知識を学生に要求する（例えば、会計）。対して大学教員は、こうした絶えず変化する社会からの要求についていけない。

Derricott：教育を「製品」と捉えてはいけない。学生は「パートナー」なのだから。

参加者：学生が質保証へ参画するにあたり、大学は教職員をどう支援していけばいいのか。

Derricott：まず、学生参画に興味を持ち、協力的な部署と共に取組み、「実績」を作ることが大事である。

グループセッション4「質保証への学生参画と学内マネジメント」

話題提供①	: Nik Heerens (エクセター大学 PhD 研究員)
話題提供②	: 北原 和夫 (東京理科大学教授)
司会進行	: 田中 弥生 (大学評価・学位授与機構教授)

I. セッションテーマ:

大学の質向上には、内部質保証をはじめとした学内マネジメントにおける学生の役割を明確にしておくことが効果的である。欧州における質保証と学内マネジメントへの学生参画の経験をもとに描かれたその全体像を出発点として、学生参画がもたらし得る新たな効果を探る。

II. セッション概要:

Heerens 氏からの話題提供後、北原教授からコメントを交えた話題提供があり、その後大学における学生参画の実態や課題について、本セッション参加者とのディスカッションが行われた。

III. セッション内容 (要旨)

1. 話題提供①: 「内部質保証への効果的な学生参画と大学マネジメント」

Nik Heerens (エクセター大学 PhD 研究員)

(1) 内部質保証への学生参画とは?

学生は、自らの学びに責任を持ち、かつ学習者として受け身ではなく、能動的な姿勢で大学活動に参画するべきと考えており、こういった考え方は、欧州の質保証システムを定義するあらゆるガイドラインでも、多くの文脈で詠われている。大学も、学生を「学習と大学教育の成果について共通の責任を持つ学びの共同体(Partner)」として認識する必要がある。

機関(大学)への学生参画という言葉の意味については、2つの観点が存在しており、1つは「大学運営(Management)への参画」、2つ目は「質保証(Quality Assurance)への参画」である。

大学において、教員と学生は、学習目標を協働して達成するコミュニティーであり、教育研究活動の中で、相互の対話を通して大学の諸活動の改善、向上を可能としている。

教育研究活動の改善のために、大学側は、学習の専門家としての学生からのフィードバックをどのように活用するか、また、どのように大学運営の改善に利用すべきかについて考えることが重要である。

(2) 学生参画の成果

学生参画の成果は、教育の質の向上という目的の達成のために、学生からの継続的で有益となるフィードバックやアイデアを得て、教職員がそれらから学び、活用することであり、そのためには、学生達に対して、積極的に参画する意識を植え付けることが必要となる。

また、学生の内的側面の成長を通して、学生自身の分析、交渉、調査あるいは意思表示等の能力を向上させ、より優れた人材を輩出する。

英国においては、個々の能力の向上に資する学生の経験は、大学運営の中で、①授業方法やカリキュラム設定、②人的資源の確保および設備の配置、③教育活動、④成績および学生の知識に関する達成度評価、⑤学習成果の評価、⑥教育の質と水準の向上、の中で活用されており、その後の大学としての意思決定がなされる際にも重要な観点となっている。

(3) 学生参画の機能向上のために

学生参画を向上させるためには、まず、学生の大学運営に対する関心を抱かせ、責任感を持つように奨励することからはじまる。その後、教職員との相互理解を図るための仕組みが必要となってくる。教職員と学生との協働による、カリキュラムの決定や大学運営全体の改善方法の確立のために、学生からのフィードバックを聞き入れる学内体制の構築を目指すべきである。

学生に対しても、なぜ学生参画が必要なのか、なぜ学生からのフィードバックが求められるのか、それがどのような意味を成し、学生の未来にどのようなメリットがあるかなどを説明していくことが重要である。

また、大学間においても、学生参画についての状況（グッドプラクティスや課題）について情報交換することで、社会全体としてこのような取り組みが向上させていくことが期待できる。

(4) 学生参画で考慮すべき課題

現在、学生参画に取り組んでいる英国とオランダの大学では、大学運営への学生の参画が何を目指し、それがどのように学習活動の改善に寄与するのかということを経験者に認識させる必要があり、大学側がそのための努力を怠ってはならない。学生からのフィードバックを得るために、教職員との有効な協働関係を築いていき、学生参画の方針、プロセスなどを打ち出すこととなる。

教職員側では、学生参画による大学運営に対する捉え方や活用の方法に関し、必要な知識や考え方を自ら持ち、学生に伝えていく責任を有している。あらゆる機会を利用し、学生に対して説明し、協力を仰ぐことが重要で、ここでは、学生に対する大学からの期待、参画への責任、必要な知識について情報提供を行うことが必要となる。

また、学生を参画させる段階も考慮しなければならない。既に意思決定が大学側で成された後に参画を求めても意味がなく、今後の学生のモチベーションも保てないだろう。意思決定段階で学生参画を求める必要がある。

2. 話題提供②：「Why student engagement in university management is necessary?」

北原 和夫（東京理科大学 教授）

大学は、学生にとって、トレーニングする場であり、チャレンジする場である。これらを通して、大学を活性化することが重要である。

これまでの経験から、学生が大学の政策決定において参画することの重要性を認識している。具体事例として、大学に勤務していた当時、学生寮に関する規則改正を行った際に、学生の声を取り入れ再編させたこと、また、ある大学の研究室では、教員と学生の関係を規定した憲章を策定し、

教職協働により大学の研究室間での知識や情報の共有も図られ、より、自由な雰囲気の中で研究活動を行うことを可能したケースがあった。

このように、学生参画によって、学内の規則について学生の声を取り入れて改正し、結果として改善につなげることで、学生がより活発に教育研究活動を行えること、さらに学生にとっても、今後の問題解決能力の向上につながっていくことが期待される。

大学運営に学生が参加するということは、社会を民主的に運営することを学び、かつ、試行錯誤が許される場であることである。

3. ディスカッション：

大学における学生参画の実態や課題について、本セッション参加者とのディスカッションが行われた。

Q：学生参画が必要か不要かという論点だが、学生のモチベーションに疑問がある。大学運営への参加に時間も労力も費やす学生は少数ではないか？

A：

- 学生に対するモチベーションづくりは重要で、大学側はその重要性を学生に対して説明する必要がある。
- 欧州では、現在、大学の学位を取得しても就職できない学生が増えてきており、そこで注目されているのは、学生の諸活動について、大学運営への参画としての将来的に必要となる社会的な能力の育成が挙げられる。
- 物理的な動機づけとして、学生の経済的支援も欧州では行われている。

Q：日本では、大学側の組織基盤が脆弱性であると言わざるを得ない。欧州のような制度的整備が必要ではないか？

A：

- 欧州でも、学生参画の定着には、やはり時間が必要であったようだ。必要なプロセスを踏むことは重要であろう。
- 学生が興味を持つことから始めることも重要で、このような活動を開始するあたり、小規模な範囲でも意味を持つ。
- 日本の大学で、新たにこの活動を開始するにあたっては、実際には、学生への協力を強く求めていくこととなり、その意味では、大学間で学生参画という考え方を共有する場が必要となるだろう。
- 現在の大学教育の中でも、テーマによっては、大学運営に対する学生のフィードバックを得ることができる授業（施設や環境のテーマ等）が可能である。（参加者からのコメント）

Q：現在、学生だが、大学において、広報室や図書館に非常勤で2年間勤務している。勤務している中で、学生の立場としてではなく、大学スタッフからの視点で大学活動を捉えるようになった。これは問題があるか？

A：

- 大変良いことではないか？欧州では、誰でもそのように感じる時がある。
- 広報を担当するという事は、大学活動の発信を担当することとなるから、なおさら当然の成り行きで、その経験を今後に活かしていただきたい。

Q：大学運営への学生参画に関する制度的設計について、成功事例を含め教えていただきたい。学生は、学びの専門家というが、どの分野について活動すれば学生の利益として有益となるのか。それを、どのような条件で政策に導入すべきか？

A：

- 欧州では、政策ですべて動いているものではない。大学それぞれの条件に見合った目的や方法で運営すればよいのではないか。そしてそれを大学間で共有すればこのような活動を社会全体として向上させる事が期待できる。学生参画の活動は、学生の専攻分野に傾倒するものではなく、どの研究や学習をしている学生も参加が可能であるから、門出を広く開いていくことが重要である。多くの学生は、大学の中で、学ぶことを最重要視しているが、すべての労力を学習に費やしているわけではない。
- 民主的人材の育成という観点で、学生参画の取組みは重要であるが、そのための方針づくりやプロセスを設定する必用はない。社会的コミュニティー構築のための必要な能力の育成を第一に考えるべき。

Q：学生参画活動に学生を参加させるにあたり、学生の意識に訴えるだけでは弱く、他の奨励方法について、なにが考えられるか？

A：

- 学生によって、学生参画への捉え方が異なるのは当然である。重要なのは、学生が声を挙げた時には、きちんと応え、結果を出していくことが重要である。
- 欧州では、参画への活動に対して、単位を与えるケースもある。委員会メンバーとして活動する重要性を学生に訴えていくことが重要である。

GS 報告・質疑応答・まとめ

司会：

大変お待たせ致しました。皆さん、グループセッション（GS）はいかがでしたでしょうか。有意義な時間を過ごされましたでしょうか。これより、各 GS 報告・質疑応答・まとめとなる最後のセッションを始めさせていただきます。モデレーターは当機構の土屋教授にお願いしておりますので、土屋先生よろしくお祈いします。

土屋：

ご紹介いただきました土屋です。「学生からのまなざし」というタイトルを付けている以上、今回のディスカッションをどのように感じたかを学生に話していただかないと意味がないということで、この 4 名の学生に報告をお願いしました。どういう形でこの方々を選んだかについては、なりゆき任せで選んだということなので、試験をやったとあって、そういうことはありません。質保証に詳しい訳ではありませんし、今は試験期間中といったこともあり、様々な制約がある中で、しかも 70 分の GS 後に、10 分や 15 分でまとめてくださいという無理なお願いをしているので、完璧なものは期待しておりませんから、学生の皆さんは気楽に報告していただければと思っています。

最初に各 GS にご協力いただいた方々を紹介したいと思います。

まず GS1 では、今、日本のかなりの大学で行われている学生参画型 FD について議論していただきました。岡山大学の天野憲樹先生と、東洋大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程 1 年の曾根健吾さん、彼は関東圏 FD 学生連絡会の前学生代表ですが、このおふたりにディスカッションをリードしていただきました。報告は、日本大学文理学部 4 年生で、日本大学文理学部学生 FD ワーキング・グループのリーダーをされている今宮加奈未さんをお願いしています。

GS2 は、インフォメーション・プロバイダーとしての学生という、ある意味で最も基本的な質保証における学生の役割という観点ではあるものの、各大学で実施する中で、様々な形で問題が見えてきていると思われる学生授業評価アンケートやその他の調査について、現状と将来を考えるとということで、九州大学の田中岳先生と早稲田大学の岡崎成光調査役のお二人に議論の中心になっていただきました。報告者は、青山学院大学経済学部 4 年で、学生 FD スタッフをされている石口純平さんです。

GS3 では、Dan Derricott さんと国際教養大学の理事長・学長、つい最近まで大学基準協会の専務理事をされていた鈴木典比古先生のお二人に議論をリードしていただきました。報告は、神戸大学大学院経済学研究科修士課程 1 年の河野桃さんをお願いしています。河野さんは現在、経済学研究科に在籍ということですが、学部は神戸大学の国際文化学部で、国際関係論、主として政治学を勉強されていたということです。今の研究としては、偶然

にも、EU、特にベルギーを中心とした高等教育政策というのを研究されているということです。

そしてGS4では、Nik Heerensさんと東京理科大学の北原和夫先生のお二人を中心に中心になって議論を進めていただきました。報告は、岡山大学教育学部の3年生で、理科教育を専攻されている長坂佳世さんをお願いしました。長坂さんは、岡山大学学生教職員教育改善専門委員会の委員をされています。

それでは、これから5~10分程度でディスカッションの報告をしていただきます。質疑応答は、全てのGS報告が終わった後に行います。共通の論点が出るようでしたら、できるだけそれを中心に議論してみたいと思います。では、今宮さんからお願いします。

-----各GS報告概要-----

GS1「学生参画型FDと質保証」:

- GS1は、学生FDに関わる大学教員、学生FDに関わる学生、そして大学を評価する評価者という3つの異なった立場から議論が行われた
- FDは「大学改善」を目的とし、現在各大学で取り組まれているが、そこに学生の意見を参入することによって、より学生の視点に根差したFD活動が学生参画型FDである
- 質保証に対する社会的説明責任を果たすことが、今大学に求められている
- 大学が社会的説明責任を果たす上で、教員だけでFDを推進していくには限界が見えてきたため、学生参画型FDの必要性が認識されるようになった
- 学生参画型FDは、制度化・組織化され、学生が思う存分に活動できる環境を整備することが重要
- 学生参画型FDは徐々に普及しており、大学の質を保証する上での有効性について、大学から大きな期待が寄せられている
- 大学関係者は、学生と教員間で実際に大学の授業に関する意見交換の場が学生参画型FD活動の中で最も有用であると考えている
- 質保証における学生参画型FDの有用性を認識した上で、その成果を測定し、実質的な質保証に結び付ける努力を行うことが重要

GS2「これからの授業アンケートと生活実態調査」:

- 学生アンケートと生活実態調査は多くの大学で実施されているが、形式的なものになってしまっている、学生が消費者という前提に基づいてアンケートがとられているために結果が活かされていない、教員が講師と見られているためにアンケートが満足度調査になってしまっている、といった現状がある
- アンケート結果は、ただ数字を羅列するのではなく、学生の興味を引くような見せ方を考える必要がある
- 学生を消費者ではなく学習者として捉え、学習者という前提でアンケートを作成する必要がある

- アンケート項目作成にかかる協議に学生が参加するべきであり、学生の視点が加わることで、学生にとって有意義なアンケートが作れるのではないか
- 何のためにアンケートを取るのか、アンケート結果がどのように活かされ、どのような変化があったのか、について学生にしっかりと説明、フィードバックすべきであり、学期末に1度のアンケートに加え、学期途中の実施も有効ではないか
- アンケート実施に限らず、シラバス等にもあてはまるが、なぜ必要かという大学側の説明が足りず、どうしてこうなったかという学生側の理解が足りないのが現状であり、大学と学生の相互理解の必要性を痛感した

GS3 「Students Review?!」 :

- 日本において、学生が参画する質保証を導入する場合は、うまくいっている国の活動をそのまま真似するのではなく、その文化的・歴史的な背景に注意を払い、日本の文化も考慮したうえで、導入する必要がある
- ヨーロッパの質保証における学生参画は日本とは異なり、学生がフルメンバーやパートナーとして捉えられ、学生・教職員・教育機関のための多大なサポート体制が整っているため、学生が質保証に参画しやすくなっている
- ヨーロッパの高等教育機関では、日本の高等教育機関が学生を消費者として捉えているのに対して、学生をパートナーや大人として扱っており、この日欧の違いが容易な学生参画、効果的な学生参画に影響していると感じた（報告学生意見）
- 日本の学生はヨーロッパの学生と比べて、就職や仕事を得るためのスキルの獲得に意識が向い、高等教育の改善にまで気がまわらないように見え、また、日本には英国のような大きな学生ユニオンがなく、これらも日本の学生が質保証に容易に参画できない理由ではないか（報告学生意見）
- 日本人は真面目で、質保証のすべてのプロセスに関わろうとしてしまい、学生参画により逆に高等教育の改善の遅延が懸念されるが、**Dan Derricott**さんの言うように、質保証の100%の領域に学生を参画させる必要はないと考える（報告学生意見）
- 質保証は退屈な側面もあるため、柔軟かつ面白いプロセスを持たせ、学生参画の質保証文化を維持していくために、学生の参画を継続させる小道具の必要性を感じた（報告学生意見）
- 参加者から SNS を利用してはどうかという提案があったが、学生はインターネットの活用が非常に上手であるため、容易な質保証への参画や高等教育の改善につながる可能性があるため、あまり真面目に、伝統的に考えず、SNS といった新しいものを取り入れみてはどうか（報告学生意見）

GS4：「質保証への学生参画と学内マネジメント」

- 学生は学び(learning)の専門家であり、学びの専門家が質保証に参画することにより、結果として学生からの継続的で有益なフィードバックが得られるだけでなく、質保証プロセスの中で学生の分析・交渉・調査・発表といったスキルの向上や内面的な成長につながる
- 質保証における学生参画の利点は、質保証の結果やプロセスの中に学生の視点を取り入れることにより、学生によってどのように学びが行われているかを知ることができる点である
- 質保証における学生参画を効果的に機能させるためには、意識向上のための学生支援や学生と教職員の相互理解・協働関係の構築、そして学生の意思決定への参画が必要である
- 質保証における学生参画について、大学内だけでなく大学間における意見交換も行う必要がある
- 質保証における効果的な学生参画について、学生参画に対する学生自身の認識をいかに向上させるか、研修といった学生に対する参画のための適切な条件をいかに整えるか、学生の違いによる参画の成果の異なりや教員間における学生参画に対する捉え方の違いをいかに乗り越えるか、が今後の課題である
- 学生が参画する上で大切なことは、学生が民主的な市民に育っていくことである
- 学生は様々なことに対する参画への意識が低いという意見があるが、学生にとっては参画自体が学びのプロセスであるということを学生に理解させることが大切であり、学生の意識向上には教員からの励ましと自分たちの意見がしっかりと反映されているという達成感を感じさせることが必要ではないか
- 学生の参画における国の役割は、制度設計を行うというよりも、各大学が学生参画についてどのような哲学を持ち、実行しているかを継続的にチェックすることが大切で、仕組みを作る前に、各大学において学生の意見をしっかりと反映する雰囲気を作る方が先ではないか
- 学生以外に学生の学びについて理解している者はいないのだ、という自覚を持ち続けたいと感じた（報告学生意見）

質問者 G：

本日は刺激的なセッションをありがとうございました。私は教員をしておりますが、FDの担当しているものですから、本日の素晴らしい話を他の先生たちに伝えたいと思っています。ですが、世の中には抵抗勢力と申しますか、なかなか頭の硬い先生たちがいらっしゃいます。皆さんはイノベーターであり、アダプターであると思うのですが、学生さんからのまなざしとして、そういった頭の硬い先生たちに、学生が思う「良い先生」にどうすればなれるのか、アドバイスをいただけないでしょうか。

土屋：

質疑応答の後、私の総括を予定していたのですが、今の質問への回答をもって総括に代えたいと思います。今回のフォーラムにご参加いただいた皆さまには、色々な意味で多様な意見を聞くことができ良かった、という感想をお持ちいただきたいので、是非とも最後は学生さんの言葉で総括したいな、と思います。

総括の前に、GSの進行や学生の方にGSのまとめてもらう際のサポートを当機構研究開発部の教員・研究員にお願いしましたので、簡単に紹介させていただきたいと思います。GS2は金研究員に、GS3は森准教授に、GS4は田中教授にお手伝いいただきました。どうもありがとうございました。

それでは、今宮さん、石口さん、河野さん、長坂さん、よろしくお願いします。

今宮：

私からは個別、具体的な意見は申し上げることはできませんが、1つだけ教員の方々にお願いしたいことがあります。学生には、色々な学生がいますが、その学生一人一人の意見を根気よく集めて欲しいと思っています。多様な意見がありますし、学生の意見を信頼できるのかという疑問も当然お持ちのことかと思いますが、率直な学生の意見として受け止めていただければ、何かしらの共通理解ができるのではないかと私は感じています。ありがとうございます。

石口：

私が考えるのは、まず学生と関わりを持ってもらうということです。ほとんどの学生は、教員のことを知らずに授業を受けているので、どんな教員なのか、ということを知ると、その授業にも興味を持つようになり、そこから教員と授業の話もできるような関係になれば、学生の意見が教員に届くようになると思います。あとは、私自身も大事にしていることですが、謙虚さを持つということですかね。

河野：

私が思うこと、提案することは、インタラクティブな学びのスタイルです。と言うのは、先程質問された方も少しおっしゃったことなのですが、どうしたら教員と学生の差を埋められるか、ということはすごく重要なことであって、その中で私はインタラクティブな学びのスタイルがあったら、少しはギャップも埋められるし、もっとお互いが楽しいのではないかな、と思うのです。というのは、レクチャー、授業をしている時を考えると、教えている先生もちよつとつまらなそうに見えるのです。知識をあげているだけなので。学生はすごかつまらなそうにしています。「眠い」、「先生よく分からない」、「板書汚い」といった発言がよく聞かれます。せつかく学びという場があるので、もっとインタラクティブに

したら良いと思うのです。フランスの知人から聞いた話ですと、最初にレクチャーをした後、そのトピックについて話し合おうということで、ディスカッションを行うそうです。学生は与えられた知識を使うことで、効率的な学びのスタイルができると思いますし、先生も「あ、学生はこんなことを考えるんだ」という風を楽しめると思うんです。会場の皆さんの中には、「どの大学でもできる」と感じた方もいれば、「うちの学生はできないかも」と思った方もいるかも知れませんが、トライしてみることが重要ですので、是非お願いしたいと思います。

長坂：

今宮さんと河野さんは、学生の話をよく聞いて欲しいという意見だと思うのですが、私も同じ意見で、大学の先生は教えることがプロフェッショナルで、話がすごく長いことが多いので、ちょっとだけ口をつぐんで学生話を聞いていただけたら、本音をもっと出てくるのではないかなと思います。

土屋：

以上のご回答・ご意見をもって、まとめに代えさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

閉会挨拶

岡本 和夫（大学評価・学位授与機構理事）

岡本：

ご紹介いただきました、岡本でございます。平成 25 年度大学評価フォーラム「学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割」の閉会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、このようにたくさんの方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。このフォーラムが成功のうちに、少なくとも無事に閉会したのは、皆様のお蔭でございます。心より感謝申し上げます。特にお名前は申し上げませんが、本日も登壇いただきました皆様には、貴重な講演や報告、そして議論を展開していただき、誠にありがとうございました。併せまして、このフォーラムのご後援をいただきました公益財団法人大学基準協会、公益財団法人日本高等教育評価機構、一般財団法人短期大学基準協会の皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。

さて本日は、高等教育という学びの場の主人公である学生に焦点を当てて、高等教育質保証の将来の在り方について議論を深めてきました。先ほど、学生の皆さんからすばらしい総括ありましたので、特に私から申し上げることはございません。ただ、「どうすれば学生が思う良い先生になれるのか」という最後の質問に関して、私が教員という立場から感じた答えは、学生を信頼する、ということです。それに尽きるのではないかと思います。学生はたくさん文句を言います。それでも、教員の文句ほど多くはありません。学生は多様ですが、教員だって多様です。ですので、教員は学生を信頼する、そこから出発すれば良いのではないのでしょうか。

それから、私がこのフォーラムを通してずっと考えていたのは、このような学生参加は何らかの制度につながってくると思うのですが、制度化された場合はその継続性が問題になってくるのではないかとということです。具体的にこういうことをやりたいから学生の意見を聞き、結果実現につながった、というのは成果が見えるので分かり易いのですが、制度にした途端、これを継続するのが難しくなってくるのです。大体どんなものでも、時間が経つと定常状態、要するに時間に拠らない、もう少し平たく言うとマンネリになってしまうわけです。それをどのように打破するかについて、問題意識を持ってフォーラムのお話を聞いていました。私が参加していたグループセッション 4 では、ある大学の院生の方から、長い間非常勤職員として大学で働いていると、段々大学側と言うことが似てきてしまった、という話がありました。院生くらいになると、学生というよりは段々スタッフに近づいてきているのですね。しかしそれは、順調に伸びているということなのです。なぜこんなことを言っているかということ、マンネリを打開するためには、何かしらの成果をあげることが方法のひとつですが、人が育ってくるということも大事なマンネリ打破策のひとつではないかということです。

それでは、本日も登壇いただいた方々、並びに関係機関の皆様にご挨拶申し上げます。

もに、会場にお集まりいただきました皆様に重ねて御礼申し上げて、私の閉会の挨拶とさせていただきます。そして最後に、一言だけ申し上げたいことがあります。本日はなかなか楽しいフォーラムとなり、皆様も楽しんでいただけたのではと感じておりますが、このフォーラムの開催にあたっては、当機構の教職員がスタッフとして、随分と努力をいたしました。もし、本日のフォーラムについて面白かったなという感想をお持ちいただけましたら、スタッフの活動にアプリシエイトしていただけると、非常にうれしく思います。本日はどうもありがとうございました。

大学評価フォーラム

学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

資 料

学生の参画 Student Engagement

川口 昭彦
大学評価・学位授与機構
特任教授

Student Engagement

Akihiko Kawaguchi
Specially Appointed Professor, NIAD-UE

大学評価フォーラム

- ◆ 評価への取組 改善への取組 (2007.9.20)
- ◆ 大学評価の戦略的活用と方法 (2008.7.7)
- ◆ 内部質保証システムの充実をめざしたアカデミック・リソースの活用 – 個性ある大学づくりのために – (2009.8.3)
- ◆ 学習成果を軸とした質保証システムの確立 – 学習成果の効果的なアセスメント・可視化・発信とは – (2010.8.2)
- ◆ グローバル時代における新しい質保証 – 国際機関の取り組みからみえる「機能」とは – (2011.10.26)
- ◆ 「学び」からみる高等教育の未来 (2012.7.23)
- ◆ 学生からのまなざし – 高等教育質保証と学生の役割 – (2013.7.22)

NIAD-UE

3

NIAD-UE University Evaluation Forum

- ◆ Efforts towards Evaluation; Guiding towards Improvement (Sep. 20, 2007)
- ◆ Strategy and Methodology for Using University Evaluation (July 7, 2008)
- ◆ Effective Use of Academic Resources for Enhancement of **the Internal Quality Assurance** System – For Developing University’s Distinctiveness – (Aug. 3, 2009)
- ◆ Establishing a **Quality Assurance** System based on the **Learning Outcomes** – Effective Assessment, Visualization and Publication of the Learning Outcomes - (Aug. 2, 2010)
- ◆ New Paradigm of **Quality Assurance in the Age of Globalization** – The “Functions” Viewing from Practices at International Organizations – (26 October 2011)
- ◆ **Student Learning** and the Future of Higher Education (23 July 2012)
- ◆ **Student's Role in Higher Education Quality Assurance** (22 July 2013)

NIAD-UE

4

大学紛争と学生参画の現状

- ◆ 1968年頃の学生叛乱は、西欧諸国、米国、日本などの大学において、同時多発的な現象であった。
- ◆ しかし、その後の「学生参画」に関する大学変革には、大きな差が観られる。
 - ❖ 学生に対するアンケート調査など、それらの結果を改善・向上に反映させる。
 - ❖ 学生の質保証への参画など。

NIAD-UE

5

History of Student Movement and Development of Student Engagement in QA

- ◆ Student movement in the late 1960s was the world-wide phenomena in higher education sectors in Europe, US, Japan, etc.
- ◆ A degree of development with student engagement/involvement afterword is varied with each region.
 - ❖ Student is providing information by responding to surveys on a regular basis for quality enhancement/improvement.
 - ❖ Student involvement in quality assurance, etc.

NIAD-UE

6

1970年代の欧米と日本の比較

- ◆ 「68年からの学生叛乱」の最大の原因の一つは、大学の大衆化と思われる。
- ◆ 日本(とくに米国と比較して)では、大学進学率の急上昇が起きて日が浅く、学生の意識には旧来の使命感やエリート意識が強く残っていた。
- ◆ 欧米では、学生側はかなり現実的に妥協して、大学の制度改革などを遺した。
- ◆ 1970年代後半は、欧米では不況に陥った(ポスト工業化社会への移行期)が、日本では製造業を中心として工業化社会が進展した。
- ◆ 日本の学生運動は、「青年期の反抗」であり、社会に影響をほとんど与えない一過性のものとなった。

NIAD-UE

7

Comparison Between the West and Japan in 1970s: In the Context of Students

- ◆ Expanding of higher education may have been one factor triggered student movement since 1968.
- ◆ (In comparison with US particularly) Japan had seen a rapid growth in access rate to higher education, but university was still seen as an academia for elites of students filled with a sense of mission.
- ◆ In Europe and the US, students had participated in reforms of higher education by compromising where appropriate.
- ◆ In the late 1970s, industrialized society progressed focusing on the manufacturing industry in Japan, where it fell into depression in Europe and the US (in transition to post-industrialized society).
- ◆ Student movement in Japan was a 'resistance of adolescence' as transient fever which hardly affected the society.

NIAD-UE

8

欧州における質保証と学生参画

- ◆ ソルボンヌ宣言・ボローニャ宣言（1998/1999）
欧州高等教育大臣会合により、欧州高等教育圏構想が承認
- ◆ 欧州高等教育圏における質保証の枠組み
 - ❖ ENQA（欧州高等教育質保証協会）の設立（2000）
 - ❖ ESGs（欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン）の策定（2005/2009）
 - ❖ EQAR（欧州質保証登録簿）の制度開始（2008）
- ◆ ESGsにおいて、質保証への学生参画を明記
内部質保証、外部質保証、外部質保証機関に関する基準とガイドラインに明記

NIAD-UE

9

Europe: Promoting Student Engagement in QA

- ◆ Sorbonne Joint Declaration (1998)/Bologna Declaration (1999) lead to the creation of the EHEA
- ◆ 3 Achievements in particular:
 - ❖ Establishment of ENQA in 2000
 - ❖ Drafting the ESGs in 2005 /2009
 - ❖ Creation of EQAR in 2008
- ◆ Involvement of students in drafting the ESGs
Involvement of students is stipulated in all three guidelines for IQA for higher education institutions, EQA of higher education, and external quality assurance agencies.

NIAD-UE

10

質保証に関する欧州基準とガイドライン 第1部 (学生参画について記述がある基準・ガイドライン)

第1部 高等教育機関の内部質保証に関する欧州基準とガイドライン

1.1 *質保証の方針と手続*: 高等教育機関は、質の継続的向上のための戦略を策定・実施すべきである。(略) それらには、学生および他のステークホルダーの役割が含まれるべきである。

ガイドライン: 手続の記述には以下の点が含まれていることが期待される。(略) ・質保証への学生の関与

1.2 *教育プログラムと学位の承認、監視、定期的レビュー*: 高等教育機関は、自らの教育プログラムと学位について、承認、定期的レビュー、監視に必要な公式のメカニズムを有すべきである。

ガイドライン: 教育プログラムと学位の質保証には以下が含まれていることが期待される。(略) ・質保証活動への学生の参加

Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area (ESG): PART 1 (on Student Involvement)

Part 1: European standards and guidelines for internal quality assurance within higher education institutions

1.1 *Policy and procedures for QA*: Institutions should have a policy and associated procedures for the assurance of the quality and standards of their programmes and awards. (omit) They should also **include a role for students** and other stakeholders.

Guidelines: The policy statement is expected to include: (omit) ・the involvement of students in quality assurance

1.2 *Approval, monitoring and periodic review of programmes and awards*: Institutions should have formal mechanisms for the approval, periodic review and monitoring of their programmes and awards.

Guideline: The quality assurance of programmes and awards are expected to include: (omit) ・**participation of students** in quality assurance activities

質保証に関する欧州基準とガイドライン 第2部 (学生参画について記述がある基準・ガイドライン)

第2部 高等教育の外部質保証に関する欧州基準とガイドライン

2.4 *目的にあったプロセス*: あらゆる外部質保証プロセスは、設定された目的と目標の達成に適したものとなるよう明確に設計されるべきである。

ガイドライン: 特に注目に値するのは以下の要素である。
(略) ・学生を参加させること

Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area (ESG): **PART 2** (on Student Involvement)

Part 2: European standards and guidelines for the external quality assurance of higher education

2.4 *Processes fit for purpose*: All external quality assurance processes should be designed specifically to ensure their fitness to achieve the aims and objectives set for them.

Guidelines:there are some widely-used elements of external review processes.... Amongst these elements the following are particularly noteworthy: (omit)

• **participation of students**

質保証に関する欧州基準とガイドライン 第3部 (学生参画について記述がある基準・ガイドライン)

第3部 外部質保証機関に関する欧州基準とガイドライン

3.6 *独立性*: 質保証機関は、それぞれの活動に対する自律的責任を有しており、その報告書の結論および勧告が高等教育機関、政府省庁、その他のステークホルダーなどの第三者の影響を受けてはならないという点において独立しているべきである。

ガイドライン: 質保証機関は、以下の方法を通じて独立性を示す必要がある。
(略) ・質保証プロセスの中で、高等教育の関連ステークホルダー、特に学生(学習者)の意見が求められるが、質保証の最終的な結論については質保証機関が責任を負う。

3.7 *質保証機関が用いる外部質保証の基準とプロセス*: 質保証機関によって用いられるプロセス、基準、手続きは事前に規定され、公表されるべきである。これらのプロセスは、一般に以下を含んでいることが期待される。(略) ・質保証機関が決定した専門家グループ(適宜、学生(集団)を含む)による外部評価と訪問調査。

Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area (ESG): PART 3 (on Student Involvement)

Part 3: European standards and guidelines for external quality assurance agencies

3.6 *Independence*: Agencies should be independent to the extent both that they have autonomous responsibility for their operations and that the conclusions and recommendations made in their reports cannot be influenced by third parties such as higher education institutions, ministries or other stakeholders.

Guideline: An Agency will need to demonstrate its independence through measures, such as: (omit) ・while relevant stakeholders in higher education, **particularly students/learners, are consulted** in the course of quality assurance processes, the final outcomes of the quality assurance processes remain the responsibility of the agency.

3.7 *External quality assurance criteria and processes used by the agencies*: The processes, criteria and procedures used by agencies should be pre-defined and publicly available. These processes will normally be expected to include:

(omit) ・an external assessment by a group of experts, **including**, as appropriate, **(a) student member(s)**, and site visits as decided by the agency.

欧州における質保証への学生参画事例

国名	取り組み事例
フィンランド	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が質保証に関するアンケート調査の策定や調査分析を実施。 ・評価関連ワークショップでは、学生が意見を述べたりフィードバックを行っている。 ・フィンランド高等教育評価審議会 (FINHEEC) の業務や人員構成は法令によって定められており、その中で学生に関わりも言及されている。 ・大学運営について、ボードメンバーは教授、教員・研究者・その他の職員、学生から構成されなければならない(大学法)。 ・FINHEEC は設立当初から、評価のすべての段階において、可能な限り学生を参画させている。
英国	<ul style="list-style-type: none"> ・大学が提出する自己評価書の添付資料として、学生が学生の立場で大学の質保証に関して意見を作成し、質保証機関に提出。但し、スコットランドにおいては、大学は学生と協力して自己評価書を策定。 ・大学の意思決定組織に学生を入れる大学もある。 ・スコットランドでは、専門家グループに全国学生ユニオンの学生代表が含まれる。 ・英国高等教育質保証機構 (QAA) の理事会 (17名) のうち2名が学生理事。 ・QAA は現在90名の学生評価者を有する。

参考文献: ENQA Report 2006, Devin Chun-Jung Wu, TWEA, Taiwan (APQN 総会2013の発表より抜粋)、FINHEEC および QAA のウェブサイト

NIAD-UE

17

Good Practices on Student Involvement in QA in Europe

Country	Good Practices
Finland	<ul style="list-style-type: none"> • Students spontaneously (or with the invitation from the faculty members) design QA questionnaires and conduct analysis • Invites students to participate at evaluated-related workshops, and welcomes their opinions and feedbacks. • The remit of FINHEEC including board structure is stipulated under Finnish legislation, and this refers student involvement. • Representatives of the professors, other staff (lecturers, administrative staff, etc.) and students must be included at all decision making levels under the University Act. • FINHEEC has students involved at all levels of the QA process from the very early stage of its establishment.
UK	<ul style="list-style-type: none"> • Encourages students to either submit Student Written Submissions (SWSs) to supplement the self-evaluation document, or to work with institutions in preparing the self-evaluation documents submitted by their institutions. • Institutions involve students at decision making bodies. • Scotland has a long history of involving students as a full member of a review team. • Two among seventeen of QAA Board member are students. • QAA has 90 students participating as a full member of QA review teams currently.

RE: ENQA Report 2006, Devin Chun-Jung Wu, TWEA, Taiwan, websites of FINHEEC and QAA

NIAD-UE

18

質保証における学生参画形態

- ◆ 全国レベルの質保証機関のガバナンスに参画
- ◆ 第三者評価の評価チームの委員あるいはオブザーバー参加
- ◆ 自己評価書の作成に参加
- ◆ 第三者評価の評価にかかる意思決定プロセスに参加
- ◆ フォローアップ・プロセスへの参加

Models of Student Involvement in QA

- ◆ Involving as members of the consultative bodies and/or the governance bodies for national quality assurance agencies
- ◆ Participating as members/observers of external review panels of higher education and/or programs
- ◆ Participating in the preparation of self-assessment reports
- ◆ Participating as members of the bodies responsible of external quality assurance decision-making processes
- ◆ Involving in the follow-up external quality assurance process

欧州の質保証における学生の役割

- ◆ **教育機関レベル**
 - ❖ 情報提供者
 - ❖ 自己評価書の準備など内部質保証プロセスに参加
- ◆ **第三者評価レベル**
 - ❖ 情報提供者
 - ❖ 第三者評価の評価パネルのメンバーとして参加
- ◆ **質保証機関のガバナンスレベル**
 - ❖ 評価・アクレディテーションのプランナーとして参加
 - ❖ 第三者評価機関のガバナンス組織のメンバーとして参加
- ◆ **その他**
 - ❖ 質保証政策作りにおける相談者
 - ❖ 正式のプロセスには入らないが、間接的な情報提供者

NIAD-UE

21

Student Role in QA in Europe

- ◆ **Institutional Level**
 - ❖ Providing information (by responding to surveys on a regular basis, focus groups, etc.);
 - ❖ Participating in the preparation of self-assessment reports (as members of the self-evaluation group, writing the report, providing feedback to the report etc.)
 - ❖ Participating as members of the bodies responsible of internal quality assurance processes
- ◆ **External Level**
 - ❖ Providing information (in consultation during external reviews)
 - ❖ Participating as members of external review panels of higher education institutions and/or programs
- ◆ **Level of Governance of National Quality Assurance Agencies**
 - ❖ Involved as planners of the evaluation/accreditation programs
 - ❖ Involved as members of the consultative bodies and as members of the governance bodies
- ◆ **Other — QA policy discussions**
 - ❖ Being consulted by policy makers (as governments)
 - ❖ Providing information on the issues at stake, or having a particular role of dissemination

NIAD-UE

22

学生参画のメリット

- ◆ 学生の参画は、様々な付加価値を産み出す。
 - ❖ 学習の質を評価 (Assessment) する過程で基本的な役割を担う。
 - ❖ 多様化の理解、学生に対する教育的効果。
- ◆ 質保証プロセスの向上が期待できる。
 - ❖ 従来にはなかった視点など、評価報告書の内容が充実する。
 - ❖ 学生の視点が、新しい解決の糸口として期待できる。
- ◆ 教育機関、質保証機関にとって、質向上に役立てることができるという認識が重要。

NIAD-UE

23

Benefits of Including Students in QA

- ◆ Different examples of 'added value' to be identified.
 - ❖ Students play a fundamental role in the assessment of quality of education.
 - ❖ Understanding of diversification, educational effect on students.
- ◆ Provides an improvement of processes of internal and external assurance by student involvement in these processes.
 - ❖ Students views are reflected in an enrichment of the evaluation reports, expanding and including other aspects not previously taken into account, or which have not been addressed likewise.
 - ❖ Students often provide new solutions.
- ◆ Important that both institutions and QA agencies appreciate students participation and commitment, perceiving it as inspiring and seeing good, solid results from their involvement, valuing the students as partners and great resource in this work.

NIAD-UE

24

まとめ：このフォーラムの目的

- ◆ 「学習成果」が質保証の重要なテーマであり、学習の主役である「学生」の参画は必要条件となる。
- ◆ ユニバーサル化段階に突入した高等教育において、多様化するニーズを把握するために積極的な「学生」の参画は重要である。
- ◆ 質保証プロセスに学生の参画を求める方向性は国際的な流れである。
- ◆ 参画の形態は多様である。
- ◆ わが国でも、どのような学生参画を求めていくかを明確にする必要がある。

NIAD-UE

25

Summary : Purpose of this Forum

- ◆ Students as learners — their engagement is essentials in taking necessary measures for learning outcomes for higher education
- ◆ Positive student involvement is important for understanding diverse needs for higher education in the time of massification of higher education
- ◆ It is international trend that quality assurance process is required with student engagement
- ◆ No single models/forms for student involvement
- ◆ The role of students in quality assurance of higher education should become recognized as being necessary and sought for models/forms in Japan

NIAD-UE

26

参考文献

大学評価・学位授与機構 国際連携・調査事業 http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/

Nordic Project on Student Involvement. The Finish Report, FINHEEC, 2003

http://www.finheec.fi/en?C=231&product_id=178&s=56

Student involvement in the processes of quality assurance agencies, ENQA, 2006

<http://www.enqa.eu/files/Student%20involvement.pdf>

Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area, ENQA, 2009

[http://www.enqa.eu/files/ESG_3edition%20\(2\).pdf](http://www.enqa.eu/files/ESG_3edition%20(2).pdf)

The European Higher Education Area 2012: Bologna Process Implementation Report, EACEA, 2012

<http://eacea.ec.europa.eu/education/eurydice>

QUEST for Quality for Students: Going Back to Basics, ESU, 2012 [http://www.esu-](http://www.esu-online.org/asset/Organisation/6178/QUEST-for-quality-for-students-publication-Part1.pdf)

[online.org/asset/Organisation/6178/QUEST-for-quality-for-students-publication-Part1.pdf](http://www.esu-online.org/asset/Organisation/6178/QUEST-for-quality-for-students-publication-Part1.pdf)

Student Engagement at QAA, 2013

<http://www.qaa.ac.uk/Partners/students/student-engagement-QAA/Pages/default.aspx>

Reference

Research Website on International quality assurance, NIAD-UE

http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/

Nordic Project on Student Involvement. The Finish Report, FINHEEC, 2003

http://www.finheec.fi/en?C=231&product_id=178&s=56

Student involvement in the processes of quality assurance agencies, ENQA, 2006

<http://www.enqa.eu/files/Student%20involvement.pdf>

Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area, ENQA, 2009

[http://www.enqa.eu/files/ESG_3edition%20\(2\).pdf](http://www.enqa.eu/files/ESG_3edition%20(2).pdf)

The European Higher Education Area 2012: Bologna Process Implementation Report, EACEA, 2012

<http://eacea.ec.europa.eu/education/eurydice>

QUEST for Quality for Students: Going Back to Basics, ESU, 2012 [http://www.esu-](http://www.esu-online.org/asset/Organisation/6178/QUEST-for-quality-for-students-publication-Part1.pdf)

[online.org/asset/Organisation/6178/QUEST-for-quality-for-students-publication-Part1.pdf](http://www.esu-online.org/asset/Organisation/6178/QUEST-for-quality-for-students-publication-Part1.pdf)

Student Engagement at QAA, 2013

<http://www.qaa.ac.uk/Partners/students/student-engagement-QAA/Pages/default.aspx>



質保証における学生参画の理念と実践： ENQAの観点とフィンランドの例

22.7.2013 Tokyo
Helka Kekäläinen, Ph.D.
Secretary General

1



Principles and Practice of Student Engagement in Quality Assurance: ENQA's Perspectives and Finnish Example

22.7.2013 Tokyo
Helka Kekäläinen, Ph.D.
Secretary General

2

なぜか? - 概念の変化

- 学習(learning)は望ましい教育パラダイムとして教授(teaching) にとってかわった
- 学生は知識の創造者ととらえられる。
- 自分の学習プロセスの評価を含む学習の責任は、学生に移る。
- 教育はまた、個人の成長を目指している。包括、参加の意識及び批判的に自分を評価する能力は、伝達可能な技術と個人の成長を達成するための必要条件である。
- 高等教育は民主主義社会の発展に貢献 =>関係者全員からのインプットが求められている。
- 知識社会:将来の高等教育は、循環的、状況的、学生主導とされており、教育の制度的管理に対する課題を提示し、教育の評価に影響する。

WHY? - Conceptual changes

- Learning has replaced teaching as the preferred education paradigm.
- Student is perceived as the creator of knowledge.
- The responsibility of learning, including evaluating his or her learning process, is transferred to the student.
- Education also aims at personal development. Inclusion, participation and ability to critically assess oneself, are necessary prerequisites for the achievement of transferable skills and personal development.
- Higher education contributes to the development of a democratic society => input is sought from everyone involved.
- Knowledge Society: future higher education has been described as recurring, situational and initiated by students, challenging institutional control of education and affecting the evaluation of education.

ENQAの観点

ENQA – 欧州高等教育質保証協会

ESG – 欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン

機関の内部質保証についての戦略、方針手続きには学生の役割が含まれているべきである。教育プログラムと学位の質保証には学生の参加が含まれていることが期待される。外部質保証プロセスにも学生の参加が含まれているべきであり、外部評価専門家グループには、必要に応じて、学生メンバーを含める必要がある。ENQAの専門家パネルが調整したメンバー機関の外部評価は常に欧州学生ユニオン（ESU）によって提案された学生メンバーを含む。



5

ENQA's Perspectives

ENQA – the European Association for Quality Assurance in Higher Education

ESG – Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area

The strategy, policy and procedures for internal QA of institution should include a role for students. The quality assurance of programmes and awards are expected to include participation of students. External review processes should include participation of students and also, the external assessment group of experts should include, as appropriate, a student member. The expert panel of ENQA coordinated external reviews of member agency will always include a student member, proposed by the European Students' Union (ESU).



6

学生参加の分類

1. 情報提供者としての学生
2. 行為者としての学生
3. 専門家としての学生
4. パートナーとしての学生

Classification of student participation

1. Student as an Information provider
2. Student as an Actor
3. Student as an Expert
4. Student as a Partner

歴史

フィンランドの学生がどのようにして高等教育において非常に重要な参加者になりえたのか



9

History

How did Finnish Students become such important players in Higher education?



10

全国学生ユニオン - SYL

- フィンランドの全国学生ユニオン(SYL)は、二つの地域学生ユニオンによって1921年に設立された。
- 国際的な会議でフィンランドの学生を代表した。
- すでに1930年代には、SYLは国際的な学生及び実習生の交換制度を組織し、近隣諸国と積極的に協力していた。
- 第二次世界大戦までは、国際的活動がSYLの主要優先事項であったが、その後、社会福祉や教育政策がより重要になった。SYLは常に学生や教育に関するすべての事項に積極的に関与し、主導権を取ってきた（例えば、学生健康サービス、住宅、学習支援や助成制度、環境の問題と平等など）。
- 第二次世界大戦の後、新しい、グローバルな学生活動が発展。SYLは、国際学生ユニオン(IUS)の設立メンバーの一つである。



11

National Student union - SYL

- National Union of University Students in Finland (SYL) was established in 1921 by 2 local student unions.
- Represented Finnish students at international meetings.
- Already at the 1930's SYL organised international student and trainee exchange and had active co-operation with its neighbouring countries.
- Until the WWII international activities were the major priority in SYL but afterwards social welfare and education politics became more important. SYL has always been actively involved and taken initiative in all matters concerning students and education, for example student health services, housing, study support and grant system, environmental issues and equality.
- After the WWII a new, global student activism developed. SYL was one of the founding members of the International Union of Students, IUS.



12

世界情勢下の冷戦による分裂

- 世界的な学生運動の二つのイデオロギー：共産主義運動と、様々な国の学生に具体的なサービスを提供する非政治的な国際機関というアイデア。
- SYLは1956年のハンガリー動乱（ソ連軍のブダペスト侵攻）後、IUSを脱退し、対立する学生団体である国際学生会議（ISC）に参加した。
- 1967年にはCIAが間接的にISCに資金を提供し、IUSで共産主義に積極的に反対する米国の全国学生協会（USNSA）からの学生を募集していたことが判明した。
- 資金不足に起因するISCの解散が1969年に現実となり、IUSが今一度、唯一の世界的な学生団体となった。

Cold War division in the global scene:

- Two ideologies in the global student activism: Communist movement and idea of a non-political international agency which would provide concrete services to the students of various countries.
- SYL resigned the IUS after the Hungarian Uprising in 1956 (Soviet forces invaded Budapest) and joined the International Student Conference (ISC), the opposing student organization.
- In 1967 it was found out that the CIA had indirectly funded the ISC and recruited students from the United States National Student Association (USNSA) to actively oppose Communism in the IUS.
- The dissolution of the ISC owing to lack of funds became a reality in 1969. Once again, the IUS was the only world-wide student organization.

革新的な三部構成システム

- 1960年代に、フィンランドの学生は、大学の意思決定におけるより重要な役割を要求し始めた。
- フィンランドの大学におけるすべてのレベルの意思決定組織は教授、学生、及びその他職員の代表からなる。
- 取り決めは大学法に正式に記されている。
- すべての学生は自動的に地域の学生ユニオンのメンバーになり、各機関のユニオンはSYLのメンバーである。地域の学生ユニオンは、大学内のすべての正式な意思決定組織に参加する学生の代表を選出する責任がある。学生ユニオンの立場は大学法で定義されている。
- 学科レベルでの学生団体
- 大学は科学共同体である：学生は、クラスをとる生徒としてではなく、学術機関における新来のメンバーと見なされている。



15

Revolutionary tripartite system

- In the 1960's students in Finland begin to demand a more significant role in the decision-making of their universities.
- Representatives of professors, students and other staff at all decision making bodies at all levels in Finnish Universities.
- Arrangement was enshrined in the University Act.
- All students automatically become members of their local student union and the unions of institutions are the members of SYL. The local student union is responsible for selecting student representatives to participate in all official decision-making bodies in a university. The position of the student unions is defined in the University Act.
- Student associations at the subject level.
- University is a scientific community: Students are seen more as novice members in the academy than pupils taking classes.



16

ヨーロッパにおける 展開



17

European development



18

端緒

- ESUは、西ヨーロッパ学生情報局(WESIB)と呼ばれていた七つの全国学生ユニオンによって1982年に設立された。
- 様々な国の学生に具体的なサービスを提供する非政治的な国際的情報共有機関のアイデアは、初期段階のESUを特徴づける。
- 1980年代終わりの東ヨーロッパの政治的変化は、WESIBにも影響を与え、旧東側の全国学生ユニオンに加盟を拡大した。
- 1990年2月、WESIBは“W”をはずし、欧州学生情報局（ESIB）となった。

Beginnings

- ESU was founded in 1982 by seven national unions of students was called WESIB, the West European Student Information Bureau.
- The idea of a non-political international information sharing agency which would provide concrete services to the students of various countries characterises the beginning of ESU.
- The political changes in Eastern Europe at the end of the 1980s affected WESIB as well, as it opened up itself to national unions of students from the former east.
- In February 1990, WESIB dropped the “W” to become the European Student Information Bureau (ESIB).

ヨーロッパの統合及びボローニャ・プロセス

- ESIBからESUへ、単なる情報共有組織から学生の意見や利益を代表する政治組織に変化した。
- 今日、欧州学生ユニオン（ESU）は、39の欧州諸国から47の学生ユニオンが加盟する傘下組織である。
- ESUは、ヨーロッパの主要な意思決定機関全て（欧州連合、欧州評議会、UNESCO及びボローニャ・フォローアップ・グループ）に対し、11百万人の学生の教育、社会、経済及び文化的利益を促進し、代表する。
- ESUは、欧州および国際的なレベルで影響を与え、重要な利害関係者として認識されている、アドボカシーとキャパシティ・ビルディングを行う組織である。

European Integration and Bologna process

- ESIB to ESU changed from just an information sharing organisation into to a political organisation that represents the views and interests of students.
- Today the European Students' Union (ESU) is the umbrella organisation of 47 national unions of students' from 39 European countries.
- ESU promotes and represents the educational, social, economic and cultural interests of 11 million students to all key European decision-making bodies: the European Union, Council of Europe, UNESCO and the Bologna Follow Up Group.
- ESU is a professional advocacy and capacity building organisation that is influential and recognised as an important stakeholder at the European and international level.

ESUの目的と活動

- ESUは、学生参加を保証し強化すること、及び地域、全国、欧州レベルでの高等教育政策および意思決定に学生からのインプットを増やすことを目指している。
- ESUは、万人のための質、公平性及びアクセスに関する価値観に基づいて高等教育システムを推進していく。
- すべての機関レベルでの高等教育政策に関する専門知識の源としてESUは、リンクを構築し、地域および世界レベルでの学生や学生プラットフォーム間での情報、アイデアや経験の交換を促進する。

ESU's aims and activities

- ESU aims to ensure and strengthen students' participation and to increase the student input into higher education policy and decision making at the local, national and European level.
- ESU promotes a higher education system based on the values of quality, equity and accessibility for all.
- ESU as a source of expertise on higher education policy at all institutional levels and to build links and foster an exchange of information, ideas and experiences among students and student platforms at a regional and global level.

学生参画の強みと課題

Strengths and Challenges of student involvement

学生参画の強み

- 専門的知識：学生は、評価の計画と実施において、他の専門知識に置き換えることができないような、学習や学生の問題についての専門知識を代表する。
- 信用性：学生の強力な役割をもつことで、教職員の視点のみならず、学生の視点からみても評価に信用を与えられる。
- 影響：評価に参加することによって、学生は、教育の向上に影響を及ぼす機会を持つ。評価が完了すると、学生は評価の結果を推進する役割を担う。

Strengths of student involvement

- Expertise: Students represent the expertise of studies and student matters which cannot be replaced with other expertise in the planning and implementation of the evaluations.
- Credibility: The strong role of the students gives the evaluations credibility, not only in the eyes of the staff, but also in the eyes of students.
- Impact: By participating in the evaluations, the students have an opportunity to influence the development of education. When the evaluation has been completed, the students have a role in promoting the results of the evaluations.

さらなる強み：

- 学術的共同体におけるパートナーシップ：評価への参加は、学術的共同体における対等なメンバーとしての学生の役割を強化する。
- 学習プロセス：国全体の評価プロジェクトへの参加は、学生に個人として、また、集団としての能力を向上させるかけがえのない機会を提供する。評価は大変な作業をしばしば要求するが、それらに参加した学生や学生ユニオンはその経験に非常に満足している。

More strengths:

- Partnership in the academic community: Participation in the evaluations strengthens the student role as an equal member in the academic community.
- Learning process: Participation in the national evaluation projects provides the students with a unique opportunity to enhance their individual and collective competence. Although the evaluations often demand hard work, the students and student unions participating in them have been very satisfied with the experience.

学生参画の課題

- 代替わりとトレーニング：学生のほとんどは、学生ユニオンに2～3年携わるだけである。評価作業について新しい学生を継続的にトレーニングする必要がある。
- 動機づけと報酬：時には、学生が自己評価プロセスに参加する動機づけが必要である。
- 代表性：学生は均質なグループではなく、多くの意見を持っている。
- 限られた視点：学生は教育の専門家や他の評価チームメンバーに比べて教育についての経験が少ない。

Challenges of student involvement

- Turnover and training: Most students spend only two to three years working for student unions. Continuing need to train new students in the evaluation tasks.
- Motivation and reward: Sometimes students need to be motivated to take part in the self-evaluation processes.
- Representativeness: Students are not a homogeneous group but have many views.
- Limited perspective: Students has less experience in education than education professionals and others evaluation team members.

ご清聴ありがとうございました！



Thank you for your attention!





質への学生参画 - 英国の事例：
パートナー&プロデューサー

Dan Derricott
University of Lincoln



Student Engagement in Quality - A UK
Case Study: Partners & Producers

Dan Derricott
University of Lincoln

概要

- 質：何を達成しようとしているのか
- 質プロセスへの学生参画の利点
- 英国における学生参画の台頭
- 一般的な観点：パートナーとしての学生
- 代替的な観点：プロデューサーとしての学生
- 実際：質への学生参画の例
- 優れた学生参画の原則

Overview

- Quality: what are trying to achieve
- Benefits of engaging students in quality processes
- Emergence of student engagement in the UK
- Dominant narrative: Students as Partners
- Alternative narrative: Students as Producers
- In Practice: examples of student engagement in quality
- Principles of good student engagement



- リンカン大学
起源は1861年に遡る
地元の人々の意志により2001年に設立
学生12,000名
教員620名、支援スタッフ620名
ガーディアン大学ガイド2013では
120校中47位
学生満足度は上位4分の1に入る(全国学生
調査：National Student Survey)
www.lincoln.ac.uk @UniLincoln



- University of Lincoln
Roots trace back to 1861
Established 2001 by will of local people
12,000 students
620 academic staff; 620 support staff
47th/120 - Guardian University Guide
2013
Top quarter for student satisfaction
(National Student Survey)
www.lincoln.ac.uk @UniLincoln

質

何を達成しようとしているのか？

- 最低限の学術水準及び調和/比較可能性を保証
- 学生が、学習し、学術水準を達成するための良質な機会があることを保証
- 学習機会を向上する。より良くするために常に努力する。



Quality

What are we trying to achieve?

- Assure minimum academic standards and harmonisation / comparability
- Ensure students have good quality opportunities to learn and achieve those academic standards
- Enhance the opportunities to learn. Constantly striving to be better.



質保証 & 活動の向上への学生参画の利点

- 学生は、2013年に学生であることがどのようなものであるか専門的な見解をもたらす。
- 教育に関する学生の視点は教員の意見を補完する（ただし、取って代わることは無い）。
- 学生は、新しいアイデア、エネルギー、情熱、創造性をもたらす。
- 学生は、規準と想定に挑戦することを促進する。
- 学生参画は結果ではなくプロセスである。これは質の保証と向上を達成するための方法の一つである。

Benefits of engaging students in quality assurance & enhancement activities

- Students bring an expert opinion on what it is like to be a student in the year 2013
- Students perspective on teaching and learning complements (but does not replace) the opinion of academics
- Students bring new ideas; energy; enthusiasm; creativity
- Students help challenge norms and assumptions
- Student engagement is a process, not a product. It is one method for achieving quality assurance & enhancement.

英国における質保証及び向上への学生参画の台頭

簡易年表

The emergence of student engagement in quality assurance & enhancement in the UK

A brief timeline

- 1980年代- 学生意見書提出の規定
- 1990年代 - HEQC（高等教育水準評議会）：学生意見書の提出はないが、学生との面会を必須とした。局地的に参画するコース代表者として学生トレーニングの開始
- 1997年 - QAA の設立
- 2002 年- 新たな機関別オーディット方式に「学生意見書」が再導入。最初の QAA職員の雇用；主要な会議の開催。
- 2002-03年 -スコットランドの教育セクターが、「向上型テーマ」の取組の主要原則として学生参画を採用。学生評価者とSPARQS（スコットランド質における学生参加支援機関）の導入。

- 1980s – provision for student written submissions
- 1990s – HEQC: no student written submission, but meeting with students compulsory. Started to train students as course reps to engage locally.
- 1997 – QAA established
- 2002 – ‘Student Written Submission’ re-introduced into new Institutional Audit method. First QAA staff employed; major conference held.
- 2002-03 – Scottish sector adopted student engagement as a major principle in their approach in their ‘enhancement themes’. Introduced Student Reviewers and SPARQS.

- 2006年 - グラスゴーにおけるQAA会議では、スコットランドの全国学生ユニオン会長及びSPARQS会長から肯定的な影響について聞いている。QAA理事会は**学生評価者は、英国全体で展開されるべきである**と合意し、当初、6大学で試験的に実施され、全国会議へ報告された（結果は好評だった）。
- 2007年 - QAA職員の増加、QAA学生参画戦略：学生ユニオンへの支援、理事会の学生メンバー
- 2009年 - イングランド高等教育財政カウンスル（HEFCE）が、オープン・ユニバーシティの高等教育研究&情報センター（CHERI）に学生参画の状況を報告することを委託。これは、高等教育アカデミーおよび全国学生ユニオンにさらなる資源開発および学生参画の支援のためのHEFCEの資金提供のもととなった。

- 2006 – QAA Conference in Glasgow heard from NUS Scotland President & Head of SPARQS on positive impact. QAA Board **agreed Student Reviewers should be rolled out across the UK** - first piloted in 6 English universities and reported on to a national conference (it was well received).
- 2007 – More staff in QAA; QAA Student Engagement Strategy: support for students' unions, student member of the board
- 2009 - the Higher Education Funding Council for England (HEFCE) commissioned the Open University's Centre for Higher Education Research & Information (CHERI) to report on the state of student engagement. This resulted in HEFCE funding the Higher Education Academy and the National Union of Students to further develop resources and support for engaging students.

- 2010年 - QAA理事会が、大学が質プロセスに学生を参画させるという正式な期待を主張する「解説記事」文書を受け取る - その後、QAAは「QAAのすべての業務において主要な利害関係者グループとして学生を扱う。」
- 2010年 - QAA新戦略計画: 第一の目的は、QAAが学生のニーズを満たしていることを保証すること
- 2012年 - 英国高等教育のための質規範(Quality Code)が改定され、新しい章にすべての高等教育提供機関が遵守しなければならない、学生参画について期待される事項が導入された

- 2010 - QAA Board receives 'think piece' document arguing for a formal expectation that Universities engage students in quality processes - and that QAA 'treats students as the primary stakeholder group in all its work'
- 2010 - QAA's new strategic plan: 1st aim is to ensure QAA is meeting students' needs
- 2012 - UK Quality Code is revised and a new chapter / expectation on student engagement is introduced that all providers of Higher Education must comply with

現在の状況 - 最重要点

- 高等教育課程を提供する大学およびカレッジの主な評価（レビュー）のすべてで、評価員団の中に十分な学生メンバーがいる（学生評価者100名以上）
- 評価（レビュー）を受けている大学またはカレッジの学生は評価者のもとへ書面を送ることができ、水準及び質のすべての分野について学生からの視点を与えている
- QAA理事会には学生が2名入る
- 理事会の正式な委員会：学生諮問委員会

The current situation - highlights

- All major reviews of Universities and Colleges that deliver higher education courses have a full student member of the panel (over 100 student reviewers)
- Students at the University or College being reviewed can send a written submission to the reviewers - giving the student perspective on all areas of standards & quality
- Two student members of the QAA Board of Directors
- Formal committee of the Board of Directors: the Student Advisory Board

高等教育における学生の役割をめぐる現在の概念

パートナー vs. プロデューサー

Current concepts around the role of students in higher education

Partners vs. Producers

一般的な観点：パートナーとしての学生

- 教育の受動的な消費者としての学生を否定
- 学習及び研究におけるパートナーとしての学生///
教育の変革及び質プロセスにおけるパートナーとしての学生
- 学生自身の教育における学生の積極的な役割を強調
- この立場を支える三つの視点：
 - 学術- 高等教育アカデミー
 - 学生 - 全国学生ユニオン
 - 規制者 - 高等教育質保証機構（QAA）

Dominant narrative: Students as Partners

- Rejection of students as passive consumers of education
- Students as partners in their learning & research ///
Students as partners in educational change & quality processes
- Emphasises students' **active** role in their education
- Three perspectives supportive of this:
 - Academics - Higher Education Academy
 - Students - National Union of Students
 - Regulators - Quality Assurance Agency

学術

- 高等教育アカデミー(HEA)は、学習/研究におけるパートナーとして学生を参画させる教員を支援するための「パートナーとしての学生」プロジェクトを実行
- 研究に関与する教育を含む、非常に肯定的な教育のより積極的な形態を推進
- パートナーとしての学生のための支援を有意義なものとするために、HEAは教師育成コースを認定



Academics

- Higher Education Academy (HEA) runs a 'Students as Partners' project to support academic staff in engaging students as partners in their learning / research
- Promotes a more active style of teaching & learning as very positive, including research-engaged-teaching
- HEA accredits teacher education courses so their support for students as partners is significant



学生

- 全国学生ユニオン（NUS）は、質と制度変更において学生参画を支援するために、学生ユニオンを支援する学生参画及び質ユニットを持っている
- 「パートナーシップ・マニフェスト」を2013年に公開：パートナーシップのある一定のタイプのための原理的な主張
- NUSの役員は、すべての主要なセクター機関の委員会のメンバーである。学生は全国規模で参画している



Students

- The National Union of Students (NUS) has a Student Engagement & Quality Unit that supports students' unions to facilitate student engagement in quality and institutional change.
- Published 'A Manifesto for Partnership' in 2013: radical case for a certain type of partnership
- NUS Officers are members of the boards of all key sector bodies. Student engagement nationally.



規制者

- 高等教育質保証機構(QAA)は、質保証及び向上への学生参画について英国高等教育のための質規範(Quality Code)の中の真新しい章を公表
- 高等教育提供機関が学生を教育経験の保証および向上に、個人ごと、また集団として参画させることを期待。優れた実践の指標が7つある。



Regulators

- The Quality Assurance Agency (QAA) published a brand new chapter in the UK Quality Code on student engagement in quality assurance & enhancement.
- Expectation that providers of higher education engage students, individually and collectively, in the assurance and enhancement of their educational experience. 7 indicators of good practice.



代替的な観点：プロデューサーとしての学生

- 教育の受動的な消費者としての学生を否定
- ウォリック大学で考案され、リンカン大学で発展し、全学的に採択された
- 研究に従事させる教育/探求を基礎とする学習をめぐる教育を中心とした組織原理
- 政治的に本質的な起源。大学の意義とアイデンティティの危機に学者からの反応。
 - ヴァルター・ベンヤミン - 1930年代に著者はプロデューサーだという言説
 - ベルリンのフンボルト「近代」大学 - 研究 & 教育
 - 米国の再考案委員会。研究と教育の衝突
 - 1962年学生講義運動：学生どころではない学生

Alternative Narrative: Student as Producer

- Rejection of students as passive consumers of education
- Conceived at the University of Warwick, developed and adopted institution-wide at the University of Lincoln
- An organising principle for teaching & learning centred around research-engaged-teaching / inquiry-based-learning
- Deep radical political roots. A response from academics in a crisis of meaning and identity for Universities.
 - Walter Benjamin - Author as Producer talk in 1930s
 - Humboldt 'modern' University in Berlin - research & teaching
 - US Reinvention Committee. Research & teaching conflict.
 - Student protest movement 1962: students more than students

- プロデューサーとしての学生は、大学の意義を述べ直し、教育と研究との間、並びに教師と学生間の関係を再構築することを求める
- 実際に、カリキュラムの設計や新コースの承認/コースの再承認に積極的に学生が参画してきた
- カリキュラムを超えた原則の拡大：大学のプロデューサーとしての学生
- <http://studentasproducer.lincoln.ac.uk>

- Student as Producer seeks to restate the meaning of a universities; to re-engineer the relationships between teaching & research and between teachers & students
- Practically it has seen students engaged actively in the design of the curriculum and the approval of new courses / re-approval of courses.
- Extended the principles beyond the curriculum: Students as Producers of their University.
- <http://studentasproducer.lincoln.ac.uk>

パートナー vs. プロデューサー？

Partners vs. Producers?

実際には

質への学生参画の例

In Practice

Examples of student engagement in quality

学生代表

- 大学間で共通
- コース、学科レベルで学生たちによって選出
- 通常、学生ユニオンによって支援
- 質に対する責任を持っているコースまたは学科の委員会のメンバー
- 学生代表者によって提示された意見は、質モニタリングおよび評価プロセスにおいて考慮



Student Representatives

- Common across Universities
- Elected by peers at course and department level
- Usually supported by Students' Union
- Members of course or department committees that have responsibility for quality
- Views presented by Student Reps are considered in quality monitoring and evaluation processes



変革推進者としての学生

- エクセター大学
- 学生が彼らの教育・学習経験の一部を変更するためのプロジェクトを先導する
- 自然系科目のためのエッセイ執筆ガイドの作成
- 言語授業料を聴取して1年生を支援するための2年生と3年生の体制の開発
- 学術的評価とフィードバックの実施を改善
- 講義や他の教育に新しい技術を統合



Students as Change Agents

- University of Exeter
- Students lead projects to change part of their teaching and learning experience
- producing essay-writing guides for science subjects
- developing schemes for second and third year students to help first years with language tuition
- improving academic assessment and feedback practices
- integrating new technology into lectures and other teaching



サポート部門

- ・ リンカン大学
- ・ 学生参画戦略
- ・ すべてのサポート部門が学生参画計画と学生参画擁護者を持つ
- ・ 人事 - 職員任命委員会の一員の学生
- ・ 施設 - 建築物設計及び改修に関わる学生
- ・ 図書館 - 新しい導入プロセスを設計



Support Departments

- ・ University of Lincoln
- ・ Student Engagement Strategy
- ・ Every support department has a Student Engagement Plan and a Student Engagement Champion
- ・ Human Resources - students on staff appointment panels
- ・ Estates - students involved with building design & refurbishment
- ・ Library - designing new induction processes



学生評価者

- 高等教育質保証機構(QAA)
- 全国的に募集され、熱心なトレーニングを受けた学生の大規模なグループ。100名を超える。
- 学生経験に特に焦点を当てた評価委員会の正式メンバー
- 同額の報酬が支払われる
- 異なった視点から、様々な質問をする。学生に焦点をあてて。



Student Reviewers

- Quality Assurance Agency
- Large group of students recruited nationally and given intense training. Over 100.
- Full member of the review panel, often with a particular focus on the experience of students
- Paid the same fee
- Ask different questions, from a different perspective. Student focus.



学生参画の原則 高等教育アカデミー（１）

- ・ 確実性: パートナーとして働く学生（及びほかのもの）にとって明確な根拠がある場合、各パートナーは計画や前もって仕事を引き受けることに関わり合いがある
- ・ 包括性：協力業務において参画を防げる障壁がないこと
- ・ 学生「のために」または「について」ではなく、学生「と」話すこと
- ・ 現体制やプロセスへ単に協力業務をはめ込むのではなく、根本的な変化を切り開くこと
- ・ 協力業務の必要性が関係するすべての当事者によって認められ、同意されること
- ・ 共有の目的、価値及び原則の進展
- ・ お互いの認識を理解するために時間を割き、どのようにそれが協力関係に影響を与えるか

Principles of student engagement Higher Education Academy (1)

- Authenticity: where there is a clear rationale for students – and others – to work in partnership, each partner has a stake in the agenda and in taking the work forward
- Inclusivity: the absence of barriers that prevent engagement in partnership work
- Speaking 'with', not 'for' or 'about' students
- Being open to radical transformation, not just slotting partnership work into existing structures and processes
- A need for partnership work to be acknowledged and assented to by all parties involved
- Development of shared purpose, values and principles
- Taking time to understand our perceptions of one another and how that affects partnership relationships

学生参画の原則 高等教育アカデミー（２）

- 共同の意思決定と説明責任の取り決め
- パートナーが行う差異や独自の貢献の認識の価値の同等性
- 権力関係の承認：問題と指針の所有権がどこにあるか、また、業務の結果がどのように使用されるかということに関して明確であること。既存の不平等を肯定する構造や慣習に異議を唱える覚悟があること。
- 信頼関係を構築するために時間を割くこと
- リスクテイキングを促進する環境を築くこと
- パートナーシップ業務を支援するための資源を識別すること
- 評価と学習に共有される義務を包含すること
- パートナーシップ業務に成功した成果や取組を評価し、宣伝すること

Principles of student engagement Higher Education Academy (2)

- Joint decision making and accountability arrangements
- Equality of value whilst recognising difference and the unique contribution each partner makes
- Acknowledgement of power relationships: being clear about where ownership for issues and agendas lies and how outcomes of work will be used. Being prepared to challenge structures and practices that re-affirm existing inequalities.
- Taking time to build trust
- Creating an environment that encourages risk taking
- Identifying resources to support partnership working
- Embracing a shared commitment to evaluation and learning
- Celebrating successful outcomes of and approaches to partnership working



質への学生参画 - 英国の事例：
パートナー&プロデューサー

Dan Derricott
University of Lincoln



Student Engagement in Quality - A UK
Case Study: Partners & Producers

Dan Derricott
University of Lincoln

質および質保証とは？

平成25年度大学評価フォーラム
GS1「学生参画FDと質保証」
川口昭彦
大学評価・学位授与機構 特任教授

次元の異なる「質」がある

	具体的内容
インプット (投入)	教育研究活動等を実施するために投入された財政的、人的、物的資源をさす。
アクション (活動)	教育研究活動等を実施するためのプロセスをさす。計画に基づいてインプットを動員して特定のアウトプットを産み出すために行われる行動や作業をさす。
アウトプット (結果)	インプットおよびアクションによって、大学(組織内)で産み出される結果をさす。
アウトカムズ (成果)	諸活動の対象者に対する効果や影響も含めた結果をさす。学生が実際に達成した内容、最終的に身につけたもの、刊行された論文の効果や影響などである。

最も重要な「質」は？

- ∞ 成果(アウトカムズ)の質である。
- ∞ 教育については、学習成果(ラーニング・アウトカムズ)である。
- ∞ 研究については、研究成果(研究活動による効果や影響)である。

NIAD-UE

3

質保証するための視点

- ∞ 卓越性(高い水準の質)
- ∞ 基準に対する適合性
- ∞ 目的に対する適合性
- ∞ 機関の目標の達成度
- ∞ 関係者の満足度

NIAD-UE

4

大学評価の目的

- ✧ 教育研究等の質保証を行う。
- ✧ 教育研究等の改善・向上に資する。
- ✧ 社会に対する説明責任を果たす。



学生参画型FDの 概要と展望

岡山大学・教育開発センター
天野憲樹
amano@cc.okayama-u.ac.jp

学生参画型FDとは？

- 学生の視点を活かした授業・教育・大学をよくする取り組み
 - ポイント：
 - 学生が主体的に取り組む
 - 学生の「意識改革」を含む



なぜ「学生参画」なのか？



- 教員だけで効果のある「FD」は実現可能か？
 - 学生からのフィードバックがないと適切に「改善」できないことが多い
 - 理想的な「改善」がなされても、学生に学ぶ気がなければ意味はない
 - ○○を水飲み場に連れて行くことはできるが...
- 学生も変わらなければならない！

典型的な学生参画型FD活動

- 学生と教職員の意見交換会
- 学生発案型授業
- 学生参画型FDのフォーラム
- その他
 - 教員インタビュー, 学習支援



全国に広がる学生参画型FD



- 学生参画型FDフォーラムへの参加者が増大
 - 学生FDサミット2012夏(59大学, 427名)
 - ※同種のフォーラムが各地で多数開催
- 学生参画型FDの組織
 - 公的な組織
 - ボランティアによる非公式の組織
 - サークル

岡山大学の学生参画型FD

- 「学生参画型FD」を岡山大学の特色と位置付け, トップダウンで公的な組織を構成
 - 学生・教員FD検討会(2001.6)
 - 学生・教職員教育改善委員会(2003.7) 改称
 - 学生・教職員教育改善専門委員会(2010.4)
 - ※通称:改善委員会, 愛称:SweeTFooD

改善委員会の構成・活動

■ 構成 ※委員長は学生

- 学生委員:30名強 ※11学部から推薦+残留
- 教員委員:15名弱 ※11学部から推薦ほか
- 職員委員:学務部から若干名 ※1~3名程度

■ 活動

- 月1回の全体会議
- 週1回のWG:システム改善・授業改善・学生交流

システム改善WG

■ 物理的な学習環境や修学上の制度等の改善に関する活動

- 教員のFD研修会などで話題提供
 - 上制限の見直しに関する提案,
 - 自転車置き場の改善に関する提案など
- 担当部課への直接的な改善提案
 - 成績確認システムの改善提案など



授業改善WG



■ 授業の改善等に関する活動

- 授業評価アンケートに関する調査・改善など
 - アンケートの項目を検討(H16)
 - 自由記述式アンケートの改善提案
- 学生発案型授業の創作 ※H15年から9科目
 - 学びたいことを学ぶ(主体的な学びを促進)
 - 教員との授業創作を通じて、教育改善を考える


学生交流WG



■ 学生参画型FDの普及・促進に関する活動

- 学生参画型FDのフォーラムi*Seeの企画・開催
 - 2005年度から毎年9月に開催(20大学100名程度)
 - 全国の大学に影響:立命館大学の学生FDサミット等
- 新入生のための履修相談会の開催
 - 学生に「大学生」としての自覚を促す
 - 「履修」を通じて、教育改善への気づきを得る

展望：「質保証」へ

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ■ 学生参画型FDが本来の目的を果たすなら、質保証に結びつくはず | <ul style="list-style-type: none"> ■ 学生・教職員の意見交換会以上の段階に進まない(進めない) |
|  | |
| <ul style="list-style-type: none"> ■ 学生参画型FDを形骸化・自己目的化させないためにも、質保証に結びつけたい | <ul style="list-style-type: none"> ■ 活動に学生が関与するだけで満足してしまう |

「質保証」と結びつくために

- 学生参画型FDの有効性を示す必要がある
 - 授業・教育・大学を良くしているのか？
 - 学生参画型FDをどう評価(検証)するか？
- 持続的な活動でなければならない
 - 組織・体制をどう整備するか？

2013/07/22 「平成25年度 大学評価フォーラム」GS1

「学生参画型FD活動を問い直す」
—学生参画の「新たな形」をさがして—



東洋大学 大学院教育学専攻
関東圏FD学生連絡会 前学生代表

曾根 健吾

話題提供の内容 ～学生の視点で～

1. なぜ学生参画型FD活動に関わったのか
2. 東洋大学での学生参画型FD活動
3. 学生参画型FD活動に関与して、何が変わったのか
4. 学生参画型FD活動の課題
課題の解決に向けて

1. なぜ学生参画型FD活動 に関わったのか

・私は、大学に「ガッカリ」しました。

→授業、雰囲気、周りの学生・・・

・FDに参画したきっかけは、「教員」からの声かけと、他大学の学生からの「刺激」。

・学生みんなが主体的に学ぶ大学にしたいという思いが芽生えた。

3



東洋大学のある授業にて(許可を受けて撮影 ※吹き出しも、許可を受けています)



「授業評価アンケート」はあるけれど

学生の声を聞く、代表的な取り組み

「学生による授業評価アンケート」

- ・回答が活かされたのか、実感がない。
- ・授業ごとの結果は、多くが非公表。
- ・「アンケートで信頼している学生とは、個々の具体的な学生ではなく、統計学データとして処理された抽象的な学生」(圓月, 2012)

5



私は「がっかり」で終わらなかった！

・東洋大学で「めざしたい」と思ったこと

- ・学生の「学び」への意識を高めたい。
- ・東洋大学生であることに、すべての学生が誇りをもてる大学にしたい。
- ・そのために、学生の「生の声」を、教育改善に活かすことを当たり前にしたい。

6



2. 東洋大学での学生参画型FD活動

• 東洋大学学内での取り組み

- ①「学生FDスタッフ」の立ち上げ(2010)
- ②教職員(FD推進センター)との連携の確立(2010)
- ③主な取り組み

先生インタビュー、しゃべり場の開催

教員研修会での報告、ニュースの作成

7



先生インタビュー(2010～)



8





3. 活動に関与して、何が変わったか

- ・学内の意識が、少しずつ変わった。
→学生の声を、FD活動に活かそうという動きが活発になった。
- ・教職員の理解者が増えた。
- ・現在、東洋大学では学生参画の仕組みづくりが、少しずつ進展中。

4. 学生参画型FD活動の課題

- ① 学生の認知度が不足している。
→関心ある学生は、ごくわずか。
 - ② 大規模大学では、成果を出すことは
難しく、まだまだ試行錯誤中。
(東洋大学は、学生数約30,000人)
- ★ 取り組む教職員や学生の自己満足で
終わらない。



11

課題①の解決に向けて

◆「学生の主体的な学び」の確立を めざすべき

- ・学生参画型FD活動は、学生と教員双方への働きかけ(アクション)が可能。
- ・学びに関する、学生の「生の声」をFDに取り入れることに、学生参画FD型活動の大きな意義がある。



12

課題②の解決に向けて

◆ 学生参画を「質保証」に結びつける

- ・教育の改善に結びつかなければ、意味がない。
- ・しかし、学生には質保証は重すぎる。
- ・継続的に取り組み、質保証に結びつけるためには学内での制度化、組織化は不可欠である。



13

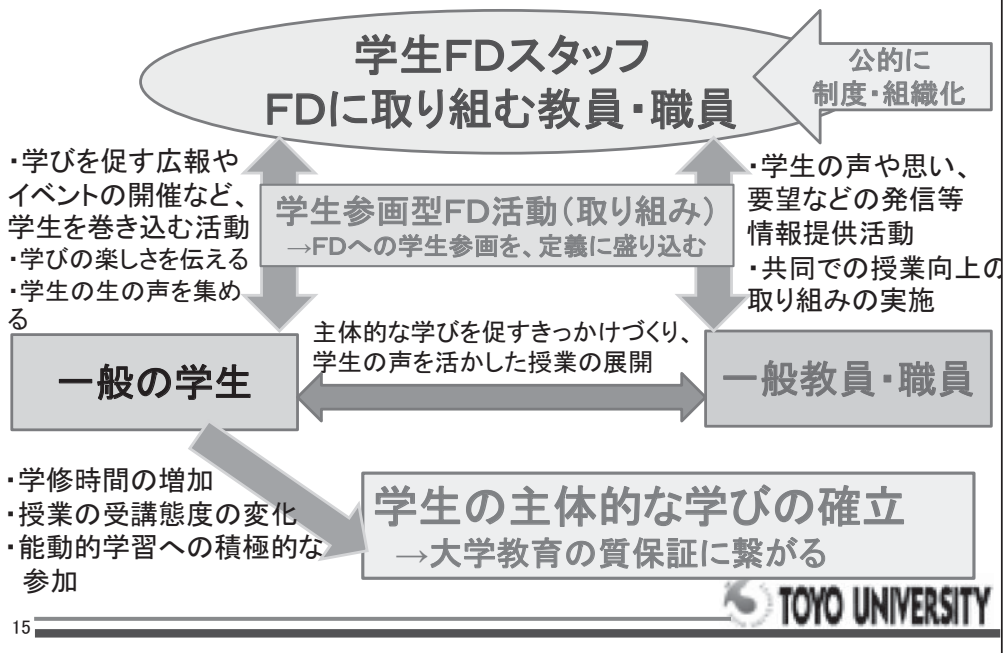
では、どう制度・組織化するか？

- ・岡山大学方式でもなく、立命館大学方式でもない、「第3の方式」へ
 - ・岡山大学型：学部代表学生委員会
 - ・立命館大学型：やる気のある学生募集型
 - ・大学組織の中に学生参画型FD活動を制度化し、学生は常に公募する。
- そして、着実に改善の成果を出す。



14

質保証に結びつけるためのモデル私案



ご清聴、ありがとうございました。

ご不明な点などは、
遠慮無くご質問ください。



関東圏FD学生連絡会マスコット
おじかちゃんとおめじかちゃん

曾根 健吾


soneken-ace@crest.ocn.ne.jp

TOYO UNIVERSITY




セッション① 「学生参画型FDと質保証」

全体議論



問題提起：学生参画型FDは...

- 質保証に結びつくか？
 - どう評価(検証)するか？
 - 組織・体制をどうするか？
- 何をすべきか？



↓

皆様のアイデアを歓迎します！

貴学では学生参画型FDに...

- | | |
|----|-------------|
| 25 | 1. 取り組んでいる |
| 24 | 2. 取り組んでいない |
| 5 | 3. 分からない |

学生参画型FDは質保証に...

- | | |
|----|-------------|
| 13 | 1. 十分使える |
| 17 | 2. まあまあ使える |
| 5 | 3. あまり使えない |
| 3 | 4. まったく使えない |
| 19 | 5. 何とも言えない |

ペアワーク①

- 学生参画型FDは「質保証」に使えますか？
 - 「使える」と思う理由は何ですか？
 - 「使えない」と思う理由は何ですか？ 3分

自分の意見を明確にして、
隣の人と議論して下さい！



TIMER

学生参画型FDは何をすべきか？

- | | |
|----|-------------------|
| 17 | 1. 学生と教員の意見交換会 |
| 6 | 2. 学生発案型授業 |
| 11 | 3. 学生の意識を高めるフォーラム |
| 16 | 4. 上記のすべて |
| 6 | 5. その他 |

ペアワーク②

■ 学生参画型FDは何をすべきでしょうか？

- 学生と教職員の意見交換会？
- 学生発案型授業？
- 学生の意識を高めるフォーラム？
- その他？

自分の意見を明確にして、
隣の人と議論して下さい！

3分

TIMER

貴学で実現できますか？

- | | |
|----|--------------|
| 6 | 1. 十分できる |
| 20 | 2. なんとかできそう |
| 9 | 3. 少し難しい |
| 12 | 4. かなり難しい |
| 2 | 5. とても無理 |
| 4 | 6. なんととも言えない |

ありがとうございました





1505-1615グループセッション(セッション2)

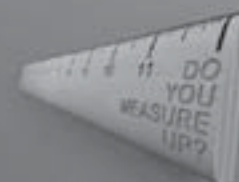
これからの授業アンケートと生活実態調査

■話題提供: 田中岳 (九州大), 岡崎成光 (早稲田大)

Helka Kekäläinen (Vice-President of the ENQA)

Think-Pair-Share

- このセッションに参加した理由(期待すること)などを、お隣の方と語り合ってみましょう



orientation (GRIP)

Role 役割

- ✓ 豊かな場面づくり:この場にいる皆さん
- ✓ 話題提供:田中岳, 岡崎成光
- ✓ コメント:Helka Kekäläinen
- ✓ まとめ:石口純平



orientation (GRIP)

Impact ねらい

- ✓ 大学では、学生の授業の理解度や大学生活全般の満足度を把握するためのさまざまな調査が行われている。今後、学習と生活の質向上には、調査を受けた学生からのフィードバックによる調査方法の改善や調査結果の有効的な活用が重要である。

欧州における経験をふまえて、学生の経験をより的確に把握し、質向上へ有効に活用するために必要な次のステップについて、議論する。



orientation (GRIP)

Goal 目標

- ✓ 授業アンケートや生活実態調査の「次のステップ」と現状について、あなた自身の言葉で解説できるようになる。
- ✓ あなたの大学で「次のステップ」を展開するために求められる課題について、あなた自身の言葉で示すことができようになる。



orientation (GRIP)

Process 道筋<1505-1615>

- ✓ Think-Pair-Share 【3分程度】
- ✓ orientation 【6分程度】
- ✓ 話題提供: 田中岳, 岡崎成光 【12分×2】~1545
- ✓ コメント: Helka Kekäläinen
- ✓ 対話
- ✓ 省察とまとめ(石口純平)



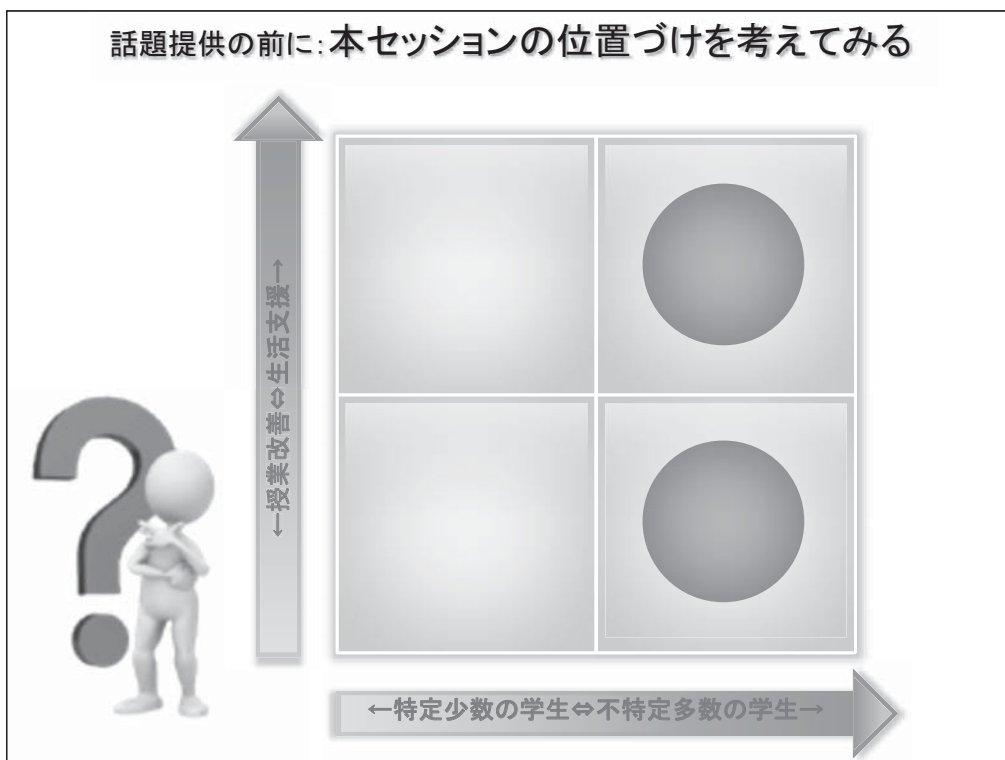
ground rule



安心して意思の疎通がはかられる
ような環境づくりを心がけよう

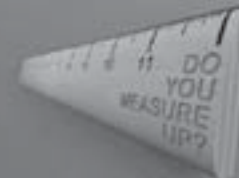
開かれた率直な対話を奨励しよう

2Dよりも2Lを推奨しよう:
防衛<defending>と議論<debating>の兆しに
気づき、傾聴<listening>と学習<learning>を
大切にしよう



これからの授業アンケートと生活実態調査を考えるために

田中岳(九州大)



599大学
(約80%:平成21年度)

全学的な学生による授業評価を実施している。

平成21年度に“学生による授業評価”を実施した大学のうち、授業評価の結果を授業改善に反映するための組織的取組が行われているのは、603大学(約80%)。



『あんな授業評価をいつまで続ける気だ！学生に教員を評価できるはずがない』

『外注にするか...』

『せっかくのアイデアも、トップが変わってしまったから...』

『最初の頃は良かった、最近はマンネリになってしまっ...』

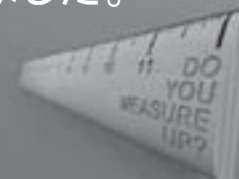
『どうしよう回収率...』

『あまりに学生の自由記述がひどい...』

では、これらが解決すれば授業アンケートも安心？！



マネジメントに関わる視点(経緯の理解、ねらい、実施目標、実施組織、実施方法、アンケート項目、実施手順...)に加えて、「授業アンケート」そのものに関わるだろう視点をマインドマップに整理してみました。





こうした授業評価が行なわれるようになったのは、直接的には六〇年代末の学生運動がきっかけとなったとされているが、根底的には、アメリカ社会の消費者保護の思想に連なるものではなかろうか。大学教育というサービスを買う消費者としての学生に対し、彼らが適切な選択をできるように、先輩が授業をどう評価しているかの情報を提供し、消費者の権利を保護するという考えである。つまり料理のよしあしは、料理を食べた者に判断させるべきだという考えである。どんなに著名な学者でも、まず教師としての授業評価をまぬがれることはできない。なぜなら、アメリカでは大学教授の任務は研究能力もさることながら、まず第一に学生の教育にある、と考えられているからである。

喜多村和之1990『大学淘汰の時代－消費社会の高等教育』(中公新書965), 125-6頁

前提にとらわれていないか

- 学生は「消費者」である
- 教員は「講師」である

teaching (teacher centered)

『教員が、何を(どのように)教えたか』
という考え方のもとでの授業アンケート
＜満足度の時代＞

DO
YOU
MEASURE
UP?

前提から考え直せるか

- 学生は「学習者」である
- 教員は「学びの体現者」である

teaching & learning (learner centered)

『学生は、何が(どれくらい)できるようになった』
という考え方のもとでの授業アンケート
＜学習成果の時代＞

DO
YOU
MEASURE
UP?

新たな悩み

- 受講者として講義の効率性を測定する評価から、学習者として授業における学習経験や達成を自己評定する評価へ、全面的にシフトするのか？
- 学生や教員の役割、授業観の変化(方略・方法の多様化)を踏まえたとしても...授業実践に関する改善情報は、やはり必要



試しに作ってみました！

一方、生活実態調査は？

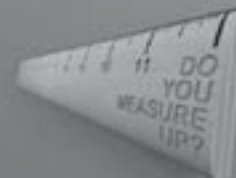


制作秘話？

- データを見てもらおう、興味をもってもらおうとしていた...だろうか？
- その後に何を続けることができるか？

Thank You !

gakutnk@artsci.kyushu-u.ac.jp



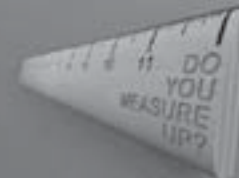
これからの授業アンケートと生活実態調査を考えるために

岡崎成光(早稲田大)



【自己紹介】

4年の学生生活と25年の職員生活



【学生の授業評価アンケートと学生生活調査】

早稲田大学では、両方とも全学的な取組

授業評価→各教員の授業改善の資料として活用

学生生活調査→学生の意識調査と生活実態からの支援施策の資料として活用



【学生の授業評価アンケートの役割の変化】

悲しきエピソード

カスタマー・サティスファクション(CS)

学生の「主体的な学習」「自主性」が大事

「コレって、何の役に立つの」

教員からのフィードバックという双方向性

学生と教員の双方向のやり取りを社会一般にも
開示



【学生生活調査への学生の関心度の変化】

回答率

2001年度版→9.41%

2012年度版→41.4%

学生の大学に対する期待の高まり



【留意点】

大学の活動に期待している層
大学から積極的にアプローチしている層
両者の中間に位置する学生層
学生の大学に対する期待の高まり



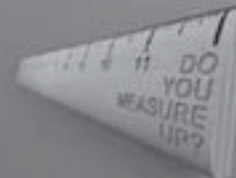
【結びに】

「大学を良くしたい」

目的意識→確認と明確化



Thank You !
okazaki@waseda.jp



Questions? Comments?
We are happy to help you!



Dialogue



Thank You !

セッション2: これからの授業アンケートと生活実態調査
大学評価・学位授与機構 平成25年度 大学評価フォーラム
「学生からのまなざしー高等教育質保証と学生の役割ー」
2013年07月22日(月)15時05分～16時15分
一橋記念講堂




Group Session 3 Students Review?!

NIAD-UE University Evaluation Forum
2013
Student's Role in Higher Education
Quality Assurance



Agenda

1. Introduction to the session
 2. Summary of student involvement in European QA
 3. Discussion
 4. Summary and report proposal
-
- 

Introduction to the session

- What does the title of the session, *Students Review?!* imply?
 - Discussion among participants forms the main part of this group session.
 - Summary of our dialogue will be reported at the general session.



3

Summary of student involvement in European QA

- Revisiting the European HE environment that enables student engagement in quality assurance and enhancement.



4

Discussion

1. What is the QA situation practiced by students in Japan?
2. What are the key differences between Japanese and European practices?
3. Do we want to have more student participation? If so:
 - a. What part of the institutional side is delaying student participation?
 - b. What part of students' side is delaying their participation?
 - c. What are the main challenges for significant participation by students?



5

1. QA situation practiced by students in Japan

- Course evaluation by students
- Participation of students in faculty development programs



6

2. Key differences between Japanese and European practices

- Internal institutionalization
- External institutionalization
- Students' enthusiasm

...and more?



7

3. If we want to have more student participation

- a. What part of the institutional side is delaying student participation?
- b. What part of students' side is delaying their participation?
- c. What are the main challenges for significant participation by students?



8

Summary and report proposal

- Summary of our dialogues to be presented in the general session.





 内部質保証への効果的な学生参画と
大学マネジメント

Nik Heerens - NIAD-UE Forum, Tokyo - 22 July 2013 1



 Effective student engagement in internal
Quality Assurance and University management

Nik Heerens - NIAD-UE Forum, Tokyo - 22 July 2013 2

発表概要

内部質保証への学生参画と大学マネジメント：

- どういうものか？
- なぜ重要なのか？
- 学生はどの領域に関与しなければならないか？
- それを機能させるには？



www.exeter.ac.uk

3



Overview presentation

Student engagement in internal quality assurance and university management:

- What is it?
- Why is it important?
- In which areas should students be involved?
- How to make it work?



www.exeter.ac.uk

4



学生参画とは何を意味するのか？

1. 学生参画の話をするとは、学生が自分の教育経験の積極的な参加者および管理者であることを認識することである。参画(Engagement)は、下記に示した関連する用語より高いレベルの意味、すなわち、責任、権限付与、および学生に与えられたコントロールを表すので、*相談(Consultation)*、*関与 (involvement)*および*参加(participation)*のような他の関連語と区別することができる。

2. 「学生は自身の学習と成果の共同責任を持つ意欲的なパートナーである。高等教育の定義する特徴の一つは、この意欲的な参加に頼る範囲、学生の所有権、学習プロセスである」 (QAA Scotland, 2008).

3. 学生参画は、二つの独立しているが、関連する状況にある：機関マネジメントと質保証内の学生参加及び個々の学習経験を伴った学生参画



What does student engagement mean?

1. To talk of student engagement is to recognise that students are active participants in and directors of their own education experience. *Engagement* can be distinguished from other related terms such as *consultation*, *involvement*, and *participation*, because it depicts a higher level of association, responsibility, empowerment and control afforded to the student.

2. “Students are active partners with shared responsibilities for their own learning and achievement. Indeed, one of the defining characteristics of higher education is the extent to which it relies on this active participation in, and student ownership of, the learning process” (QAA Scotland, 2008).

3. *Student engagement exists in two separate but related contexts: the participation of students within institutional management and quality processes and students’ engagement with their own individual learning experience.*



内部質保証と大学マネジメントへの効果的な学生参画の利点は何か？

「大学は、職員と学生との協力を通して学習目標を達成するコミュニティである。学生や機関の職員の間で誓約された協力は、本格的かつ建設的な対話の可能性を切り拓き、より包括的で学習活動からのフィードバックを反映し、その質的向上のための機会を提供する。」 (Cross Sector group on student engagement England & Northern Ireland).



What are the benefits of effective student engagement in internal QA and University management?

“Universities are communities of learning achieved through a partnership between staff and students. A committed partnership between students, as active participants, and the staff at an institution will open up possibilities for authentic and constructive dialogue, offering the opportunity for more holistic and reflective feedback and enhancement of learning.” (Cross Sector group on student engagement England & Northern Ireland).



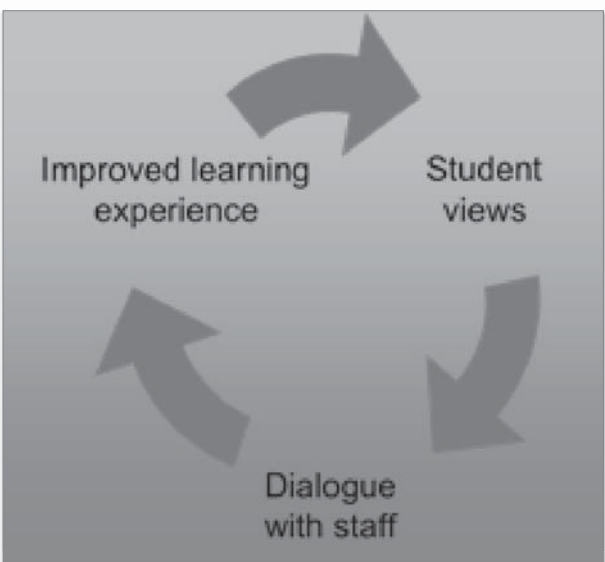


**フィードバック
サイクル**

質改善を中心にした職員
と学生間の対話

UNIVERSITY OF
EXETER www.exeter.ac.uk

9

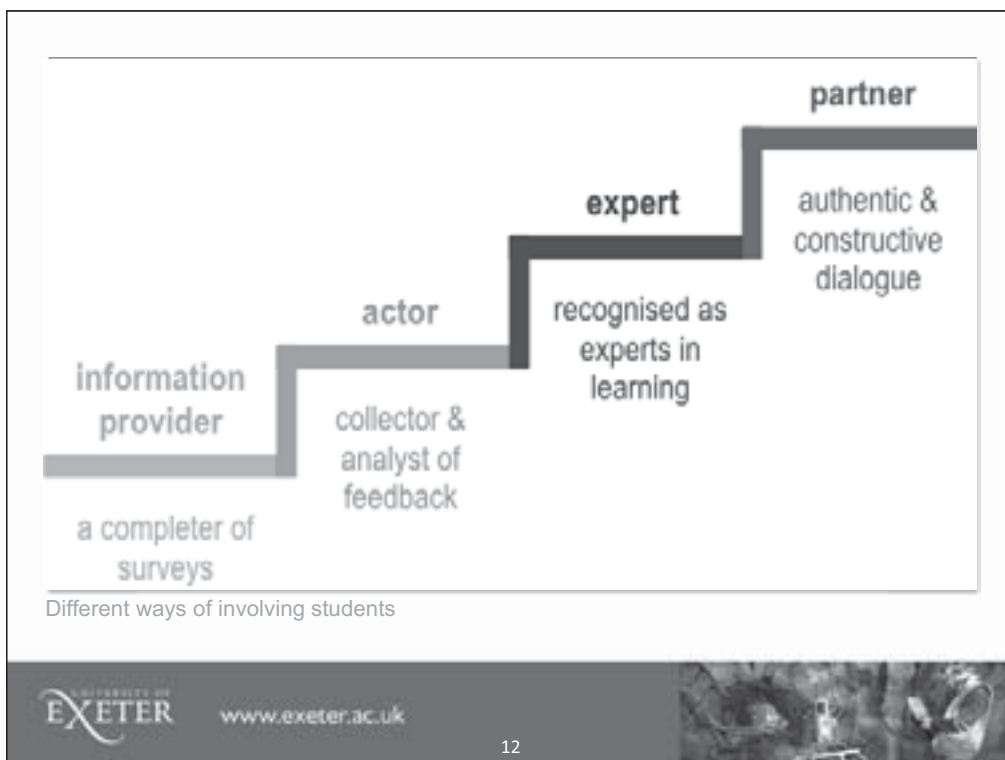
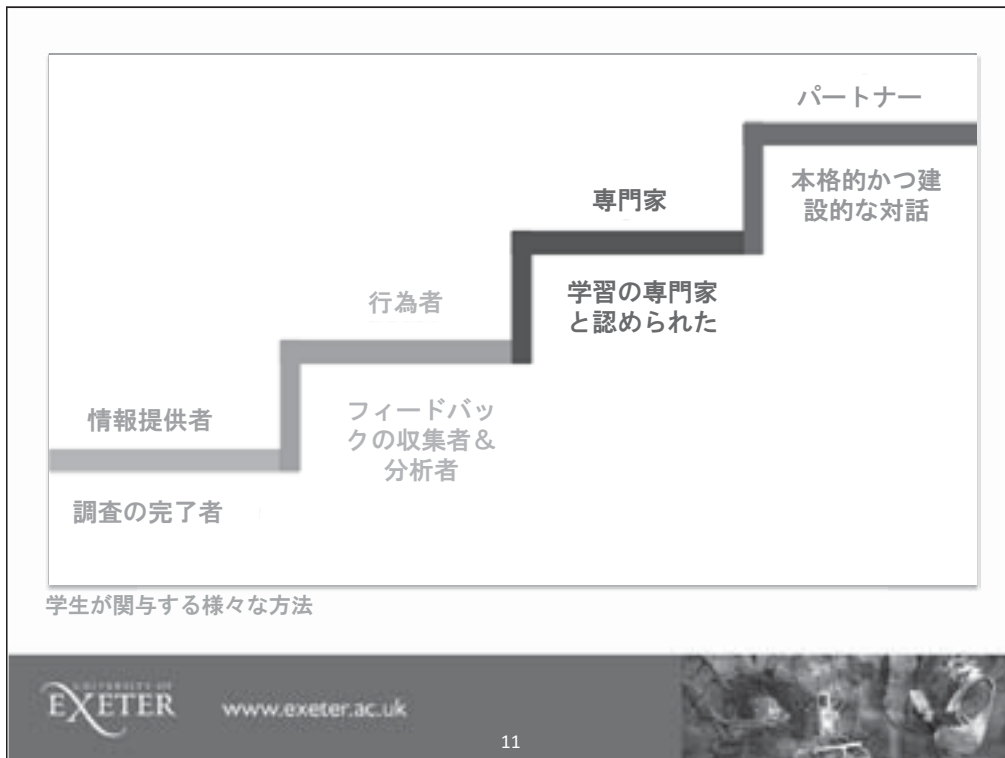


**Feedback
cycle**

Dialogue between staff
and students at the heart
of quality improvement

UNIVERSITY OF
EXETER www.exeter.ac.uk

10

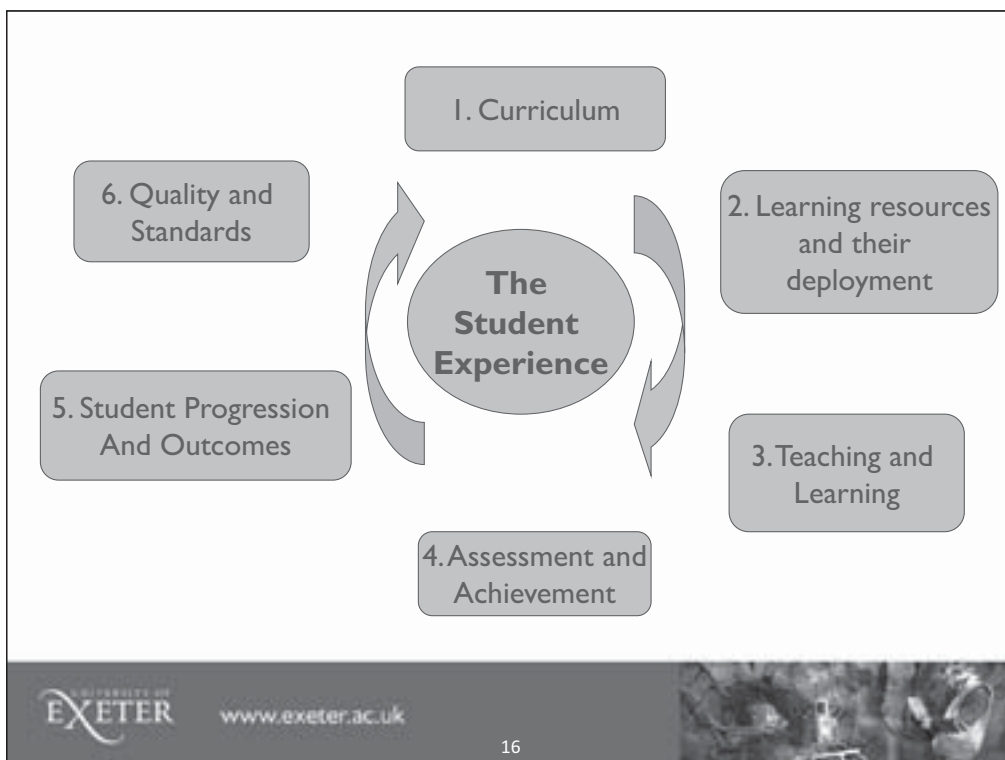
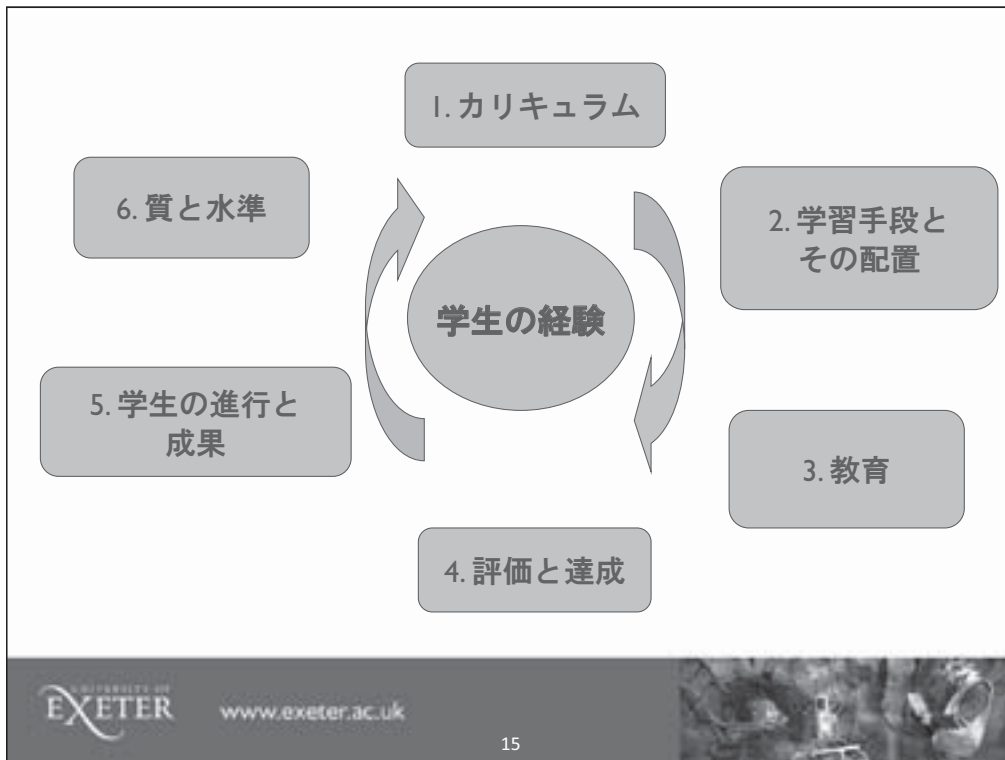


学生参画の成果及びプロセス

- 参画の成果は、学生から継続的に有益なフィードバックとアイデアが来ることであり、教育の質の向上という目的の達成のために、職員がそれらから学び、応じ、活用することで、彼らを奨励することができる。
- 参画のプロセスは、学生の内的側面を成長させる行為であり、それは彼らの能力を向上させ（例えば、分析、交渉、調査、発表スキル）、よりすぐれた学習者、よりすぐれた個人及びよりすぐれた市民を作ることである。

The outcome and the process of student engagement

- *The outcome of engagement* is continually useful feedback and ideas coming from students; these can encourage staff, who can learn from, respond to and employ them in enhancing the quality of education
- *The process of engagement* is an inherently reflective activity, which increases students' competences (e.g. analytical, negotiation, research and presentation skills) and make them better learners, better individuals and better citizens



実際に効果的な学生参画を機能させるには？

1. 学習に対して、より積極的に、より関心を持ち、より責任を負うように学生を支援し、奨励する
2. 学生と職員間の相互理解を奨励する
3. 教育プロセス及び改善方法の強みと弱みを特定するのに役立つような、フィードバックや視点及び見識を得るために学生と共同関係を築く
4. カリキュラム、教育、及び学生経験の全ての側面について意思決定に学生を巻き込む
5. 大学内及び大学間で学生参画のグッド・プラクティスの例を交換する

How to make effective student engagement work in practice?

1. Support and encourage students to become more active, more interested and more responsible for their own learning
2. Encourage mutual understanding between students and staff
3. Engage with students to obtain feedback, perspectives and insights that will help to identify strengths and weaknesses in teaching and learning processes and ways of improvement
4. Involve students in decision-making about their curricula, teaching & learning and all aspects of the student experience
5. Exchange examples of good practices of student engagement within and between universities

学生参画への課題

学生の視点から：

- 学生は学生参画が彼らにとって何を意味するか、またそれが学習経験全般をどう改善することに寄与するのか十分に認識する必要がある
- 学生参画を効果的なものにするには、職員がどのように効果的に学生を励まし、情報を共有してゆくかに大きく依存する
- 学生が効果的に参画できるような適切な条件（方針、プロセス、募集、人間関係）
- 多くの場合、学生が適切に発言できるようになるためには、学習についてよく咀嚼し、理解できるような機会と支援が必要になる

Challenges to student engagement

From a students' point of view:

- Students need to be sufficiently aware of what student engagement means for them and how it will improve their overall learning experience
- Effective student engagement is largely dependent on how effectively staff can encourage and inform students throughout their student journey
- Correct conditions (policies, processes, buy-in, relationships) so that students can effectively engage
- In many cases students will need the opportunity and assistance to effectively reflect upon their learning in order to be able to comment on it successfully

学生参画への課題

職員の視点から：

- 学生参画は多様な意味を持ち、人々が置かれている状況によってその捉え方は異なる。したがって、学生参画はすべての者が同じ成果を求めるものではない。
- 学生のどのレベル（個人か、もしくは代表か）の参加を得られるのか、またその獲得方法については不確実性を伴う。
- 学生との関係構築をいかにうまくできたのか、また失敗したのかという過去の経験が、職員が学生参画をいかにとらえるのかに影響を及ぼす。



Challenges to student engagement

From a staff point of view:

- Student Engagement means different things to different people and therefore achieving student engagement won't necessarily be the same for all
- Uncertainty about how to get the most out of student engagement both at the individual and representative level
- Past successes or failures with students can have an impact on how positively staff view student engagement



学生参画の改善: 考慮すべき更なる問題

- 個人及び代表の参画に適したふさわしい状況か? - 方針、手順、機会
- この参画の機会は、異なるタイプの学生にも利用可能か?
- 効果的に参画するために必要な正しい情報や知識を学生が持っているか
- 参画のタイミングは適切か?
- 学生は、自らがアクティブな学習者として、あるいは共に学習環境を作り上げる共同者として成長するために、学生参画の経験を十分にいかしているか?



Improving student engagement: further issues to consider

- Are the right conditions in place for individual and representative engagement? – policies, procedures, opportunities
- Are different types of opportunities for engagement available for different types of students?
- Do students have the correct information or knowledge to be effectively engaged
- Is the timing of engagement right?
- Are students building on their experience of being engaged and having that opportunity to develop as co-creators or active learners?





 内部質保証への効果的な学生参画と大学マネジメント

Nik Heerens - NIAD-UE Forum, Tokyo - 22 July 2013 25



 Effective student engagement in internal Quality Assurance and University management

Nik Heerens - NIAD-UE Forum, Tokyo - 22 July 2013 26

Why student engagement in university management is necessary?

Kazuo Kitahara. July 22

From principle: As a largest part of stakeholders of university, students should be involved in the management or at least the voice of students should be reflected on the management.

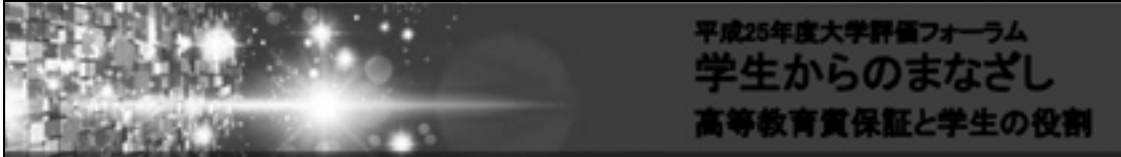
From educational view: As the training field of management, campus management is appropriate. There should always be active challenge of new concepts and new ideas on the campus because the university campus is the place of creation of seeds of innovation of science, technology and society. The inflow of new students every year vitalizes the campus by bringing innovative ideas whether they may still be immature but worth trying. In this sense, the engagement of students in management of campus can be regarded as training for real challenge of society's issues after their graduation. Also students can make experiment of their innovative ideas of management on campus: indeed even if they make mistakes or errors, they may be corrected by the support of professionals on campus.

So from the two views mentioned above, I believe that engagement of students in university management is quite effective.

From Research Freedom viewpoint: Nagoya University Case

Physics Department of Nagoya University introduced participation of students' representative in department education meeting in 1946 to facilitate research with perfect freedom of thought and with efficient collaboration for common goals of laboratories, which themselves are managed with "laboratory democracy".

Actually it is commonly accepted that Kobayashi-Masukawa work, which led to the Nobel Prize later, was done in the atmosphere of freedom at this department when they were at their young age.



平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション1

学生参画型FDと質保証

- ・質保証に対する社会的説明責任を果たすことが今の大学の急務
- ・教員だけのFDには限界がある
- ・学生参画を質保証に結びつけるには、制度化・組織化が重要

学生参画型FDにとりくんでいる大学: 25/53 (わからない5)
質保証に使える: 13 (まったく使えない3)
学生FDは何をすべきか
意見交換会: 17 学生発案型授業: 6 フォーラム: 11
貴学で実現できるか?: なんとかできそう20 (とても無理2)

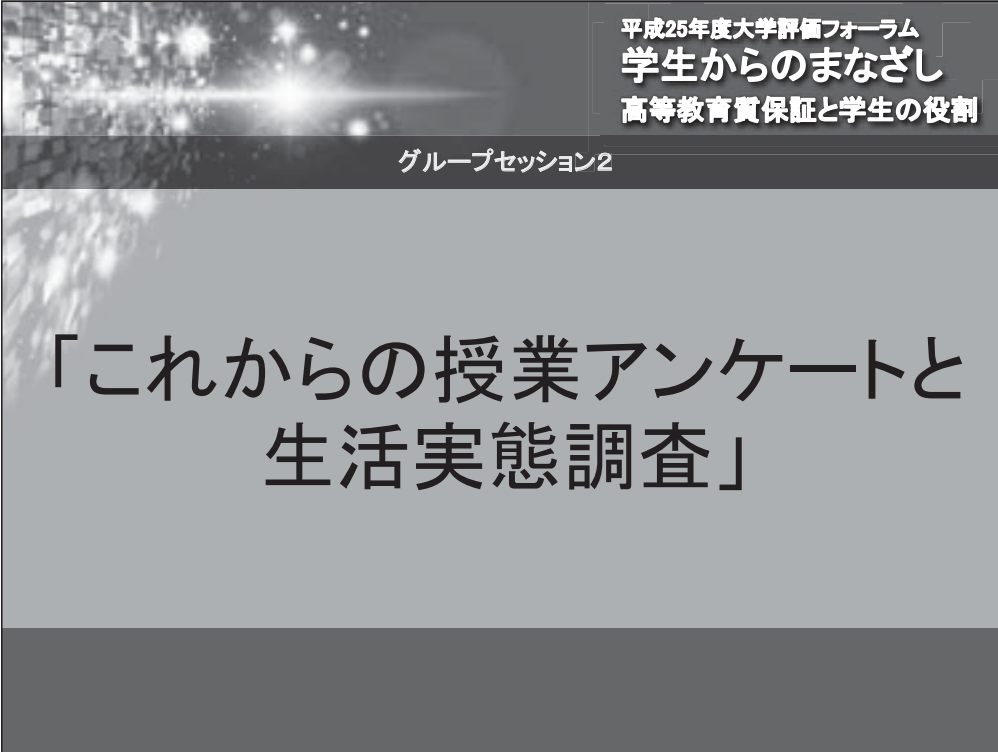
学生の具体的な意見を取り入れる上で学生参画型FDは有効
→成果を計測し、質保証に結びつけることが重要。

質問者E:

今宮さん (GS1報告者) に質問ですが、なぜ学生参画型FDが有効なのでしょう
か。

今宮 加奈未 (日本大学) :

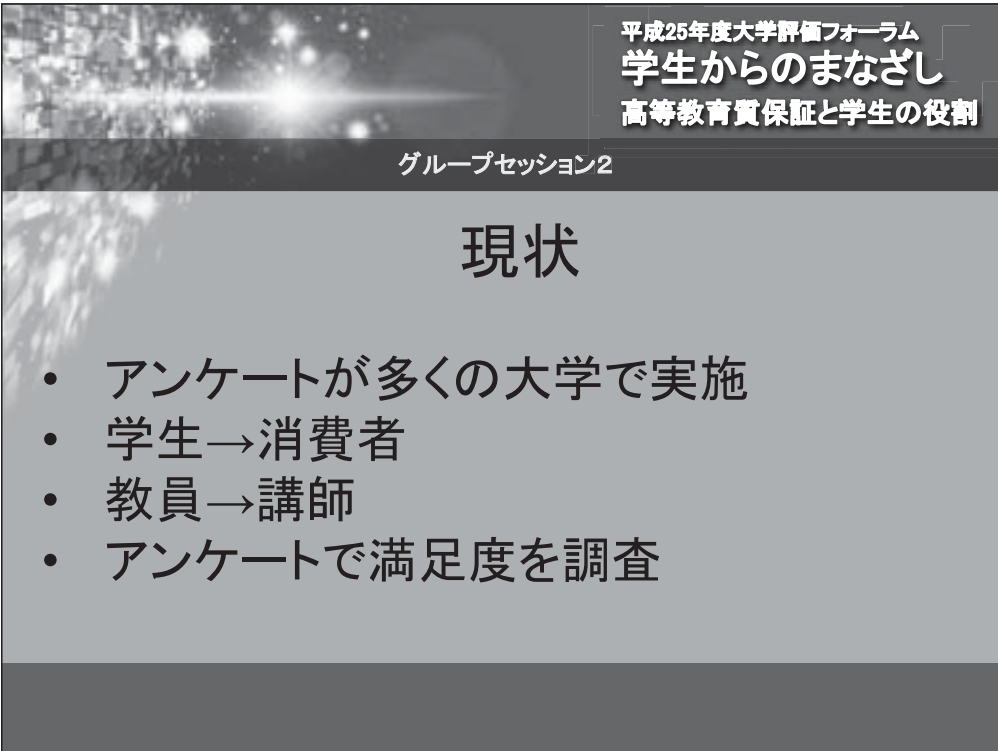
学生参画型FDの推進がなぜ質保証につながるのか、ということですが、学生
参画型FDとは平たく言えば教育改善の活動に学生の意見を取り入れる、という
ことです。具体的に申しますと、例えば授業改善ついて、ここはこうした方が
良いという意見を学生から直接得ることで、教員が新しい気づきを得ることが
見込めますし、いくつかの大学では実例も見受けられます。多様な学生の意見
を取り入れる、学生のニーズを把握するための具体的な体制として、学生参画
型FDが役に立つという視点から、質保証につながるとまとめさせていただきました。



平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション2

「これからの授業アンケートと 生活実態調査」



平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション2

現状

- アンケートが多くの大学で実施
- 学生→消費者
- 教員→講師
- アンケートで満足度を調査

平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション2

課題

- データの見せ方
- 学生をどうとらえるか？消費者？
- 調査の設計時点における学生の参画？

平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション2

提案

- アンケート設計の学生参画
- はっきりとフィードバック
- 調査方法の工夫

会場では・・・

平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション2

考察

- 大学と学生の相互理解
が必要



Report from Group Session 3 Students Review?!


Reporter: KONO Momo (Kobe University)
NIAD-UE University Evaluation Forum 2013
Student's Role in Higher Education
Quality Assurance



Major Premise

Simply imitating activities practiced in other societies (e.g. European countries) without paying attention to difference in cultural/historical contexts is not promising

- Student participation to the process of QA is something rare/limited in the Japanese higher education environment.
- There should be differences between Japanese and European contexts.

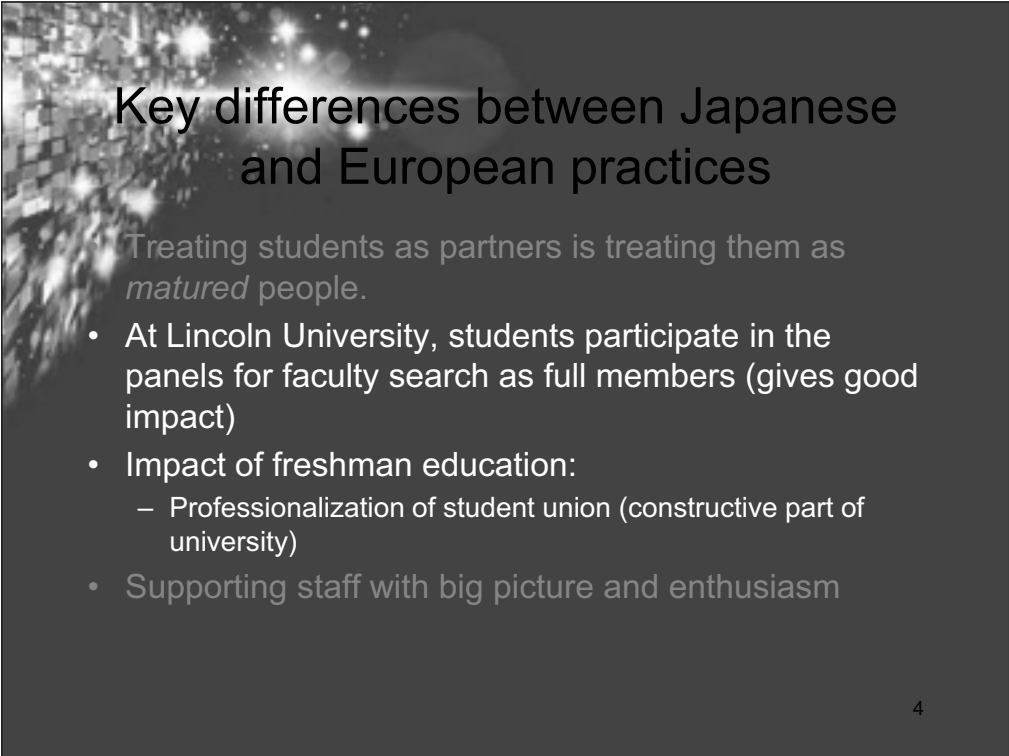


Summary of student involvement in European QA

Students as full members/partners of QA

- Support for students, staff, institutions

3



Key differences between Japanese and European practices

Treating students as partners is treating them as *matured* people.

- At Lincoln University, students participate in the panels for faculty search as full members (gives good impact)
- Impact of freshman education:
 - Professionalization of student union (constructive part of university)
- Supporting staff with big picture and enthusiasm

4

How students can be involved: what is deterrence?

Limited opportunity for Japanese students to participate in QA process


- Less motivated/inspired: higher emphasis on future employability
- Very limited Student Union (enforced in UK in the process of tuition-raise)
- Faculties' perspective to students: partners or consumers?
- Students' confidence to serve as partners in QA process

5

What are required to inspire students to be engaged?

Not to try to have 100% coverage of students.


- Various students have various voices



What are required to inspire students to be engaged?

Flexible and interesting process of engagement is desirable.


- making it *fun*, otherwise even faculty members will be bored!
- Making a “hoop” to sustain students’ participation.



What are required to inspire students to be engaged?

Use of SNS

- For ex. QAA produces message for students on YouTube
- Facebook page of UK University President
- Senior managers to reach students
- Online feedback system (students are invited via email)



平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

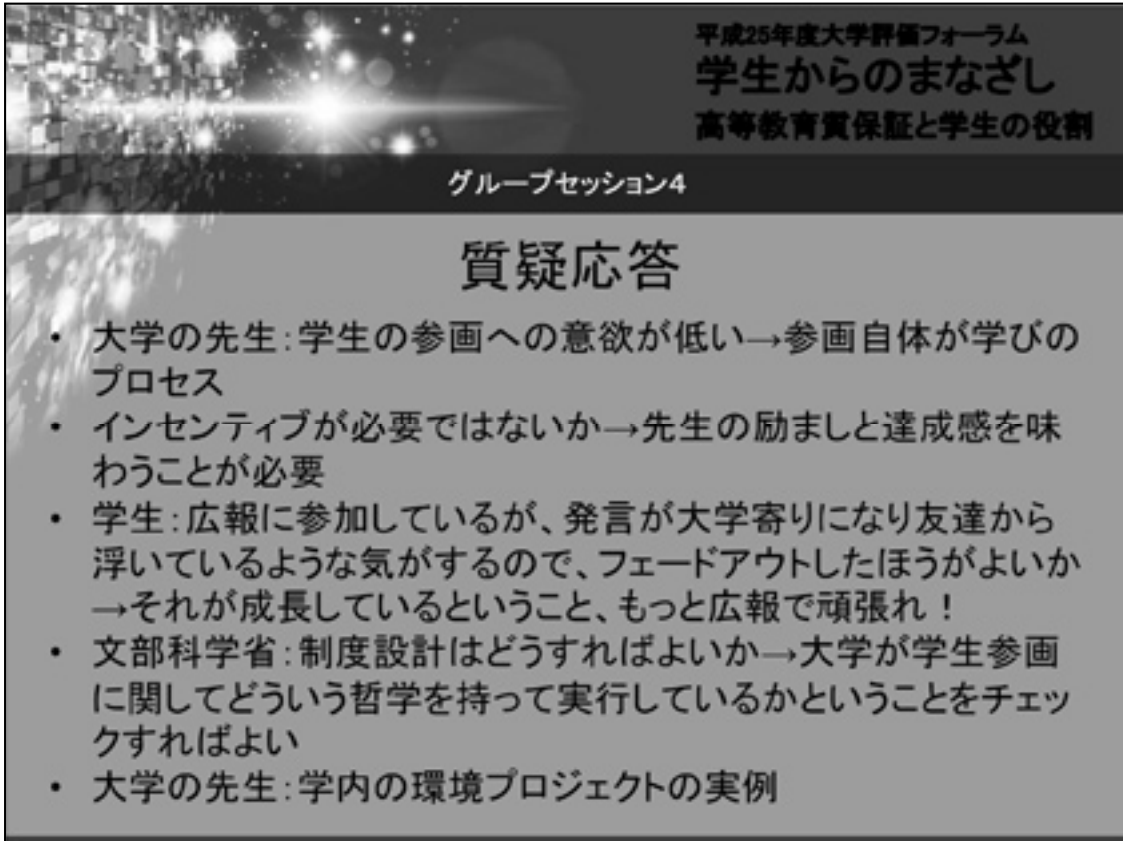
グループセッション4

Nik Heerens さん
内部質保障への効果的な学生参画と大学マネジメント
学生が学びの専門家である→ラーニングとティーチングは別である。先生はティーチングの専門家であるかもしれないが、学生はラーニングにおいては専門家である。
効果的な学生参画
学生参画の利点
学生参画を機能させるために
効果的な学生参画のための課題

北原先生
国際基督教大学:学生寮の寮則決定における学生参画
名古屋大学物理学教室憲章

質問者F:

長坂さん（GS4報告者）に質問です。学生はlearningの専門家であり、学生が参画する上で大切なことは学生が民主的な市民へ育つことだという箇所がありました。授業を行い、テストで測るといったように、知識を与えて、その知識をどの程度捉えたかを評価をするような授業をそのまま行っているのは、消費者モデルから脱却できないと思うのです。どうしたら学生さんがlearningの専門家として自覚ができ、私たち教員もteachingの専門家として自覚を持ち、そして対等なパートナーシップを取ることができるのでしょうか。今の学生と教員の関係は、決して対等ではないと考えています。学生と教員がパートナーシップを取るためには、learningの専門家とteachingの専門家でないで、話しが上手く行かないと思っています。どうしたら、現状を乗り越えられるのでしょうか。あなたが感じた答えでも構わないのですが、教えていただきたいと思っています。



平成25年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし
高等教育質保証と学生の役割

グループセッション4

質疑応答

- 大学の先生: 学生の参画への意欲が低い→参画自体が学びのプロセス
- インセンティブが必要ではないか→先生の励ましと達成感を味わうことが必要
- 学生: 広報に参加しているが、発言が大学寄りになり友達から浮いているような気がする、フェードアウトしたほうがよいか→それが成長しているということ、もっと広報で頑張れ!
- 文部科学省: 制度設計はどうすればよいか→大学が学生参画に関してどういう哲学を持って実行しているかということをチェックすればよい
- 大学の先生: 学内の環境プロジェクトの実例

長坂 佳世（岡山大学）：

私は専門家ではありませんので、満足いただける回答ができるか分かりませんが、今の日本の学生はどうしても単位の修得にばかり目が行ってしまっていて、なかなかlearningの専門家としての意識が育ち難いと思います。しかし、Heerensさんが講演の中で、今は大学に行けば良い職に就けるというような時代ではなくなってきている、大学で学ぶ以外に何かプラスアルファのことをしないとイケない状況になってきている、とおっしゃっていました。私は、そのことを学生が自覚して行くことが大切で、それが第一歩だと思います。

大学評価フォーラム

学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

登壇者略歴
報告学生紹介



登壇者略歴

BIOGRAPHY



ヘルカ・ケカライネン

欧州高等教育質保証協会（ENQA）副会長、
フィンランド高等教育評価カウンシル事務局長

Helka Kekäläinen

Vice-President of the ENQA,

Secretary General of the Finnish Higher Education Evaluation Council
(FINHEEC)

ヘルカ・ケカライネン氏は、2008年から欧州高等教育質保証協会（ENQA）のボードメンバーとして活躍し、現在は副会長を務める。ENQAではこれまで、バルカン諸国や中央アジアにおけるキャパシティ・ビルディング・プロジェクト、評価機関の評価者のトレーニングやENQAの出版物に携わってきた。また、ケカライネン氏はフィンランドのヘルシンキに所在するフィンランド高等教育評価カウンシル（FINHEEC）の事務局長でもある。

ケカライネン氏は演劇学の博士号を取得しており、現職より以前には、ヘルシンキ大学で、1年間演劇学の教鞭をとっていた経験も持つ。

Helka Kekäläinen is the Vice-President of ENQA (European Association for Quality Assurance in Higher Education) and has served in the Board since 2008. She has been involved in capacity building projects in Balkans and Central Asia, training of agency reviewers and ENQA publications. Her daily work is the Secretary General of FINHEEC (Finnish Higher Education Evaluation Council), which operates in Helsinki Finland.

Prior joining FINHEEC, she worked at the University of Helsinki. She had her Ph.D. in Theatre Research and she was the Acting Professor of Theatre Research in the University of Helsinki for one year.



平成 25 年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

NIAD-UE University Evaluation Forum 2013
'Student's Role in Higher Education Quality Assurance'

登壇者略歴
BIOGRAPHY



ダン・デリコット

リンカン大学学生参画オフィサー、
英国高等教育質保証機構（QAA）ボードメンバー

Dan Derricott

Student Engagement Officer at University of Lincoln, board member, Quality Assurance Agency for Higher Education (QAA)

ダン・デリコット氏は、英国リンカン大学の学生参画オフィサーとして、教育の質向上の取組みへの学生参画を推進する全学戦略の策定、実施及び点検評価を先導している。副学長補佐を直属の上司とし、副学長と執行部チームを定期的にサポートしている。同氏は、最近、リンカン大学を卒業し、現在はヨーク大学の公共政策およびマネジメントの修士課程（通信教育・パートタイム）にも在学中である。

デリコット氏は英国高等教育質保証機構（QAA）の理事会の学生メンバーでもあり、QAA 理事会や幹部に、学生の視点から政策や戦略について助言する QAA 学生諮問委員会の議長を務めている。

また、欧州大学協会（EUA）及び欧州高等教育質保証協会（ENQA）が実施する大学の第三者評価や、質保証機関のメタ評価において、学生評価者を務めている。質保証への学生参画を推進するために、欧州学生ユニオンと連携し、欧州質保証フォーラムの運営委員会、質保証の専門家や大学の指導者が集まる主要な国際会議において学生ユニオンを代表して参加している。

Dan Derricott is Student Engagement Officer at the University of Lincoln in the United Kingdom. In this role Dan leads on the development, implementation and evaluation of the University's Student Engagement Strategy which aims to involve students more actively in the enhancement of educational quality. Dan reports directly to the Deputy Vice-Chancellor and regularly supports the Vice-Chancellor and the Senior Management Team to involve students at a strategic level. Dan is also a recent graduate of the University of Lincoln. He is currently studying part-time online for a masters degree in public policy and management with the University of York.

Nationally in the UK, Dan is the independent student member of the Board of Directors of the Quality Assurance Agency for Higher Education (QAA). In this role, Dan also chairs the QAA's Student Advisory Board which advises the QAA Board and Executive on policy and strategy from a student perspective.

At a European level, Dan is a student reviewer of universities and quality assurance agencies for the European Universities Association (EUA) and the European Association for Quality Assurance (ENQA). He works with the European Students' Union to increase student engagement in quality assurance and represents them on the Steering Committee of the European Quality Assurance Forum, a major international conference of quality assurance professionals and university leaders.

独立行政法人 大学評価・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation



登壇者略歴
BIOGRAPHY



天野 憲樹

岡山大学教育開発センター准教授
同大同センター学生・教職員教育改善専門委員会教員代表
同大同センターIT 活用教育専門委員会副委員長

Noriki Amano

Associate Professor, Center for Faculty Development, Okayama University
Representative of the committee of Students and Teachers Faculty Development, Okayama University
Vice chairman of the committee of e-Learning, Okayama University

天野 憲樹氏は、2006 年より岡山大学教育開発センター学生・教職員教育改善専門委員会副委員長を務め、岡山大学における学生参画型 FD 活動に深く関与している。また、2009 年より同大同センターIT 活用教育専門委員会副委員長も務めている。1999 年より北陸先端科学技術大学院大学にて、情報科学（ソフトウェア工学）の研究・教育に携わり、2003～2004 年までイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校客員研究員。岡山大学に転出後は、活動領域を情報科学から高等教育における FD (Faculty Development) にまで拡げ、2011 年より同大同センター学生・教職員教育改善委員会教員代表。大学教育学会、日本教育工学会、教育システム情報学会、日本 e-Learning 学会、情報処理学会、電子情報通信学会、日本ソフトウェア科学会、ACM、各会員。

1990 年、日本大学文理学部哲学科卒業（文学士）。1996 年、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科修士課程修了（修士（情報科学））。1999 年、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士課程修了（博士（情報科学））。1999 年、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科助手。2006 年、岡山大学教育開発センター准教授。現在に至る。

From 2006, Dr. Noriki Amano is a vice chairman of the committee of Students and Teachers Faculty Development at Okayama University. He is also a vice chairman of the committee of e-Learning at Okayama University from 2009. From 1990 to 1994, he worked at two IT companies as a system engineer. In 1999, he started his professional career at Graduate School of Information Science, JAIST (Japan Advanced Institute of Science and Technology), where he engaged in research and teaching in the field of Information Science (Software Engineering). From 2003 to 2004, he was a visiting scholar of University of Illinois at Urbana-Champaign. After moving from JAIST to Okayama University, he expanded the field of his activities from Information Science to Faculty Development on higher education. He is the representative of the committee of Students and Teachers Faculty Development at Okayama University from 2011. He is a member of LGESJ, JSET, JSiSE, JELA, IPSJ, IEICE, JSSST, and ACM.

He received the B.A. degree from Nihon University in 1990 and the M.S. and Ph.D. degrees from JAIST in 1996 and 1999 respectively. In 1999, he joined the Graduate School of Information Science at JAIST as an assistant professor. In 2006, he moved to the Center for Faculty Development at Okayama University as a senior associate professor.



登壇者略歴
BIOGRAPHY



曾根 健吾

関東圏 FD 学生連絡会前学生代表、
東洋大学 学生FDスタッフ
東洋大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程在籍

Kengo Sone

Former representative of Student FD in Kanto District,
Student FD staff of Toyo University,
Graduate School of Literature (Education), Toyo University

曾根 健吾氏は、2010年9月に東洋大学内で学生参画型FD活動を立ち上げ、2010年9月から2012年3月まで東洋大学学生FDスタッフリーダーを務める。学内では活動開始時から教職員と連携して、主に授業改善に向けた取り組み、学生の生の声を教育改善に活かそうとする取り組み、広報活動に力を入れている。2011年9月から2013年3月まで関東圏FD学生連絡会（法政大学・青山学院大学・立教大学・東洋大学）の学生代表を務め、大学間連携による学生参画型FD活動の活性化に向けて取り組む。これまで、シンポジウム、フォーラム等において学生参画型FD活動、および大学間連携による学生FD活動についての発表を多数行っている。

東洋大学文学部教育学科を卒業後、同大学大学院文学研究科教育学専攻に進学。高等教育を専攻し、現在大学教育学会、日本教育工学会の学生会員。

Kengo Sone had initiated Student FD activities in Toyo University in September 2010, and served as a leader for FD Staff Group with student participation until March 2012. In this role he led on improvement in quality of lectures, reflecting of students voice on the enhancement of educational quality, and promotion of these initiatives in collaboration with academic and university staff. From September 2011 to March 2013, he represented FD-Student Liaison Committee in Kanto region, which is a consortium of four universities; Hosei, Aoyama Gakuin, Rikkyo and Toyo universities. He has given a presentation on FD activities with student participation at many symposia and forums.

Kengo Sone is also a recent graduate of Toyo University. He is currently studying for a masters degree in education with Toyo University. He specializes in higher education, and he joins Liberal and General Education Society of Japan and Japan Society of Educational Technology, as a student member.



登壇者略歴

BIOGRAPHY



田中 岳

九州大学基幹教育院教育企画開発部准教授

Gaku Tanaka

Associate Professor, Faculty of Arts and Science, Division for the Studies of Educational Development, Kyushu University

大学卒業後、会社勤務等を経て、1994年4月～2008年3月まで京都精華大学職員。学生課・入試広報課・教務課等を経て、2004年4月からは「教育推進センター」に勤務。特色GPの採択など学内の大学改革を支援する。2004年度より名古屋大学大学院教育発達科学研究科において高等教育マネジメントを専攻し、修士課程修了。博士後期（Ed.D）課程在学中の2008年4月に、九州大学教育改革企画支援室准教授に着任。

2012年10月1日より現職。2014度から新たにスタートする初年次カリキュラムの開発を担う。Q-Links（九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク）事務局を兼務し、九州・沖縄地域における大学教育改善担当者のネットワークづくりを推進する。

実践研究のテーマは、大学教育改善に資する大学間連携（ネットワーク）の開発、大学における教務系職員の役割、大学教育の効果を高める組織づくり。

After having work experiences at industries, Gaku Tanaka joined Kyoto Seika University as a university staff in April 1994. He had served in many offices including student affairs, student admission, public relations, and teaching and learning. He was involved in the development for the centre of excellence project at the Center for Enhancement of Teaching and Learning where he worked since 2004. When he was studying at a doctoral course (EdD) in higher education management at Nagoya University, he joined Kyushu University as associate professor in the Office for the Coordination of University Educational Development.

He is currently an associate professor at the Division for the Studies of Educational Development since October 2012. In this role he is involved in the development of curriculum for the first year students, which will be introduced in 2014. He is also serving in the secretariat of Q-Links (Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education) which promotes a network in educational development across the regions of Kyushu and Okinawa.

His recent research focuses on the development of networks in educational development, roles of university staff in teaching and learning, and enhancement of teaching and learning through organizational development.



平成 25 年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

NIAD-UE University Evaluation Forum 2013
‘Student’s Role in Higher Education Quality Assurance’

登壇者略歴
BIOGRAPHY



岡崎 成光

早稲田大学教務部調査役

Narimitsu Okazaki

Manager, Academic Affairs Division, Waseda University

岡崎 成光氏は、1989 年に学校法人早稲田大学専任職員として入職し、事務システムセンター、社会科学部、国際交流センター学術交流課（組織改編で教務部国際交流課）、人間科学部事務所（組織改編で所沢総合事務センター）、教務部教務課を経て、2010 年に教務部調査役（企画調査担当）、2011 年には文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室専門官（学務担当）として出向、2012 年から教務部調査役（EMBA 担当）として現在に至る。

Narimitsu Okazaki resumed his career at Waseda University from 1989. He had experienced in several departments including Administrative System Center, School of Social Sciences, Academic Exchange Section of International Exchange Center (later reorganized to Office of International Exchange, Academic Affairs Division), School of Human Sciences (later reorganized to Administrative Office, Tokorozawa Campus), Academic Affairs Section of Academic Affairs Division before taking the responsibility as a Manager for research and planning in Academic Affairs Division. In 2011, he worked as a Senior Specialist (academic affairs) at Office for University Reform, University Promotion Division, Higher Education Bureau in Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. He then gained the current position of a Manager for EMBA in Academic Affairs Division in 2012 to date.



平成 25 年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

NIAD-UE University Evaluation Forum 2013
‘Student’s Role in Higher Education Quality Assurance’

登壇者略歴

BIOGRAPHY



鈴木 典比古

公立大学法人国際教養大学 理事長・学長

Norihiko Suzuki

President and Chair of the Board, Akita International University

鈴木 典比古氏は、1972 年一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了、1978 年インディアナ大学経営大学院博士課程修了。ワシントン州立大学助教授・準教授、イリノイ大学助教授等歴任の後、1990 年より国際基督教大学教授。2000 年国際基督教大学学務副学長を経て 2004 年より国際基督教大学学長（～2012 年）。2012 年 4 月公益財団法人大学基準協会専務理事。2013 年 6 月から現職。

M.A. in Economics, Hitotsubashi University. DBA, Indiana University. Served as Assistant Professor and Associate Professor at Washington State University, Assistant Professor at University of Illinois at Urbana-Champaign, Professor at International Christian University from 1990 as well as Vice President for Academic Affairs at International Christian University from 2000. Appointed as the President of International Christian University in 2004. Served as Senior Managing Director of Japan University Accreditation Association from 2012. Currently the President and Chair of the Board at Akita International University.

独立行政法人 大学評価・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation



平成 25 年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

NIAD-UE University Evaluation Forum 2013
'Student's Role in Higher Education Quality Assurance'

登壇者略歴
BIOGRAPHY



ニコラス（ニック）・ヘレンス

エクセター大学 PhD 研究員、ベルギー-VLUHR 質保証委員会議長、
スコットランド sparqs 元会長、欧州学生ユニオン元代表

Nicolaas (Nik) Heerens

PhD Researcher at University of Exeter, UK
Chair of the Quality Assurance Board of VLUHR (Flemish Universities and University Colleges Council), Belgium, former Head of sparqs (Student Participation in Quality Scotland) and former representative of the European Students' Union (ESU) within the Bologna Process

ニック・ヘレンス氏は、英国エクセター大学の PhD 研究員で、主な研究分野は地域開発における大学の役割、ヨーロッパの高等教育政策（特にボローニャ・プロセス）および高等教育の質保証である。

2010 年から、コンウォール州大学連合(CUC)の研究者として、EU が援助する UNICREDS プロジェクト（高等教育の異なる方法がどのように地域経済開発に利益をもたらすか）に携わっている。また、ベルギーのフランドル大学及びユニバーシティ・カレッジ評議会（VLUHR）の質保証委員会の議長でもある。

sparqs（スコットランドの質に対する学生参加推進機関）の会長を務めていたこともあり、スコットランド財政カウンシル（SFC）、スコットランド大学協会及び QAA スコットランドの委員の経験を有する。また、オランダの質保証機関 QANU ではプロジェクトリーダー、オランダの開発組織 SPARK（旧 ATA）では、主に東南ヨーロッパの大学やカレッジと協力する高等教育プロジェクトのマネージャーを務めた。さらに、独立したコンサルタントとして欧州全域の高等教育の発展に関するプロジェクトにも携わってきた。

2001-2005 の期間には、オランダの学生ユニオン（LSVb）及び欧州学生ユニオン（ESU）の学生代表を務め、最近ではボローニャ・プロセスの枠内で欧州学生の代表を務めていた。外部評価員団の学生メンバーを務めた経験もあり、欧州大学協会（EUA）の質文化運営委員会にも在籍していた。

Nik Heerens is a PhD researcher at the University of Exeter in the United Kingdom. His main research interests are concerned with the role of universities in regional development; European higher education policies (in particular the Bologna Process); and quality assurance of higher education.

Since 2010, Nik is also contributing researcher with the Combined Universities in Cornwall (CUC), in particular in relation to the EU funded UNICREDS projects, which looks at how different methods of higher education can benefit regional economic development. Besides that, he is Chair of the quality assurance board of the Flemish University and University Colleges Council (VLUHR) in Belgium.

Previously, Nik was the Head of sparqs (student participation in quality Scotland) and in this role he served on several committees of the Scottish Funding Council (SFC), Universities Scotland and QAA Scotland. Nik has worked as project leader with Dutch Quality Assurance agency QANU; and was manager, higher education projects, of Dutch development organisation SPARK (formerly ATA), working primarily with Universities and Colleges in South East Europe. Furthermore, he has been involved as independent consultant in several projects related to higher education development throughout Europe.

From 2001-2005 he served as a student representative in the Dutch Students' Union (LSVb) and the European Students' Union (ESU), most recently representing European students within the structures of the Bologna Process. In this capacity, he served as a student member on external review panels; sat on the Quality Culture steering committee of the European University Association (EUA).

独立行政法人 大学評価・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation



平成 25 年度大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

NIAD-UE University Evaluation Forum 2013
'Student's Role in Higher Education Quality Assurance'

登壇者略歴



北原 和夫

東京理科大学教授
東京工業大学・国際基督教大学名誉教授

Kazuo Kitahara

Professor, Tokyo University of Science(TUS)
Professor Emeritus, Tokyo Institute of Technology(TITech) and International
Christian University(ICU)

北原 和夫氏は、2002～2003 年日本物理学会会長、2003～2005 年日本学術会議会員、2006 年より同連携会員、2008～2010 年同大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会委員長、2010～2012 年同大学教育の質保証推進委員会委員長を務める。2012 年から NPO 物理オリンピック日本委員会理事長、2013 年から科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター研究主監を務める。マサチューセッツ工科大学、東京大学、静岡大学、東京工業大学、国際基督教大学において統計物理の研究・教育に携わる。

東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程を修了後、ベルギー政府給費生としてブリュッセル自由大学に留学し 1974 年同大学理学博士の学位を取得。2013 年にベルギー王国よりレオポルド勲章オフィシエ章を受章。

Dr. Kazuo Kitahara was the president of Physical Society of Japan 2002 to 2003, Member of Science Council of Japan(SCJ) 2003-2005, Associated Member of SCJ since 2006; he served as Chair of Quality Assurance of University Education of SCJ 2008-2010 and Chair of Promotion of Quality Assurance of University Education 2010-2012. Since 2012 he is Chair of NPO Japan Committee of Physics Olympiad and Research Director of Science Communication Center of Japan Science and Technology Agency. He has engaged in research and teaching in the field of Statistical Physics at Massachusetts Institute of Technology, University of Tokyo, Shizuoka University, Tokyo Institute of Technology, International Christian University and Tokyo University of Science.

He received Master of Science from University of Tokyo and Doctoral Degree from Free University of Brussels(ULB) during his research at ULB as recipient of Belgian Governmental Scholarship. He was awarded the grade of Officer in the Order of Leopold from Belgium Kingdom in 2013.



平成25年度大学評価フォーラム

学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割

NIAD-UE University Evaluation Forum 2013

‘Student’s Role in Higher Education Quality Assurance’

各グループセッション報告学生 Students

セッション1 (Session1)



今宮 加奈未

日本大学文理学部 4年

Kanami Imamiya

College of Humanities and Sciences, Nihon University

セッション2 (Session2)



石口 純平

青山学院大学経済学部 4年

Junpei Ishiguchi

College of Economics, Aoyama Gakuin University

セッション3 (Session3)



河野 桃

神戸大学大学院経済学研究科修士課程 1年

Momo Kono

Graduate School of Economics, Kobe University

セッション4 (Session4)



長坂 佳世

岡山大学教育学部 3年

Kayo Nagasaka

Faculty of Education, Okayama University

独立行政法人 大学評価・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation

大学評価フォーラム
学生からのまなざし—高等教育と学生の役割

平成26年3月

編集・発行 独立行政法人大学評価・学位授与機構

〒187-8587 東京都小平市学園西町 1-29-1

TEL : 042-307-1500 (代表)